第2章

カリキュラム開発拠点校の取組

（Ⅰ.）開発したカリキュラムの内容

Index

本節では、カリキュラム開発拠点校が実施している5つのカリキュラム開発の内容について、アンケートデータや各校インタビュー結果を用いてご紹介します。

p.06 1. 探究型学習

p.12 2. 外国語や文理等の融合科目

p.16 3. 高大連携・先取り履修

p.19 4. 海外研修・交流

p.24 5. 高校生国際会議

1. 探究型学習

カリキュラム開発拠点校では、高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等とが協働し、海外をフィールドにグローバルな社会課題の解決に向けた探究的な学びを実現するカリキュラムを開発した。カリキュラム開発拠点校では、以下のような探究型学習を開発・実践した。

●探究型学習の全体の流れ

○複数年かけて1つのテーマについて探究学習を行う

○1 年次に練習的なプロジェクトを行い、2 年次以降に本格的な探究を行う

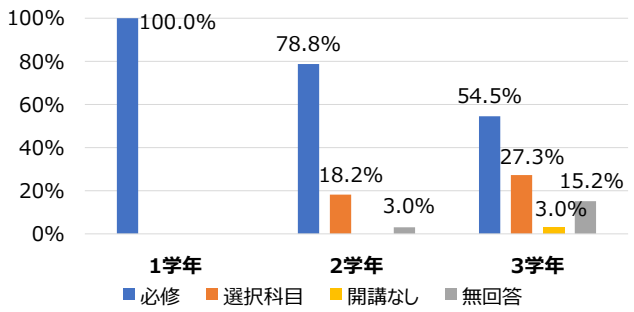
探究型学習は、大きく「複数年（2 年、あるいは 3 年）かけて、1つの探究テーマを設定し探究学習を行う」パターンと、「1 年次に練習的なプロジェクトを行った後、2 年次以降に本格的な探究を行う」パターンがみられる。

前者については、探究活動のテーマ設定に時間をかけるケースが多く、1年次の活動はテーマ設定に重きをおくことが多い。例えば「1 年生では SDGs を学ぶことから始め、学年の最後に 2 年次での探究学習のテーマ設定を行っている」学校や、「3 年間の授業での学習を通じ学校が設置されている市への政策提言を行うことを最終目標としている」学校もみられた。また、「3 年間かけて探究学習に取り組むにあたり、各学年で途中段階の発表を行う機会を挟み、3 年生で全生徒参加の公開研究会を行う」ケースもあった。

後者の方法では、1年目に比較的簡単な探究型プロジェクトを行い、探究型学習の流れを生徒に経験させる。その上で、2 年次から生徒自身がテーマを設定し、本格的な探究活動を行う。例えば「個人研究として、1 年で地域課題研究、2 年でグローバル課題研究、3 年でグローバルキャリアパス（自己の振り返り）を行い「地域」→「グローバル」→「自己」という流れを意識している」学校や、「1 年次に社会的な課題について現場調査を経験した後、2・3 年次の課題研究活動に向かうカリキュラムデザインを組んでいる」学校もみられた。

●各学年の科目の種別

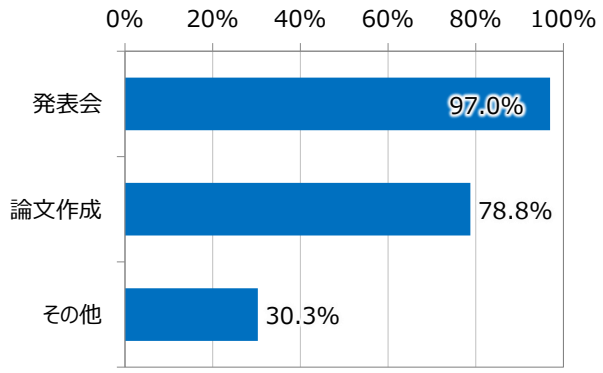
- 探究型学習の実施方法についてみていく。
- 1 学年では「必修」のみだが、学年が上がるにつれて「選択科目」の割合が増加する。



令和 5 年度　各学年の科目の種別（n=33）

●成果の取りまとめ方

- 「発表会」で成果の取りまとめを行った学校が 9 割以上である。



令和 5 年度　成果の取りまとめ方（複数回答）（n=33）

●活動単位

○グループ活動

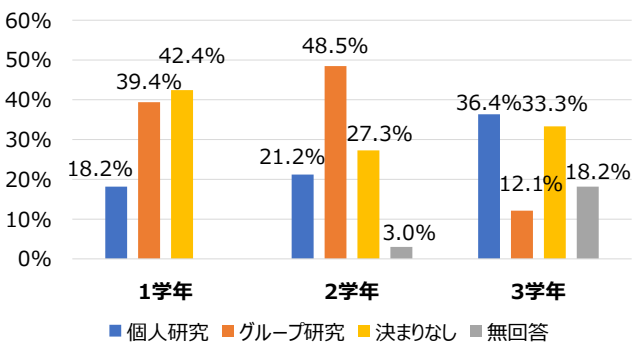
○個人活動

探究型学習の活動単位は、グループで行うケース、個人で行うケースがあった。また、生徒の希望で、グループ、個人のどちらかを選べるようにしている学校もある。

例えば「1、2 年生がグループ活動、3 年生で、1～2 年生の活動について個人で成果をまとめる」ケースもみられた。またグループ構成については、「1 年生はクラス内のグループで探究活動を行い、2 年生ではクラスや文・理系、学科の枠を超え、探究テーマ別に生徒たちで自由にチームを作り本格的な探究学習に取り組んでいる」学校もあった。

●各学年の主な活動の単位

- 1、2 学年では「グループ研究」の割合が高く、3 学年では「個人研究」の割合が高くなる。



令和 5 年度　各学年の主な活動の単位（n=33）

●指導者

○特定の教員が指導
○教員全員が指導
○大学教員に指導を依頼

探究型学習は、特定の教員が行う学校もあるが、教科の枠を超えて学校全ての教員が行う（担当する学生を決め、大学のゼミ・研究室のように指導を行う）学校も多い。例えば「校長・副校長を含めた全教員がかかわり、担当生徒の研究テーマの設定についての助言や進行状況の管理をする等、学校全体で探究学習を進めている」学校もみられた。

大学と連携し、大学教員の専門性を生かした指導をしてもらう学校もある。選んだテーマにあった大学教授に課題研究の指導をうけている学校もある。また、「事業協働機関を中心とした外部講師による講義及びワークショップや、フィールドワーク」等の取組も行われていた。

●海外研修等との連動

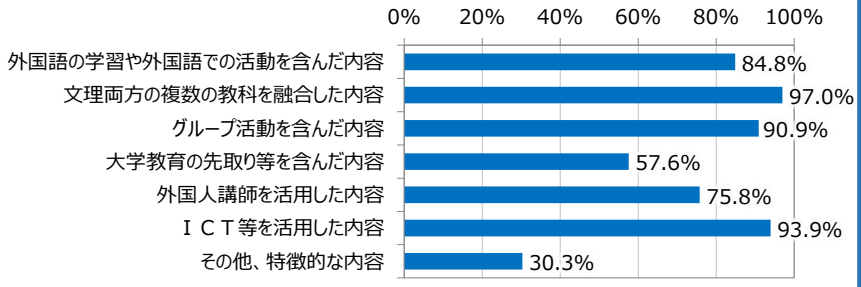
WWL 事業の申請要件として、「海外の連携校等への短期・長期留学や海外研修等を，カリキュラムの中に体系的に位置づけて対象となる生徒が必ず経験するようにすること」が定められているが、この海外研修を探究型学習と連動させて行う学校もある。

探究のテーマに関係するフィールドワーク・体験を海外でおこなうケースや、探究の成果を海外の連携等で行うケースもある。例えば「選択科目として１年生を対象とした「海外研修」を設置し現地の研修だけでなく事前事後研修も含めて週１単位の授業を実施している」学校もあった。

●学習内容や度合い・頻度

●探究型学習の内容

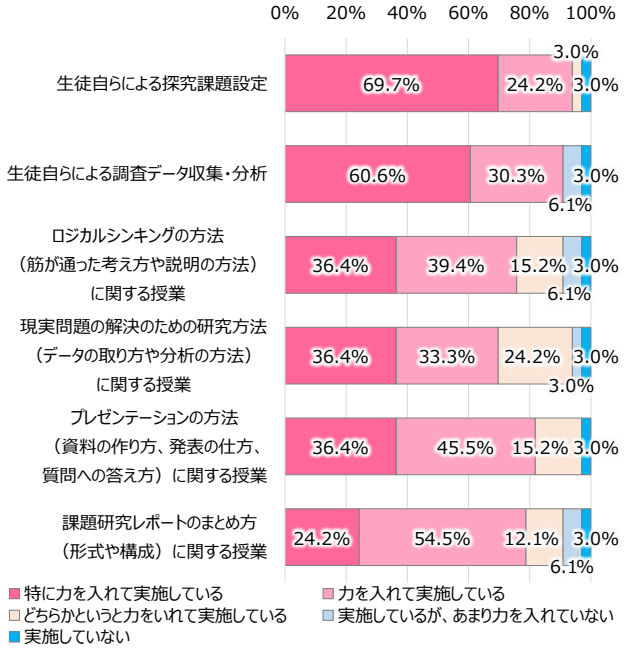
・探究型学習は、８割以上の学校が
「文理両方の複数の教科を融合した内容」
「ICT 等を活用した内容」
「グループ活動を含んだ内容」
「外国語の学習や外国語での活動を含んだ内容」
としている。



令和５年度　探究型学習の内容（n=33）

●探究型学習の実施度合い

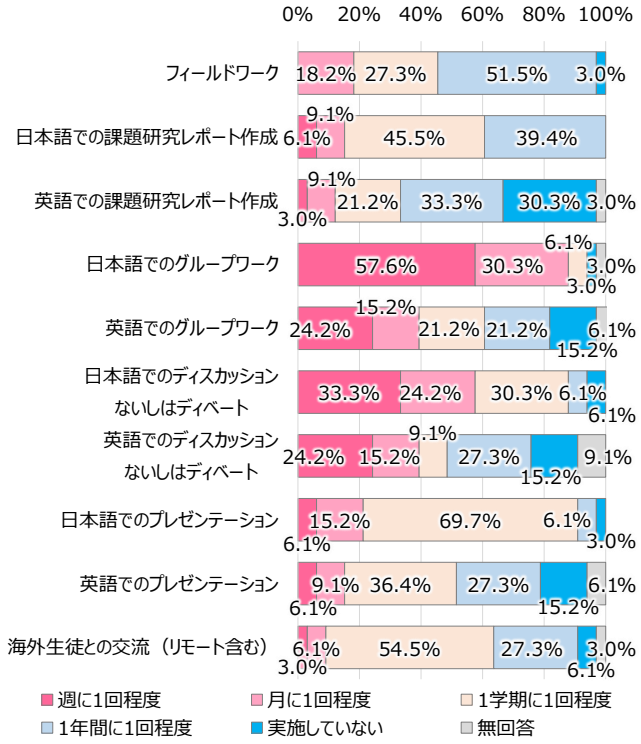
・探究型学習についての各項目は、いずれの学校もほとんどの項目が「力を入れて実施している（特に力を入れて実施している＋力を入れて実施している）」と回答。
・「生徒自らによる探究課題設定」は、約７割の学校が「特に力を入れて実施している」と回答した。



令和５年度　実施度合い（n=33）

●探究型学習の実施頻度

・探究型学習の実施頻度については、「日本語でのグループワーク」は、５割以上の学校が、「週に１回程度」実施している。



令和５年度　実施頻度（n=33）

◆拠点校の「探究型学習」一覧◆

学校名	授業名等	科目種別	研究活動単位	まとめ方
筑波大学附属坂戸高等学校 …p.28	1年生：産業社会と人間、グローバルライフ、グローバルパスポート 2年生：T-GAP 3年生：卒業研究	必修	1年生：決まりなし 2年生：グループ 3年生：個人	・発表会 ・論文作成
東京都立南多摩中等教育学校 …p.30	（中学の3年間から探究学習に取り組む） 1年生：総合的な探究の時間（ライフワークプロジェクト） 2年生：総合的な探究の時間（ライフワークプロジェクト） 3年生：開講なし	必修	個人	・発表会 ・論文作成 ・全国高校生フォーラム等の外部発表会
渋谷教育学園渋谷高等学校 …p.32	1年生：総合的探究の時間・歴史総合（Hiroshima Brochure プロジェクト） 2年生：総合的探究の時間・英語（Partnerships for the goals プロジェクト） 3年生：総合的探究の時間（Research and Analysis プロジェクト）	必修	1年生：グループ 2年生：個人 3年生：個人	・発表会 ・論文作成 ・英語レポートの提出
金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校 …p.34	1年生：総合的な探究の時間「地域課題研究」 2年生：総合的な探究の時間「グローバル課題研究」 3年生：総合的な探究の時間「グローバルキャリアパス」 （カリキュラム開発拠点終了後に「探究ゼミ」へ変更）	必修	決まりなし	・発表会 ・「学びの履歴書」、「学びの設計書」の作成
静岡県立三島北高等学校 …p.36	1年生：総合的な探究の時間「課題の発見と3つのプロポーザル」 2年生：総合的な探究の時間「ビジネスプラン化」 3年生：総合的な探究の時間「研究のまとめ」	必修	1年生：グループ 2年生：グループ 3年生：個人	・発表会 ・論文作成
立命館宇治高等学校 …p.38	全学年 IG コース：総合的な探究の時間「コア探究」 IM コース：総合的な探究の時間「Global Leadership Studies」	必修	全学年 IG コース：決まりなし IM コース：グループ	・発表会 ・論文作成
大阪府立北野高等学校 …p.40	1年生：学校設定科目・国際情報 2年生：専門科目・課題研究，学校設定科目・文科課題研究，総合的な探究の時間 3年生：開講なし	必修	グループ	・発表会 ・論文作成 ・発表動画の撮影と保存
神戸市立葺合高等学校 …p.42	1年生：総合的な探究の時間、GSIA、家庭基礎 2年生：総合的な探究の時間、GSⅡB，GSⅡC、学際国語、学際リサーチ 3年生：総合的な探究の時間、GSⅢC、学際フードデザイン	1年生：必修 2年生：必修 3年生：選択	決まりなし	・発表会 ・論文作成

学校名	授業名等	科目種別	研究活動単位	まとめ方
関西学院高等部 …p.44	1年生:読書科、グローバル探究 Basic(令和元年度開講) 2年生:読書科、グローバル探究 A(AI 活用:令和2年度開講)、グローバル探究 B(ピーススタディ:令和2年度開講)、グローバル探究 C(グローバルスタディ:令和2年度開講) 3年生:読書科、グローバル探究 A(AI 活用アドバンスド:令和3年度開講)、グローバル探究 B(ピーススタディアドバンスド:令和3年度開講)、グローバル探究 C(グローバルスタディアドバンスド:令和3年度開講)	読書科:必修 他:選択科目	読書科:個人 他:決まりなし	・発表会 ・論文作成(読書科) ・プロジェクトの実施
広島県立広島国泰寺高等学校 …p.46	1年生:夢探究Ⅰ、理数探究基礎 2年生:夢探究Ⅱ、理数探究、グローバル平和探究 3年生:夢探究Ⅲ、理数探究	必修	全学年 夢探究:個人 理数探究:グループ	・発表会 ・論文作成 ・パフォーマンス課題
富士見丘高等学校 …p.48	1年生:グローバルスタディ基礎(デザイン思考型の探究学習) 2年生:グローバルスタディ演習「環境・災害・海洋」 3年生:開講なし	1年生:必修 2年生:選択	グループ	・発表会 ・論文作成
長野県上田高等学校 …p.50	1年生:グローバルスタディ(GS)Ⅰ(テーマ設定) 2年生:グローバルスタディ(GS)Ⅱ(探究学習) 3年生:グローバルスタディ(GS)Ⅲ(論文作成など)	1年生:必修 2年生:必修 3年生:選択	1年生:グループ 2年生:個人 3年生:個人	・発表会 ・論文作成
京都府立鳥羽高等学校 …p.52	1年生:総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅰ(京の智の再発見)」 2年生:総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅱ(グローバル・イシュー)」 3年生:総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅲ(英語での発信)」	必修	グループ	・発表会 ・論文作成
同志社国際高等学校 …p.54	1年生:Sustainable Society Study(街づくりに関する基本的な知識とアカデミックスキルを習得する) 2年生:Sustainable Society Research(問題解決の方法論、リサーチの方法について学び、リサーチブックを作成する) 3年生:Sustainable Society Design(リサーチを進め、自治体への提言などを実際に行う)	1年生:必修 2年生:選択 3年生:選択	個人・グループ	・論文作成
大阪教育大学附属高等学校平野校舎 …p.56	1年生:グローバル探究Ⅰ(探究活動の手法・思考ツールを学ぶ) 2年生:グローバル探究Ⅱ(探究的な学習) 3年生:グローバル探究Ⅲ(論文に仕上げる)	必修	1年生:グループ 2年生:グループ 3年生:個人	・発表会 ・論文作成 ・ポスター作成(日本語、英語)
岡山県立岡山操山高等学校 …p.58	1年生:未来航路Ⅰ(課題研究の基礎となる取組) 2年生:未来航路Ⅱ(課題研究) 3年生:未来航路Ⅲ(課題研究)	1年生:必修 2年生:必修 3年生:選択	1年生:決まりなし 2年生:グループ 3年生:個人	・発表会 ・論文作成

学校名	授業名等	科目種別	研究活動単位	まとめ方
広島大学附属福山中・高等学校 …p.60	（中学の3年間から探究学習に取り組む） 1年生：体験イノベーション（探究学習に向けた基礎作り） 2年生：提言Ⅰ・創造Ⅰ（探究学習） 3年生：提言Ⅱ・創造Ⅱ（探究学習）	1年生：必修 2年生：選択 3年生：選択	個人	・発表会 ・論文作成
愛媛大学附属高等学校 …p.62	1年生：SDGs 伊豫学、SDGs 探究Ⅰ 2年生：グローバル・スタディーズⅠ、課題研究Ⅰ 3年生：グローバル・スタディーズⅡ、課題研究Ⅱ、SDGs 探究Ⅱ	1年生：必修 2年生：必修 3年生：選択	1年生：決まりなし 2年生：グループ 3年生：決まりなし	・発表会
中村学園女子高等学校 …p.64	1年生：グローバル探究（「文化」・「栄養」・「経済」・「環境」の４つの切り口で「食」の研究） 2年生：GI 探究（課題研究） 3年生：GI 探究（論文作成）	必修	決まりなし	・論文作成
長崎県立長崎東中学校・高等学校 …p.66	（中学の3年間から探究学習に取り組む） 1年生：総合的な探究の時間、IGR（Integrated Global Research） 2年生：総合的な探究の時間、自主的な活動の時間（E-time） 3年生：総合的な探究の時間、自主的な活動の時間（E-time）	必修	1年生：グループ 2年生：グループ 3年生：個人	・発表会 ・論文作成 ・国際会議
熊本県立熊本高等学校 …p.68	1年生：探究の交響楽 第1楽章（自己の関心の認識、課題やテーマ探し） 2年生：探究の交響楽 第2楽章（地域 SDGs／研究型SDGs） 3年生：探究の交響楽 第3楽章	必修	決まりなし	・発表会 ・論文作成
宮崎県立宮崎大宮高等学校 …p.70	1年生：グローバル協創Ⅰ（プロジェクト学習） 2年生：グローバル協創Ⅱ（グループ課題研究や調査） 3年生：グローバル協創Ⅲ（グループ課題研究や調査）	必修	グループ	・発表会 ・論文作成 ・ポスター作成
北海学園札幌高等学校 …p.72	1年生：総合的な探究の時間（環境・SDGs・進路） 2年生：Academic English、多文化理解、プレゼンテーション 3年生：Academic English、多文化理解、プレゼンテーション	必修	1年生：個人 2年生：グループ 3年生：グループ	・発表会
新潟県立三条高等学校 …p.74	1年生：グローカル探究 2年生：グローカル探究 3年生：グローカル探究	必修	1年生：グループ 2年生：グループ 3年生：個人	・発表会 ・概要版の作成
愛知県立千種高等学校 …p.76	1年生：グローバル探究Ⅰ 2年生：グローバル探究Ⅱ 3年生：グローバル探究Ⅲ	必修	1年生：グループ 2年生：グループ 3年生：個人	・発表会 ・論文作成
名古屋大学教育学部附属中・高等学校 …p.78	1年生：STEAM（データサイエンス、アカデミックライティング） 2年生：STEAM 3年生：STEAM	必修	1年生：個人 2年生：決まりなし 3年生：決まりなし	・発表会 ・論文作成

学校名	授業名等	科目種別	研究活動単位	まとめ方
京都先端科学大学附属高等学校 …p.80	国際コース1～3年生 KOA Global Studies 特進 ADVANCED コース1～2年生 Science Global Studies 特進 BASIC コース・進学コース1・2年生 進路探究学習	必修	決まりなし	・発表会 ・論文作成
奈良県立国際高等学校 …p.82	1年生：グローバル探究Ⅰ 2年生：グローバル探究Ⅱ 3年生：グローバル探究Ⅲ	必修	グループ	・発表会 ・論文作成

>>「探究学習」の POINT は p.100 へ

2. 外国語や文理等の融合科目

外国語や文理両方の複数の教科を融合し、活動テーマと関連した「グローバル探究」等の新たな教科・科目を設定した。融合科目の例として、以下のような科目があげられる。

●英語の授業に探究学習や他の授業の要素を加えた科目

英語の授業を活用し、自分の考えについて英語でアウトプットすることで、今後の探究学習で役立つライティングやリーディング、プレゼンテーションの技術等を学んでいく。

例えば「ある課題に対して、どう感じているかを英語で表現する活動」「外国人講師の指導の下、即興型英語ディベートを行う」「自分が関心のある SDGs のトピックについて英語で話したり、ディスカッションしたりする」などの取組がみられた。

●複数の既存科目の要素を融合させた科目

理数系科目の融合では、データ解析、統計処理科目といった課題探究に役立つ内容を中心に実施する等、探究学習を行っていく基礎として、複数の教科の教員が担当し、課題解決に取り組むべく実施されている。

例えば「理科科目である「科学と人間生活」を、人の身近にある様々な科学の現象や人間生活に関係ある科学の実証を生徒たち自身が考え探究することで分離融合の視点から実施する」「情報、理科、数学科の教員によるチームティーチングによりデータ解析、統計処理を行う（物理の実験データを用いた統計処理など）」などの事例がみられた。

●既存科目の中に探究学習でのテーマや手法を扱った科目

既存の科目の中で探究との関連性を持たせた授業を行う。例えば、「国語で『羅生門』を読み、登場人物の状況を分析、救済策を考察」「数学で、グループ学習を行い、協働して課題を解くプロセスを経験」「現代社会で SDGs と国連の役割や機構などを学ぶ」「地理で気候変動、家庭科で子供の児童福祉・人権をテーマとした授業を行い、SDGsとの関連を学ぶ」などの取組がみられた。

●探究型学習に従来の科目の要素を加える

課題探究で取り扱う問題には複合要因があることを理解し、これまで従来の科目で学んできたことを活かせるよう取り組んでいる学校も多い。

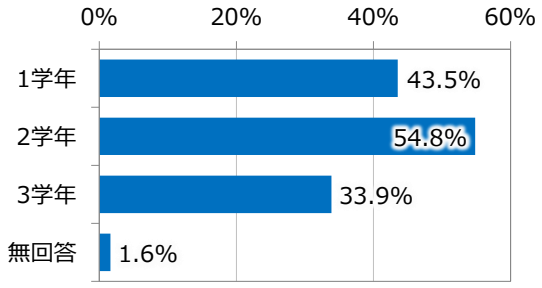
例えば、探究学習のある課題について、社会科学・自然科学の両方の視点で分析する訓練をする学校があった。

●対象の学年・受講者、単位数

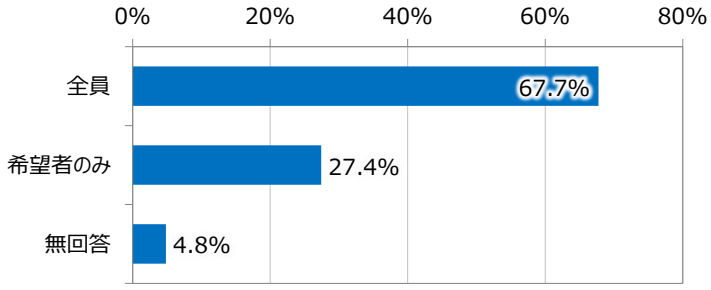
外国語や文理両方の複数教科を融合した内容の教科・科目は、33 校で 62 科目設定されている。
学年別では、第 2 学年の科目がやや多い。
62 科目のうち、約 6 割以上の科目は、生徒全員が受講対象になっている。

単位数	1学年（n=27）	2学年（n=34）	3学年（n=21）
平均	1.72	1.93	1.90

令和 5 年度　各学年の単位数



令和 5 年度　対象学年（複数回答）（n=62）



令和 5 年度　受講者（n=62）

◆拠点校の「外国語や文理等の融合科目」一覧◆

学校名	学年	科目名	英語の授業に探究学習や他の授業の要素を加えた科目	既存科目の中に探究学習でのテーマや手法を扱った科目	複数の既存科目の要素を融合させた科目	探究型学習に従来の科目の要素を加える
筑波大学附属坂戸高等学校 …p.28	1	グローバルライフ			○	
東京都立南多摩中等教育学校 …p.30	1	地球探究			○	
	2	MIE(Mathematics in English)			○	
	3	Pensées			○	
渋谷教育学園渋谷高等学校 …p.32	1	Hiroshima Brochur プロジェクト	○	○		○
	2	Partnerships for the goals プロジェクト	○	○		
金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校 …p.34	1	国際教養基礎（カリキュラム開発拠点終了後に「探究基礎」へ変更）				○
静岡県立三島北高等学校 …p.36	2	STEM for SDGs			○	
立命館宇治高等学校 …p.38	1	科学と人間生活		○		
	全	Science for SDGs（IM コース）				○
	全	SDGs(IG コース)				○
大阪府立北野高等学校 …p.40	1	国際情報		○	○	
神戸市立葺合高等学校 …p.42	1	家庭基礎		○		
		情報の科学		○		
		グローバルスタディーズⅠA			○	
	2	学際リサーチ		○	○	
		学際国語		○		
		グローバルスタディーズⅡB				○
		グローバルスタディーズⅡC				○
	3	学際フードデザイン		○		
		グローバルスタディーズⅢC				○
関西学院高等部 …p.44	2･3	AI 活用			○	
		ハンズオンラーニング			○	
		グローバルスタディ			○	
		サイエンス探究			○	
		アート思考			○	
		社会福祉			○	
		エネルギー問題			○	
広島県立広島国泰寺高等学校 …p.46	2	グローバル平和探究			○	
	2･3	グローバル・イングリッシュ	○			

学校名	学年	科目名	英語の授業に探究学習や他の授業の要素を加えた科目	既存科目の中に探究学習でのテーマや手法を扱った科目	複数の既存科目の要素を融合させた科目	探究型学習に従来の科目の要素を加える
富士見丘高等学校 …p.48		-				
長野県上田高等学校 …p.50	全	（GS Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）	○			
京都府立鳥羽高等学校 …p.52	全	グローバル・コミュニケーション Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	○			
	2・3	英語理解	○			
	1	ソーシャル・インテリジェンス				○
同志社国際高等学校 …p.54	1	SSS			○	
	2	（SSR）				○
	3	（SSD）				○
大阪教育大学附属高等学校平野校舎 …p.56	1	生命の倫理			○	
		データサイエンス基礎			○	
	2	イノベーティブシンキング			○	
		グローバル探究英語	○			
岡山県立岡山操山高等学校 …p.58	1	SOZAN STEAM			○	
広島大学附属福山中・高等学校 …p.60	2・3	研究への誘い				○
		現代への視座				○
愛媛大学附属高等学校 …p.62	1	SDGs 探究、SDGs 伊豫学			○	
	2	グローバル・スタディーズ Ⅰ			○	
	3	グローバル・スタディーズ Ⅱ			○	
中村学園女子高等学校 …p.64	全	英語探究（GI クラス）				○
		アントレプレナーシップ講座				○
長崎県立長崎東中学校・高等学校 …p.66	1	Integrated Global Research				○
	1	探究ベーシック		○		
熊本県立熊本高等学校 …p.68		-				
宮崎県立宮崎大宮高等学校 …p.70	全	（グローバル協創 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）				○
北海学園札幌高等学校 …p.72	2・3	（Academic English、多文化理解、プレゼンテーション）	○			
新潟県立三条高等学校 …p.74	1	WWL 情報			○	○
	全	WWL 論理・表現 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	○			
愛知県立千種高等学校 …p.76	全	グローバル探究 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ			○	
名古屋大学教育学部附属中・高等学校 …p.78	1	データサイエンス			○	

学校名	学年	科目名	英語の授業に探究学習や他の授業の要素を加えた科目	既存科目の中に探究学習でのテーマや手法を扱った科目	複数の既存科目の要素を融合させた科目	探究型学習に従来の科目の要素を加える
京都先端科学大学附属高等学校 …p.80	全	KOA Global Studies			○	
	1･2	Science Global Studies			○	
	1･2	進路探究学習			○	
奈良県立国際高等学校 …p.82	全	世界の言語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		○		
	3	イマージョン理数	○			

>>「外国語や文理等の融合科目」の POINT は p.101 へ

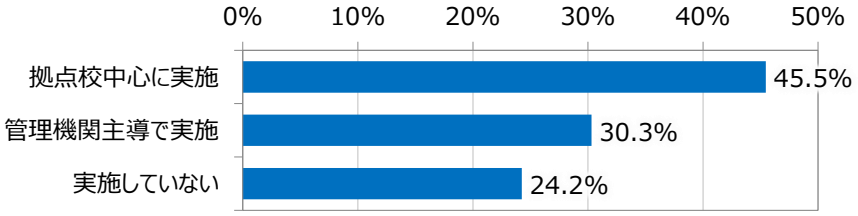
3. 高大連携・先取り履修

大学等と連携した大学教育の先取り履修（カリキュラム開発）により、高度かつ多様な科目等の学習プログラム／コースを開発。カリキュラム開発拠点校は、管理法人と連携しながら「大学の授業の履修」や「大学教授等による単発の講演やイベント」を行った。

●実施状況

●取組みの実施の有無

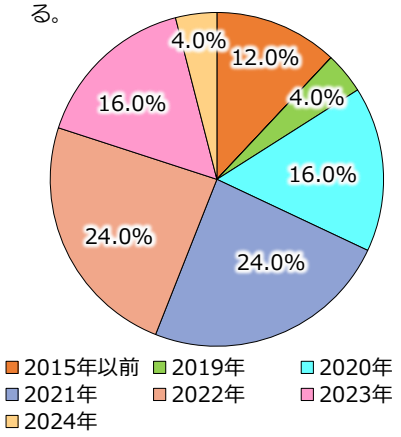
・高大連携による大学教育の先取り履修については、半数近くが「拠点校中心に実施」している。



令和５年度　実施の有無（n=33）

●取り組みの開始時期

・高大連携による大学教育の先取り履修を「実施」した 25 校のうち、８割以上が過去５年以内に開始した取組みである。



取組みの開始時期（n=25）

●大学との連携状況

・高大連携による大学教育の先取り履修を実施している学校が連携している大学の合計数は 38 校だった。また、授業数は 104 だった。

高大連携	大学数(n=24)	授業数(n=24)
合計	38	104

令和５年度　大学との連携状況

●大学の授業の履修（通常授業、集中講義）

管理法人の大学、あるいは地域の大学と連携し、大学の通常授業、あるいは長期休暇におこなわれる集中講義を、高校生が受講できるようにしていた。例えば「大学のオンデマンド授業を利用し生徒の探究学習のテーマに近い動画を視聴し、その動画で講義をする大学教員に、オンラインにて探究学習のアドバイスを受けられる」取組など、高校生が受講するための工夫をおこなっているケースもあった。

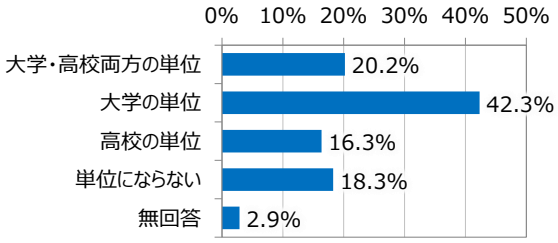
それらの取組の一部では、単位化（高校における単位化、大学における単位化（その大学に入学した際に単位が付与））も進められている。高校の単位とするか大学の単位とするかを生徒が選択できるケースもある。

管理法人が教育委員会の場合は、教育委員会が主催し大学の教員による講義を行い、拠点校をはじめ地元の学校の希望者が受講できるようにしている（履修を終えた生徒たちに教育委員会から履修証明書を発行する）地域もみられた。例えば「オンラインを中心に月に一回、WWL 事業に関わっている複数の大学教員（海外の大学を含む）によるリレー講義を開催し、探究に関わるリサーチスキルを学ぶ」という取組も行われていた。

また「講義の受講修了後にはオンラインで大学教員との座談会を開催し、教員と生徒で議論を交わした」ケースもあった。

●単位化の状況

・104 授業のうち、「大学・高校両方の単位」になる授業が 20.2%、「大学の単位」になる授業が 42.3%、「高校の単位」になる授業が 16.3%となっている。



令和５年度　単位化の状況（n=104）

高大連携	参加者数	単位取得人数
令和4年度 (n=87)	3,617	434
令和5年度 (n=104)	3,235	1,314

参加者数と単位取得人数

●大学教授等による単発の講演やイベントの実施

AL ネットワークを活用し各大学と連携し、大学教員を招いた講演や特別授業を開催するほか、各種イベントを実施している学校もある。例えば「複数の大学と高大接続の覚書を交わし連携を取っており、論文指導や各大学による出前講座」などが行われている学校もある。また、「大学教員指導の下サマースクールを開講し、全編英語で、観光と経済、ディスティネーション・マネジメントを学ぶ」ケース、「大学側から附属高校・連携校等に向けた取組としてコンテストを開催している」ケース等もみられた。

◆拠点校の「高大連携・先取り履修」一覧◆

学校名	大学名・授業名等	単発の講演やイベント	通常授業、集中講義			
				大学・高校両方の単位になる	大学の単位になる	高校の単位になる
筑波大学附属坂戸高等学校 …p.28	筑波大学　生物資源学類「国際農業研修Ⅶ」 等		○			○
東京都立南多摩中等教育学校 …p.30	東京大学 「分野別大学模擬授業(10 分野) 等	○	○			○
渋谷教育学園渋谷高等学校 …p.32	電気通信大学・東京外国語大学　等	○				
金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校 …p.34	金沢大学 「グローバル時代の社会学」 等		○		○	
静岡県立三島北高等学校 …p.36	静岡大学	○				
立命館宇治高等学校 …p.38	立命館大学	○				
大阪府立北野高等学校 …p.40	京都大学・大阪大学　等	○				
神戸市立葺合高等学校 …p.42	神戸市立外国語大学	○				
関西学院高等部 …p.44	関西学院大学「AI 活用入門講座」 等		○	○		
広島県立広島国泰寺高等学校 …p.46	広島大学、県立広島大学叡啓大学(令和4年度から)「サイエンス入門」「地域情報発信論」 等		○		○	
富士見丘高等学校 …p.48	ハワイ大学・明海大学　等		○		○	
長野県上田高等学校 …p.50	長野県立大学・信州大学		○	○		○
京都府立鳥羽高等学校 …p.52	京都府立大学「森林の科学」福知山公立大学 「経営学入門」 等		○			○
同志社国際高等学校 …p.54	同志社大学・ハーバード大学 等	○	○		○	
大阪教育大学附属高等学校平野校舎 …p.56	大阪教育大学・大阪大学「グローバルヘルス」 等		○			○
岡山県立岡山操山高等学校 …p.58	岡山大学	○				

学校名	大学名・授業名等	単発の講演やイベント	通常授業、集中講義			
				大学・高校両方の単位になる	大学の単位になる	高校の単位になる
広島大学附属福山中・高等学校 …p.60	広島大学「睡眠の科学・心理学概 B」等		○		○	
愛媛大学附属高等学校 …p.62	愛媛大学「法学入門・経済学入門」等		○	○		
中村学園女子高等学校 …p.64	中村学園大学「現代社会と教育」等		○		○	
長崎県立長崎東中学校・高等学校 …p.66	長崎大学、広島大学	○	○	○（長崎大学）	○（広島大学）	
熊本県立熊本高等学校 …p.68	武蔵野美術大学	○				
宮崎県立宮崎大宮高等学校 …p.70	宮崎大学「植物の栽培と管理」等		○			○
北海学園札幌高等学校 …p.72	北海学園大学・北海道大学・酪農学園大学　札幌保健医療大学等	○				
新潟県立三条高等学校 …p.74	長岡技術科学大学「留学生ふれあい事業」「外部人材活用授業」		○			
愛知県立千種高等学校 …p.76	名古屋市立大学「心理学入門」等	○	○		○	○
名古屋大学教育学部附属中・高等学校 …p.78	名古屋大学「基礎セミナー」・「Studium Generale」等		○		○	
京都先端科学大学附属高等学校 …p.80	京都先端科学大学「Science Global Studies」等	○	○			○
奈良県立国際高等学校 …p.82	大阪公立大学・同志社女子大学・奈良教育大学　等	○				

>>「高大連携・先取り履修」の POINT は p.102 へ

4. 海外研修・交流

海外の連携校等への短期・長期留学や海外研修等を体系的に位置づけたカリキュラムを開発。さらに、コロナ禍においては、これまで訪問できなかった国の高校生や大学生等とのオンライン海外フィールドワークなど、世界規模で生じた豊かなオンライン環境を駆使したカリキュラムを開発した。

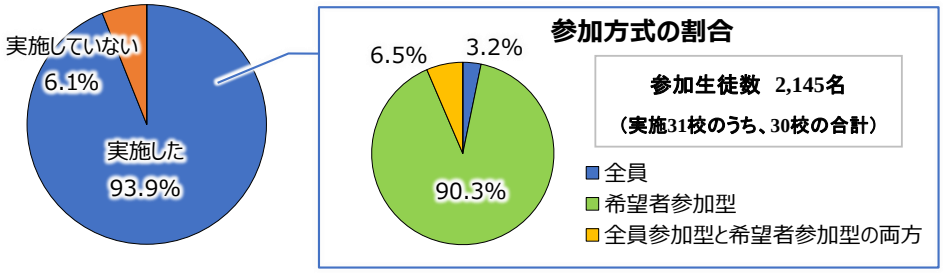
令和４年度から徐々に訪問が再開し、令和５年度は９割以上の拠点校で海外現地への訪問、研修が行われた。実施回数、参加人数ともに増加し、直接交流の強みを生かしたカリキュラム開発が行われている。

カリキュラム開発拠点校では、海外短期・長期留学や海外研修を、前述のように「探究学習の一環として実施」するケースと、探究活動とは別に「単発の海外留学・海外研修を実施」するケースがみられた。なお、前者は生徒全員が参加、後者は希望者が参加、とする場合が多い。海外研修等では、「海外現地の見学」「現地の高校・大学との交流」「現地大学や現地の高校生に向けての発表」のような活動が行われていた。

●実施状況

- 令和５年度、短期・長期留学及び海外研修等を実施した拠点校は 31 校で、93.9%だった。
- 実施した拠点校 31 校のうち、90.3%が「希望者参加型」だった。
- 合計参加生徒数は、2,145 名だった（30 校の合計）。

令和５年度の実施の有無（n=33）



令和５年度　短期・長期留学及び海外研修等の実施状況

●海外研修等

①海外現地の見学

実際に海外現地に赴きフィールドワーク・見学等を行うことで、生徒たちは自らの探究テーマへの学びをより深めている。現地の農園や日本企業の海外事業所を訪問するほか、「観光地化されていない現地の街においてフィールドワークを行い貧困問題・健康問題等の社会問題について実際に触れる機会を設けた」といった取組が行われていた。

②現地の高校・大学との交流

多くの学校では海外研修において、現地の高校・大学との交流を行っていた。大学の見学や講義を受講するケースをはじめ、「現地の高校生との交流、大学や学術機関の訪問、現地の大学生と訪問期間中ともに行動しフィールドワークを行った」「現地の高校生と英語でディスカッションした」などの取組もみられた。

③現地大学や現地の高校生に向けての発表

現地の高校・大学との交流に加え、探究学習の内容について発表する機会を設けているケースもある。例えば「現地大学の教授に対してプレゼンテーションを行う機会を設けており、教授からアドバイスや指導を受けることができる」学校や、「探究テーマに関する調査、ディスカッション、探究テーマに関する調査、ディスカッション、プレゼンテーションを現地の学校と一緒に行う」事例もみられた。

●令和元年度からの推移

- 令和２，３年度はコロナ禍の影響で少ないが、令和５年度には活動が活発に。

海外研修	実施回数	渡航日数計
合計	206	6,480
令和元年度（n=10）	23	319
令和２年度（n=22）	5	100
令和３年度（n=28）	7	265
令和４年度（n=30）	62	3,657
令和５年度（n=33）	109	2,139

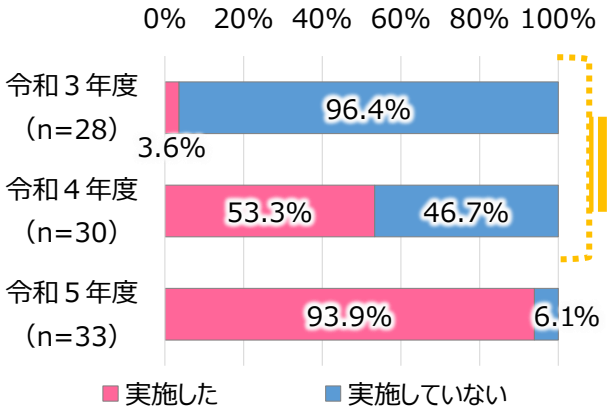
海外研修等の状況の推移

また、令和２年からの新型コロナウイルス感染症流行により、WWL 事業で予定されていた海外研修・交流の多くが中止となった。中止となった海外研修等の代替として、カリキュラム開発拠点校では、「国内フィールドワーク」「海外リモート交流」「国内の留学生との交流」が行われていた。

●代替活動

●海外研修・交流の実施割合の推移

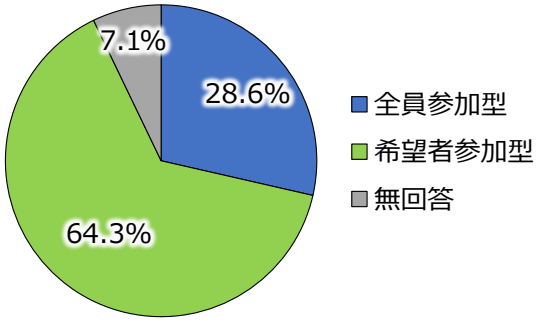
・令和３年度、９割以上の学校で短期・長期留学及び海外研修等を中止した。令和４年度には半数の学校で再開し、令和５年度には９割以上の学校で再開している。



海外研修・交流の実施割合の推移

●コロナ禍等を受けて実施した短期・長期留学及び海外研修等の代替プログラム

・コロナ禍等を受けて実施した短期・長期留学及び海外研修等の代替プログラムで、全員参加型の授業は 28.6%であった。



令和４年度　コロナ禍等を受けて実施した短期・長期留学及び海外研修等の代替プログラムの参加方法（n=14）

①国内フィールドワーク

海外研修の代わりに、テーマに応じた国内フィールドワークを実施するにより学びを深めている。設定した探究テーマに基づき調査し、企業等を訪問するほか、「社会的な課題について、現場を訪問し聞き取り調査を実施する」「連携校を訪問し互いの課題研究の報告・意見交換会を行う」などの取組も行われていた。

②海外リモート交流

多くの学校で代替活動として海外とのリモート交流を活用していた。現地訪問と比べ複数回実施しやすい、参加人数も増やしやすい等、リモートならではのメリットもあり、活用の幅を広げている。例えば第二外国語で選択している国と交流し、現地の高校生と互いの歴史や文化を紹介する取組や、海外連携校に事前に課題研究のプレゼンテーションを視聴してもらい、そのトピックやプレゼンテーションの内容について意見交換を行うという取組もみられた。

③国内の留学生との交流

留学生との交流の機会を設け英語でやり取りすることで、コロナ禍であってもできるだけ生徒に海外交流の機会を与えている。また研修以外でも、「様々な出身国の留学生を雇用し、校内で週に数回、授業以外の時間で日常的に留学生と交流、意見交換の場を設けている」といった取組も行われていた。

◆拠点校の「海外研修・交流」一覧◆

学校名	海外訪問先	研修・交流の内容	実施の有無	代替の内容
筑波大学附属坂戸高等学校 …p.28	①タイ ②シンガポール・マレーシア ③インドネシア	①スラム支援 ②農園ホームステイ ③森林保全活動	×	国内フィールドワーク（山梨県・長野県・静岡県・長崎県）
東京都立南多摩中等教育学校 …p.30	①モンゴル ②ベトナム ③イタリア	①②交流、文化紹介 ③SDGs の共同研究	× ※令和5年度より再開	リモート交流（共同研究）
渋谷教育学園渋谷高等学校 …p.32	アメリカ（カリフォルニア）	現地連携校の生徒に向け、探究型学習の制作物を発表	×	リモート交流
金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校 …p.34	シンガポール	現地連携校とリモートで共同研究を実施の上、現地フィールドワーク	×	国内フィールドワーク（九州地方）
静岡県立三島北高等学校 …p.36	①ベトナム ②アメリカ（ミネソタ）	①フィールドワーク ②STEM 学習	×	国内フィールドワーク（①長崎県・東京都、②長崎県・茨城県）、リモート交流
立命館宇治高等学校 …p.38	カナダ、オーストラリア、ニュージーランド	1 年間の留学（一部コース生のみ） ※その他、希望者制の短期留学あり	○	短期留学はリモート交流を実施
大阪府立北野高等学校 …p.40	台湾、オーストラリア、アメリカ（シアトル） （令和5年度以降はデンマークを追加）	現地連携校との交流 課題研究活動とリンクした研修	×	令和4年度まではリモート交流
神戸市立葺合高等学校 …p.42	オーストラリア	現地姉妹校との交流、文化紹介、ホームステイ	× ※令和5年度より再開	Stanford e-Kobe（米スタンフォード大のオンライン講習プログラム）
関西学院高等部 …p.44	フィリピン	フィールドワーク	× ※令和4年度以降は実施	リモートツアー（令和2・3年度）
広島県立広島国泰寺高等学校 …p.46	フィリピン、アメリカ合衆国・ニューヨーク・ニュージャージー州（※令和5年度再開）	フィールドワーク 探究活動の相互発表等	× ※令和5年度以降は再開	SDGsをテーマにした探究プログラム（海外からのゲストディスカッションあり）
富士見丘高等学校 …p.48	①アメリカ（グアム） ②台湾 ③マレーシア	フィールドワーク	○	
長野県上田高等学校 …p.50	①台湾 ②フィリピン・カンボジア ③アメリカ（ボストン）	①現地の高校生・大学生の交流、フィールドワーク ②フィールドワーク ③語学・学際研修	×	①リモート交流 ②現地 NGO 協力によるリモートインタビュー ③リモート講義

学校名	海外訪問先	研修・交流の内容	実施の有無	代替の内容
京都府立鳥羽高等学校 …p.52	中国（上海）、韓国、台湾	協力企業の海外事業所・工場訪問（インターンシップ）	×	リモートインターンシップ
同志社国際高等学校 …p.54	デンマーク、ドイツ、アメリカ（ポートランド）	フィールドワーク	×	
大阪教育大学附属高等学校平野校舎 …p.56	①タイ ②カンボジア ③ニュージーランド	フィールドワーク	▲（3年目は②③を実施）	①リモートツアー ②③リモート講義
岡山県立岡山操山高等学校 …p.58	オーストラリア	姉妹校での授業、ホームステイ	○	令和4年度：国内フィールドワーク（香川県） 令和5年度：3月に実施
広島大学附属福山中・高等学校 …p.60	タイ、オーストラリア、中国、イギリス	フィールドワーク	×	国内フィールドワーク（岡山県）
愛媛大学附属高等学校 …p.62	①アメリカ、フィリピン、オーストラリア ②ルーマニア	①②現地連携校の高校生や大学生とのディスカッション、文化紹介	×	①リモート交流、講義 ②ルーマニアの高校生の日本留学受け入れ
中村学園女子高等学校 …p.64	マレーシア、シンガポール	プランテーション農園見学、現地大学生に向けたプレゼンテーション	○	（海外渡航再開までは、国内フィールドワーク（近隣県）を実施）
長崎県立長崎東中学校・高等学校 …p.66	①アメリカ（ニューヨーク） ②アメリカ（ハワイ） ③カナダ ④オランダ ⑤ベトナム	①国連事務次長をはじめ国連職員との質疑応答、ディスカッション ②連携校との合同フィールドワーク、文化紹介 ③ホームステイ、文化紹介 ④現地連携校と交流、実地研修 ⑤長崎大学熱帯医学研究所と合同フィールドワーク	○	（①～⑤現地渡航の他、中国の連携校やケニア、ウクライナ支援団体、アメリカの企業等とリモート交流、質疑応答等を実施）
熊本県立熊本高等学校 …p.68	①アメリカ（ボストン） ②台湾 ③イギリス	①現地のワークショップ参加、現地企業・研究機関・大学訪問、交流 ②現地連携校と交流 ③イートン校での英語研修・イギリス文化施設見学	×	①外部団体による、海外留学生とのディスカッションプログラムへ参加（※令和6年度より現地訪問を再開予定） ②リモート交流（※令和5年度より現地訪問を再開） ③（※令和6年度より再開予定）
宮崎県立宮崎大宮高等学校 …p.70	①アメリカ（東海岸） ②ベトナム、シンガポール	①国連研修、現地大学生との交流やディスカッション・プレゼンテーション、現地研究施設訪問 ②フィールドワーク、現地大学生と交流やディスカッション・プレゼンテーション	○	（海外渡航再開までは、連携校とのリモート探究学習を実施）

学校名	海外訪問先	研修・交流の内容	実施の有無	代替の内容
北海学園札幌高等学校 …p.72	①台湾 ②アメリカ　ポートランド	①提携校との交流、施設見学、ホームステイ、中国語授業、英語授業、日本語クラスにおける交流授業を実施。 ②ポートランド州立大学において３週間の語学研修を行い、ホームステイ、フィールドワーク、現地の高校と交流を実施。	○	
新潟県立三条高等学校 …p.74	ベトナム共和国	日系企業訪問、現地高校訪問、SDGsスタディーツアー、B&Sスタディーツアー	○	
愛知県立千種高等学校 …p.76	台湾	フィールドワーク	×	台湾・韓国の学校とのオンラインを活用した海外交流
名古屋大学教育学部附属中・高等学校 …p.78	アメリカ（NY 州）	米国社会や米国の教育事情などを体験、日本の文化紹介を英語でプレゼンテーション	○	
京都先端科学大学附属高等学校 …p.80	①ベトナム・フィリピン・フィンランド ②イギリス ③アメリカ ④オーストラリア	①国際コース：フィールドトリップ ②特進 ADVANCED コース：研修旅行 ③特進 BASIC コース・進学コース：研修旅行（ホームステイ） ④全コース希望者：語学研修	○	
奈良県立国際高等学校 …p.82	シンガポール、中国	中国清華大学への研修、フィールドワーク	×	国内フィールドワーク（令和3年度：九州方面、令和4・5年度：北陸方面）

>>「海外研修・交流」の POINT は p.102 へ

5. 高校生国際会議

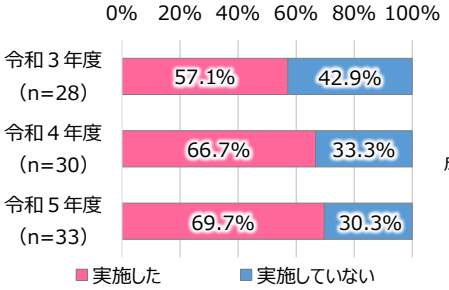
国内外の大学、企業、国際機関等と協働し、国内外の高等学校等との連携によるテーマと関連した高校生国際会議等を開催した。

なお、新型コロナウイルス感染症流行の影響で、リモート開催への切り替えや、対面とリモートのハイブリッド等で開催している事例も多くみられた。

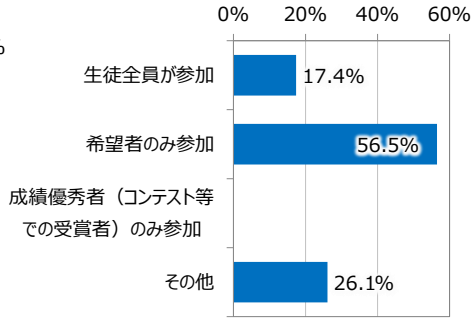
高校生国際会議では、以下のような取組を行っている。

●実施状況と参加者

- 毎年 6-7 割程度の学校が、高校生国際会議を実施（指定期間のうち１回以上実施）。
- 高校生国際会議は、「希望者のみ参加」型が 56.5%、「生徒全員が参加」型が 17.4%である。



高校生国際会議の実施割合



令和５年度　参加者（n=23）

●複数の高校によるディスカッション

高校生国際会議では、拠点校と連携校とで、テーマに沿ってディスカッションや意見交換会を行うケースが多い。また、海外校が参加し英語でディスカッションを行う場合、スムーズな進行のために留学生に協力してもらっており、例えば「英語のディスカッションには１グループにつき１名、様々な出身国の留学生（大学生・大学院生）がファシリテーターとして参加する」といった事例もみられた。

●探究型学習の発表

高校生国際会議は日頃の探究型学習の成果発表の場でもある。会議の場でプレゼンテーションやポスターセッションなどを行い、参加している他校や有識者からの意見を得てプロジェクトをブラッシュアップすることができる。例えば「分科会に分かれ、テーマごとのワークショップや日頃の課題研究活動について成果発表する」「海外連携校と共同チームで発表しており、その後成果を論文として取りまとめる」といった取組も行われていた。

●基調講演

テーマについてより理解を深めるため、連携機関（大学、団体等）の関係者による基調講演を実施している。「高校生国際会議の事前セミナーとして有識者による講演、座談会を実施しており、高校生国際会議本番では拠点校と連携校の代表グループの課題研究成果発表後に基調講演を実施し、発表や基調講演をもとにグループ協議を行う」事例もみられた。

●宣言

高校生国際会議で実施した発表、基調講演、協議等の結果を総括し宣言としてまとめていく。例えば「分科会に分かれて問題提起とそれに対する討論を行い、最終的に分科会ごとの提言をまとめ、最後の全体会でアクションプランを提言し、それを総括する宣言文を発表する」ケースもみられた。

●生徒自身による企画・運営

高校生国際会議の開催にあたっては、実行委員会を組織し生徒が企画・運営から携わっている学校も多い。企画力や調整力、英語力等も必要となり、やり遂げた結果生徒たちの達成感、自信へとつながっていく。例えば「スタッフを集めるところから企画まで生徒自身に任せている」「海外協働先についても生徒たち自身で開拓していく」「拠点校を中心に複数校の生徒からなる実行委員会を立ち上げ、生徒自身でやりたいことを企画し、準備・運営を複数校の生徒で進めていく」といった取組もみられた。

◆拠点校の「高校生国際会議」一覧◆

学校名	名称・テーマ 等	ディスカッション	探究型学習の発表	基調講演	宣言	生徒自身による企画・運営
筑波大学附属坂戸高等学校 …p.28	高校生国際 ESD シンポジウム	○	○	○	×	○
東京都立南多摩中等教育学校 …p.30	東京都教育委員会が主催する「東京高校生国際会議」に参加	○	×	○	○	×
渋谷教育学園渋谷高等学校 …p.32	SOLA 2021(※) 生徒の企画による 20 個のプログラムを実施 (※ 以降毎年開催)	○	○	○	×	○
金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校 …p.34	パンデミックの時代に私たちはどう生きるか (カリキュラム開発拠点終了後に「ミライシコウ金沢」へ変更)	○	○	×	×	○
静岡県立三島北高等学校 …p.36	Crisis に負けない持続可能な社会を目指して	○	○	○	○	×
立命館宇治高等学校 …p.38	①全国高校 SR サミット FOCUS ②World Youth Meeting ③Global Youth Fair (以上3種を実施)	○	○ (①のみ)	○ (③のみ)	○ (③のみ)	○
大阪府立北野高等学校 …p.40	コロナ禍・SDGs・健康・医療をテーマにしたディスカッション (令和4年度以降も管理機関の主催で継続実施)	○	○	○	×	×
神戸市立葺合高等学校 …p.42	経済・教育・人権・環境・健康をテーマにした、探究型学習のプレゼンテーション・ディスカッション	○	○	×	×	×
関西学院高等部 …p.44	International Online Meeting コロナ禍・SDGs等をテーマにしたプレゼンテーションとディスカッション (令和2年度以降毎年実施)	○	○	×	×	○
広島県立広島国泰寺高等学校 …p.46	平和をテーマにした探究型学習のプレゼンテーション・ディスカッション	○	○	×	×	○
富士見丘高等学校 …p.48	海洋・災害・環境をテーマにした探究型学習のプレゼンテーション・ディスカッション	○	○	×	×	×
長野県上田高等学校 …p.50	エシカル消費・教育・人権・貧困・環境・水・衛生をテーマにしたディスカッション	○	○	○	○	○
京都府立鳥羽高等学校 …p.52	京都府教育委員会が主催する「京都府 WWL 高校生サミット」に参加	○	○	×	×	×
同志社国際高等学校 …p.54	(開催計画中)	–	–	–	–	–
大阪教育大学附属高等学校平野校舎 …p.56	SDGsをテーマにした、探究型学習のプレゼンテーション・ディスカッション・交流プログラム	○	○	○	○	○

学校名	名称・テーマ 等	ディスカッション	探究型学習の発表	基調講演	宣言	生徒自身による企画・運営
岡山県立岡山操山高等学校 …p.58	Well-being（身体的、精神的、社会的な幸福）をテーマにした探究型学習のプレゼンテーション・ディスカッション	○	○	○	○	○
広島大学附属福山中・高等学校 …p.60	新型コロナウイルス感染症対策をテーマにした、探究型学習のプレゼンテーション・ディスカッション	○	○	×	×	○
愛媛大学附属高等学校 …p.62	環境・農業・教育・ジェンダー・SDGs をテーマにしたディスカッション、探究型学習のプレゼンテーション	○	○	×	○	×
中村学園女子高等学校 …p.64	「食」のサミット	○	○	×	○	×
長崎県立長崎東中学校・高等学校 …p.66	「高校生国際平和会議」と題し、「広義の平和」をテーマに、共生・環境・社会・経済の4分野で日本語・英語の2部門で会議実施。多様な協働機関と連携し、生徒主体で作成した「高校生平和共同宣言」を10言語で発表。	○	○	○	○	○
熊本県立熊本高等学校 …p.68	外部団体によるサイエンスフォーラムイベント「VR ハッカソンイベント The 2nd Scienc-ome XR Innovation Hub」に参加	○	×	○	×	×
宮崎県立宮崎大宮高等学校 …p.70	グローバル高校生フォーラム in HINATA（探究型学習のプレゼンテーション、食をテーマにしたディスカッション）	○	○	×	×	○
北海学園札幌高等学校 …p.72	令和 6 年度に開催計画中。これまでの「GLOBAL DAY」に、基調講演、ワークショップや発表活動などを含め、1日半～2日での開催を計画している。	－	－	－	－	－
新潟県立三条高等学校 …p.74	各生徒が関心のあるテーマで分科会に分かれ、対話・意見交換、分科会の報告、会議宣言	○	○	○	○	×
愛知県立千種高等学校 …p.76	～わたしたちの未来のための SDGs～「環境」、「貧困・教育」、「社会的不平等」の3つのテーマについて、クラスごとに3つの分科会に分かれてプレゼンテーション	○	○	×	○	○
名古屋大学教育学部附属中・高等学校 …p.78	SGDs –What we can do as high school students–	○	×	○	×	○
京都先端科学大学附属高等学校 …p.80	Global Simulation Gaming 多角的な視点から見た国際情勢への知識・理解力を養い、課題設定・政策立案・外交交渉を通じて、現実の国際社会についての理解を深める。	○	×	×	○	○
奈良県立国際高等学校 …p.82	国連の SDGs（持続可能な開発目標）などについて英語で意見交換	○	○	○	○	○

>>「高校生国際会議」の POINT は p.103 へ

※拠点校のより詳しい取組内容のデータについては、文部科学省 HP「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業における EBPM に向けたデータ収集・分析、効果検証等のための調査研究」ページ：https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/1412770_00006.htm
「令和５年度調査研究報告書」 第２章 カリキュラム開発拠点校・拠点校へのアンケート調査（P.4~） をご参照ください。

第2章

カリキュラム開発拠点校の取組

（Ⅱ.）事例紹介

Index

本節では、令和元年度、2 年度、3 年度指定カリキュラム開発拠点校の取組について、主にカリキュラム開発を中心にご紹介します。

令和元年度拠点校

p.28 筑波大学附属坂戸高等学校
p.30 東京都立南多摩中等教育学校
p.32 渋谷教育学園渋谷高等学校
p.34 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校
p.36 静岡県立三島北高等学校
p.38 立命館宇治高等学校
p.40 大阪府立北野高等学校
p.42 神戸市立葺合高等学校
p.44 関西学院高等部
p.46 広島県立広島国泰寺高等学校

令和2年度拠点校

p.48 富士見丘高等学校
p.50 長野県上田高等学校
p.52 京都府立鳥羽高等学校
p.54 同志社国際高等学校
p.56 大阪教育大学附属高等学校平野校舎
p.58 岡山県立岡山操山高等学校
p.60 広島大学附属福山中・高等学校
p.62 愛媛大学附属高等学校
p.64 中村学園女子高等学校
p.66 長崎県立長崎東中学校・高等学校
p.68 熊本県立熊本高等学校
p.70 宮崎県立宮崎大宮高等学校

令和3年度拠点校

p.72 北海学園札幌高等学校
p.74 新潟県立三条高等学校
p.76 愛知県立千種高等学校
p.78 名古屋大学教育学部附属中・高等学校
p.80 京都先端科学大学附属高等学校
p.82 奈良県立国際高等学校

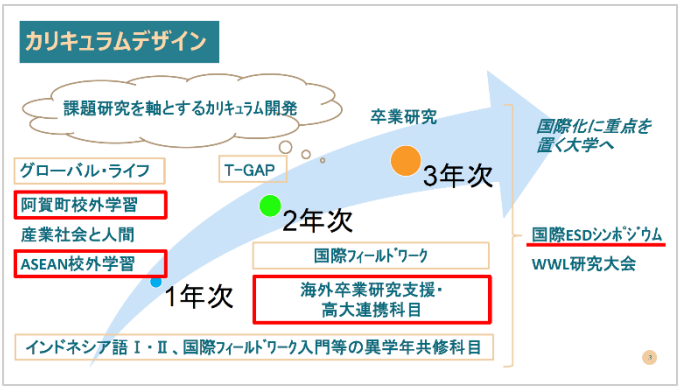
筑波大学附属坂戸高等学校　（管理機関：国立大学法人　筑波大学）

同校では2014年から5年間 SGH 校の指定を受け、国際教育を推進する様々なプログラムを開発してきた。SGH 校としての取組を発展させて WWL 事業に取り組んでいる。

■探究型学習、フィールドワークの実施

WWL 事業以前からグループ・個人での課題研究活動を実施していたが、WWL 拠点校として、生徒全員にグローバルな経験かつ社会課題に向き合う国内外フィールドワークを実施することを計画した。1年次に社会的な課題について現場調査を経験した後、2年次・3年次の課題研究活動に向かうといったカリキュラムデザインを組んでいる。

同校 3 年間のカリキュラムデザイン



≪フィールドワークの事前学習・事後学習≫

事前学習・事後学習として、フィールドワークの内容を1年次必修科目「産業社会と人間」に組み込んだ。事前学習として生徒がテーマに分かれて先行研究を調査、その内容を2月の研究大会で発表し、3月のフィールドワークに繋げる計画であった（後述のように海外フィールドワークは中止）。

≪フィールドワーク≫

当初の計画では、1年生の3月に東南アジア3方面（タイ／シンガポール・マレーシア／インドネシア）に訪問しフィールドワークを行い、2年生ではグループの、3年生は個人の課題研究活動を実施する予定だった。しかし、新型コロナウイルス感染症流行により海外フィールドワークは中止となり、2021年には地域創生・人口減少等の社会課題をテーマとした国内フィールドワークに変更した。

2021年7月に実施した国内フィールドワークでは、1年生の3月に東南アジアフィールドワークに行けなかった2年生全員を対象とした。長崎、静岡、長野、山梨のいずれかに訪問し、地域創生・人口減少・農業の6次産業化・新型コロナウイルス感染症流行以降の観光の在り方といった社会的な課題について、現場を訪問し聞き取り調査を実施した。

当初予定していた海外フィールドワークの内容

タイ・バンコク	スラム支援を行う NGO 訪問
シンガポール、マレーシア	パームオイル農園へのホームステイ
インドネシア	国立公園で森林保全のアクションプラン立案

代替として実施した国内フィールドワークの内容

≪課題研究≫

フィールドワークを受けて、2年次では「総合的な学習の時間（ソーシャルアクション、校内名称：T-GAP）」の授業で、グループで社会的な課題を設定し、その課題解決に向けて研究を行う。

3年次には、個人研究活動として「卒業研究」が必修となっている。

フィールドワーク後（2～3 年次）の課題研究のスケジュール

■外国語や文理の教科を融合した教科・科目

筑波大学附属坂戸高等学校は、もともと総合学科の高校であり、カリキュラムに文系・理系の区別がない。

さらに、1年次の「家庭基礎」を「グローバルライフ」という研究開発科目として実施（SGH 指定校時代からの取組）。全ての生徒がグローバルな課題と向き合い、世界の諸課題に対して当事者として関わっていける素養を身に付けるために、「持続可能な社会を作る担い手になる」という視点を重視した授業となっている。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携、海外交流の取組

管理機関である筑波大学、さらには筑波大学が国際連携協定を結ぶ海外の大学及びその附属高校との連携を行っている。

≪筑波大学との連携≫

2020 年度、高校生と大学生が同時に履修出来る科目として筑波大学生物資源学類「国際農業研修Ⅶ」が開設され、大学のシラバスに掲載された。

≪海外交流≫

海外大学の附属高校（タイ・インドネシア・フィリピン）とは、交換留学等を行っている。さらには、東南アジア教育大臣機構（SEAMEO）と連携し、SEAMEO に所属する海外の大学生の教育実習を受け入れている。

この他、海外フィールドワークを連携する大学の学生と一緒に行く計画であったが、新型コロナウイルス感染症流行で中止となっている。

■高校生国際会議等

≪「高校生国際 ESD シンポジウム」兼「SDGs Global Engagement Conference」≫

以前から、毎年、海外姉妹校及び SGH 指定校と「高校生国際 ESD シンポジウム」を開催しており、2021年11月に10 回目を開催した。

ここ2年は、新型コロナウイルス感染症流行により、オンライン開催としている。オープニングにキーノートスピーチの後、分科会に分かれ、テーマごとのワークショップや日頃の課題研究活動について成果発表を行った。2年生のソーシャルアクション（社会課題解決活動）、3年次の個人研究活動（卒業研究）で選抜された生徒の発表の場である。

≪生徒の声≫

～フィールドワークについて～

・「産業社会と人間」では「自己理解する」という項目があり、「自分は何に興味があるのか、将来に何になりたいか」となかなか真剣に向き合うことが今までなく初めて真剣に向き合ってみて様々なことを知れたし、また問い立てについてとか、探究の方法・レポートの書き方についても学んで、高校での学びの軸となり今の自分にもすごく活かされており、大切な授業だったと思う。（２年生女子）

・フィールドワークを通じて、一番変わったのは自分の中の価値観。海外の方と交流することで、日本とはまったく違う生活や、価値の基準を持っていることを知った。自分の生活を見直すきっかけとなって、例えば手軽に行けるコンビニで買っていたものを「自分で作れるようにならないか」と考えるようになった。（３年生女子）

～卒業研究について～

・３年次で自分の好きなことをとことん研究出来る「卒業研究」が本当に良かった取組だと思っている。「卒業研究」は本当に大変でみんな苦戦する科目ではあるが、本当に自分の好きなことを１年間突き詰められるので、そういう意味では自分の進路に合っていても合っていなかったとしても絶対何かしらの形で将来に活きてくる授業だと思う。（３年生女子）

～外国語や文理の教科を融合した教科・科目について～

・「グローバルライフ」という、普通科高校では家庭科にあたる授業である。「グローバルライフ」の授業で初めて社会問題に触れた。例えば、服はいま価格がどんどん下がっていて誰でも買いやすいが、実は裏にはさまざまな問題があり、それを解決するエシカルファッションについてだとか、農業・フードライフについて学んで、初めて知ることがいっぱいで「私ってこんなことも知らずに日々生活していたんだな」と、知識的な学びではなく、現代を生きるためにすごく大切な学びになったなと思っている。（２年生女子）

東京都立 南多摩中等教育学校 （管理機関:東京都教育委員会）

都立の中高一貫校として、WWL 拠点校になる以前から、前期生（中学1～3年生）のうちから探究学習を実施している。学校のある多摩地域のフィールドワークから始まり、後期生（高校生）以降の個人での研究につなげている。

■フィールドワーク活動・探究学習

同校では、WWL 拠点校になる以前から、生徒自ら課題を設定し学ぶ知識活用型のフィールドワーク活動（探究学習）に取り組み、4種類の探究力（課題を設定する力／情報を収集・整理・分析する力／論理的に思考する力／発信する力）の育成を目指している。

前期生（中学1～3年生）から探究学習に取り組んでおり、前期生のうちはグループでの探究学習を行った後、後期生（高校1、2年）の2年をかけて個人研究を行っている。

≪前期生の探究学習≫

前期生はグループによるフィールドワーク活動を通じて、「テーマの設定→仮説→検証→考察→（新たな疑問を踏まえ）テーマの設定」という探究の一連のプロセスを学ぶ。

≪後期生の探究学習≫

後期生では、「ライフワークプロジェクト」として個人ごとの探究学習を行う。4年生（高校1年生）では、1年間かけて新たなテーマの設定を行う。5年生（高校2年生）では、探究学習の集大成として約4,000 字の論文を書く。

「ライフワークプロジェクト」では、大学生・社会人となっても「わくわくしながら学び続ける」姿勢や意欲を育てることを重視している。

各学年のフィールドワーク・探究学習のテーマ

後期生の探究学習では、専任の先生・TA と生徒12人前後のゼミ形式で授業を行い、個人個人でテーマを立てて論文を記載する。ゼミ代表生徒の論文は南多摩論集として発行し図書館に保管するため、下級生も閲覧出来るようになっている。また、校内外に向けてプレゼンテーション（英語）・ポスターセッション（日本語）も行ってその成果を発信している。

同校による探究学習のレポート（一部抜粋）

（左：前期生（1 年次）地域調査でのフィールドワークの様子）　（右：後期生（4 年次・5 年次）のゼミの様子）

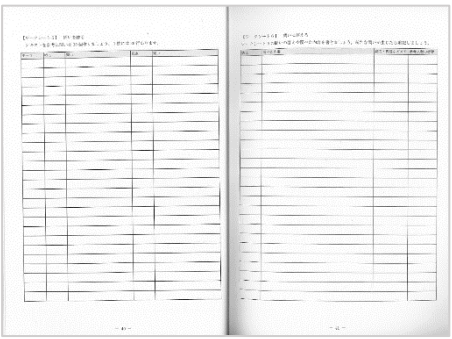
≪探究学習テキストを活用したテーマ設定≫

探究学習の一連の活動は、同校教員によってテキスト化され、令和3年度より活用している。

このテキストにはワークシートが付属している。例えば、4年生が自身で研究課題を設定する時には、「自分の問いに対する30本ノック」ワークシートを使う。このワークシートに、30本の研究課題を記述し、その課題で論文を書くことが出来るのか自身で検証出来るような内容になっている（自問自答させる）。

また、この30本ノックに書いた内容を発表し、友人や TA からアドバイスをもらい、自分自身の研究課題を精査していく。教員や TA による個別面談は、複数回設け、適切なテーマに導けるようにしている。

探究学習テキストの
「自分の問に対する 30 本ノック」ワークシート



■外国語や文理の教科を融合した教科・科目

≪文理融合カリキュラム≫

各学年に以下の「文理融合カリキュラム」を開発、授業を行っている。

文理融合科目の一覧

学年	カリキュラム名	内容
3年	データ分析	理科、数学、情報科の融合科目。探究学習（3年生）の科学的検証活動でも活用。
4年	地球探究	地理 A、地学の融合科目。
5年	MIE（Mathematics in English）	数学の授業を英語で授業を行う（ALT と数学教員がペアを組んで実施）。日本語以外の言語で学習することで、多様な考え方を学び、生徒の視野を広げる。
6年	Pensées	哲学。国内外の社会課題を考察し、ディベート・論文執筆を行う。倫理的なテーマについて、生徒自身が考え、生徒同士で会話・提案を行う。

≪STEAM 教育講座≫

上記の文理融合科目のほかに、ドローン講座、Society5.0 社会における工学、大学の研究室でのバイオ薬品の開発などの講座を実施。希望制で、各講座約30名程度の定員となっている。

STEAM 教育講座の様子（左：ドローン講座）（右：バイオ薬品開発講座）

■海外フィールドワーク・留学

新型コロナウイルス感染症流行により、オンラインによる学校交流にて代替した。モンゴル日馬富士高校、ハノイ チューヴァンアン高校とオンライン交流会を行った。さらに、イタリアの IS CARLO DELL’ACQUA 高校からオファーがあり、オンライン交流や SDGs の共同研究に取り組んだ。

令和5年度より、海外研修を再開した。オーストラリアへのホームステイで現地家庭と交流するとともに、ファーム体験・海洋環境フィールドワーク・芸術文化体験や現地大学訪問、世界遺産見学などを行っている。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

≪大学連携による論文指導≫

東京都立大学、東京外国語大学、東京農工大学の3大学と高大接続の覚書を交わし、連携を取っている。5年生の論文指導や各大学による出前講座などが行われている。

≪Tokyo Leading Academy≫

東京大学主催の Tokyo Leading Academy に参加する生徒もいる。

■高校生国際会議など、海外交流の取組

東京都教育委員会主催で「東京高校生国際会議」を開催している。

≪生徒の声≫

～探究型学習について～

・物事をアウトプット／発信する方法を身に付けられた。こういった活動に関わると、自分が調べている内容を他の人に発信する機会が多く、資料のわかりやすい作り方だったりスライドで上手く構造化してわかりやすく作ったりといった技術を身に付けられた。周りの生徒も社会問題に興味がある人が多く、それに感化されて、自分も多くのことに興味や関心を持ち始めた。（２年生女子）

～文理融合カリキュラムついて～

・地球探究の授業の中で、一人一か国を選んでその国について調べて発表しようという課題があり、それは面白かった。普段は積極的でない人も含め、みんな一斉に課題を行い学び合えるというのは面白かった。（２年生男子）

・MIE は、今までやってきた数学の知識を英語で復習するといった感じで、英語の勉強も出来るし数学の良い復習にもなるし、面白いと思っている。（２年生女子）

渋谷教育学園渋谷高等学校　（管理機関：学校法人渋谷教育学園）

同校は第1期 SGH 指定校であり、WWL 事業を実施するにあたり、SGH 事業で実施していたプロジェクトを引き継ぎつつ、学年別プログラムから3年間継続性のあるプログラムへ変更。学校全体の教育目標である「自調自考」を中核として、3年間を通じての教育プログラムを展開している。

■探究型学習、海外フィールドワーク・留学、外国語や文理の教科を融合した教科・科目

≪Hiroshima Brochure プロジェクト（1年次）≫

Hiroshima Brochure プロジェクトは、「世界の若者たちと一緒にパートナーシップをどう構築していくか」を目標とした1年次の必修のプロジェクトである。

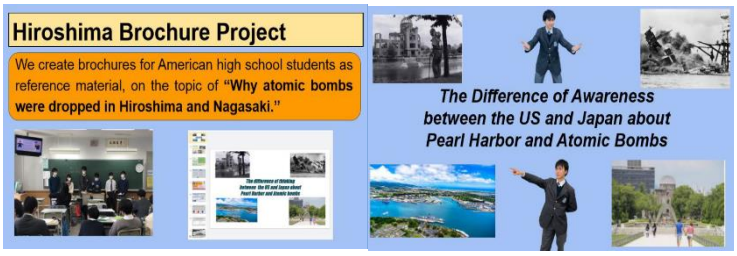
下記の複数教科・課外活動で「広島・長崎の原爆投下」について学び、それらの成果を総合して英語の授業において資料としてまとめ、アメリカの高校生に発信する。

Hiroshima Brochure プロジェクトに関連する教科・内容

社会	現代社会の中で核の問題に対する考え方を学習する。
国語	小説「黒い雨」を読み、被災した人々の生活ぶりを学習する。
情報	広島の街を調べ、どんな風な形で街が残っているか探す。
総合的な探究の時間	広島研修旅行に合わせて、それぞれの班で行きたいところを調べてルートマップを作成する。
広島研修旅行	原爆資料館の見学と語り部による被爆講話を必須とする。
英語	Hiroshima Brochure（広島のパンフレット）を実際に作成する。自分たちで学んできたことを、アメリカの高校生に対し「私たちが考えている問題・未来」に向けて学びを発信する。

英語の授業において作成した Hiroshima Brochure を連携校である Saint Stephen's Episcopal School（米フロリダ州）の世界史の授業で発表し、アメリカの高校生に広島について理解を深めてもらう（コロナ禍前は、現地訪問していたが、コロナ禍においてはリモートでの交流）。「核の被害」「被爆者の悲痛」という観点ではなく、様々な社会課題で戦争・紛争を乗り越え「どのようなパートナーシップを作っていくか」「未来を構築するためにどういうことを考えたら良いのか」という観点での取組となっている。

Hiroshima Brochure の成果物



≪Partnerships for the goals プロジェクト（2年次）≫

2年次には数多くのプロジェクト型教育を行っており、その中で代表的なものが Partnerships for the goals プロジェクトである。教科の枠を超えて企業・団体などと連携し SDGs について学び、その結果を発表する。また、プロジェクトの一環として、生徒全員がサービスラーニングも行う。

地理では「気候変動」、家庭科では「子供の児童福祉・人権」をテーマとした授業、この他、英語の授業でも SDGs をテーマとした教材を活用とした授業を行うなど、SDGs などの課題が社会にどのようなインパクトを与えているかを授業中で取り扱う。気候正義に関心が高い生徒も多く、京都大学・宇佐美先生による出張講義なども開催し、気候正義を学ぶ機会を設けている。

さらに、各授業で社会課題を学ぶだけでなく、ボランティア活動に参加し、行動によって社会に発信するという経験を積むことを目的としサービスラーニングを実施している。学校が、生徒の社会発信・行動を応援するという観点からカリキュラム設定をしている。例えば、地域や企業と一緒に地域貢献プロジェクトを考え、「献血活動」の実施」や「ペット保護」の啓もう活動、「子ども食堂のボランティア」などのボランティアを行う。

≪Research and Analysis プロジェクト（1～3年次）≫

Research and Analysis プロジェクトは、生徒全員がそれぞれ研究テーマを決め、3年間研究を行い、同校が発行する論文集「自調自考論文」にて論文を発表する。1年次に教員1名に対し生徒10～15名からなるゼミを立ち上げる。ゼミ内で中間発表や面談を行う。生徒が自らの関心をもとに問いをたて、その問いから仮説を導き、検証する。このため論文のテーマは、生徒によって異なる。例えば、Hiroshima Brochure Project を通じて広島の膨大な千羽鶴に関心を持ち、「千羽鶴の二次利用について」をテーマにする生徒、「アフリカの医療政策」「臓器移植ネットワーク財団法人の医療支援」「子供の人権問題」「ブリの切り身の変色を防ぐ」といったテーマを設定する生徒もいた。生徒が自分の身の回りに関心を持ち、自分が将来どのような社会人となり、社会に貢献していく人材になりたいのかを考える機会とするカリキュラムとなっている。

例えば、カリキュラム開発拠点終了後の令和5年度には、LGBTQ と彼らが属する社会での認識を歴史的に振り返り、近年みられるその特有の市場形成の是非について、資本主義と倫理、現実と理想社会の観点から考察したものや、自然やものの状態を「音声」であらわすとき、表現者の育った社会からの矯正力が常に働いているとし、その再現力は、その言語の持つ発

音形態に依存することを指摘したものが提出された。
　1年生は、テーマ決めが中心となり、1年次の春休み～2年次のゴールデンウイークである程度決まることが多い。2年生の夏頃までに大枠を作成し、2年生の後半から教員が論文を読み直し・戻しを行う。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

　電気通信大学・東京外国語大学と連携を取っており、出前講座など教授の指導を受ける機会を設けている。

■高校生国際会議など、海外交流の取組

　令和3年8月に、企画運営も全て生徒の手で行う学びのオリンピック「SOLA 2021※」を開催した（※Shibuya Olympiad in Liberal Arts 2021）。
　同校では、SGH 指定校期最終年度（2018年）に「Water is Life／世界高校生水会議」を実施している。WWL 拠点校となり、新たなことを実施しようと起案した会議が「SOLA」である。
　Water is Life では、会議に参加出来る生徒は3人～5人であり、それ以外はボランティアとしての参加であった。しかし、国際会議の内容・日程が固まっていたこともあり、ボランティアの生徒自身による工夫がほとんど出来なかった。
　そこで、「SOLA」は、1から生徒が企画する会議とした。スタッフを集めるところから企画まで生徒自身に任せ、多くの生徒に「自分たちが主体となってやった」という経験をさせることを目的とした。
　「SOLA」では、大きく「コンペティション（競技として順位が出るもの）」「発表」「模擬国連・模擬 G7」の3種類の企画を行った。20 の企画があり、16個の国際 Ver.（英語で実施）と4個の日本語 Ver.があった。例えば、「冷戦プロジェクト」では、冷戦時代を世界の高校生と一緒に考え、どのような教材を作ればお互い理解出来るのか議論した。

（カリキュラム開発拠点終了後の取組）
　令和5年8月の「SOLA 2023」では、国内63校、海外31校から合わせて3参加者363名、本校運営スタッフ157名と、500名を超える生徒が参加するイベントとなった。
　「コンペティション（競技として順位が出るもの）」「発表」に加え、「ワークショップ」などの企画を行った。13の企画があり、そのうち5つは国際 Ver.（英語で実施）であった。対面開催となった「2050 の日本を描く」では、「AI と教育」をテーマに今後どのように AI と向き合っていくのか、具体的な恩恵や危険について熱い議論が交わされた。

SOLA で、生徒たちが実施した各企画のポスター

SOLA の企画「Unite and Make Change(UMC)」の様子（UMC:中学生が世界各国の代表として、プラごみ問題を対面でプレゼンする企画）

≪生徒の声≫

～Ｈｉｒｏｓｈｉｍａ　Ｂｒｏｃｈｕｒｅ　Ｐｒｏｊｅｃｔについて～

・広島研修に行く前に受けた平和学習に自分のチームは影響を受けた。現代文の授業で、黒い雨を読んだり、日本の映画で原爆を使われる際の描写の仕方と、アメリカの映画との描写の違いを比べたりする授業があった。広島に行った際、語り部の方から話を伺って、より悲惨さを実感した上で、原爆に関する作品を集めてフロリダの現地の方に伝える brochure を作った。現代文の授業の影響は大きかった。（３年生女子）

～ＳＯＬＡについて～

・SOLA が立ち上がった際に実行委員だったが、全体ポスターやロゴのデザインを校内募集することになっていた。はじめは、「生徒に呼び掛けても誰も応募してくれないだろう」「私たちの気持ちをわかってもらえないなら、実行委員たちで簡単に作って終わらせてしまおう」と考えていたが、先生から「みんなで取り組んだほうがいい」とアドバイスをいただいた。先生のアドバイスどおりに、デザインが出来る生徒を探し依頼したことで、全校的なイベントになった。２０種目の運営についても、２０種目全て実行委員側が手掛けることは不可能であり、そういう意味では任せることを学んだ。２００人の運営生徒一人一人がやる気を持って取り組んでくれたおかげで、当日は問題なく開催することが出来た。（２年生女子）

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校

（管理機関：国立大学法人　金沢大学）

　2014年度から5年間 SGH 指定校であり、従来から総合的な学習（探究）の時間に力を入れていた。WWL 拠点校以降は、1年次には地域課題、2年次にはグローバル課題と、徐々に視野を広げるカリキュラムを開発している。カリキュラム開発拠点校終了後も開発を続け、現在は探究ゼミという、異才の育成を目指したカリキュラムを開講。

■探究型学習

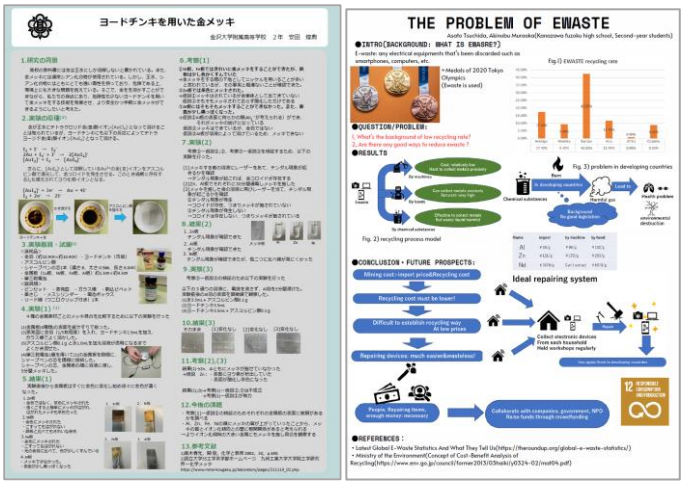
　カリキュラム開発拠点校時は、個人研究として、1年で地域課題研究、2年でグローバル課題研究、3年でグローバルキャリアパス（自己の振り返り）を行った。「地域」→「グローバル」→「自己」という流れを意識して実施

≪地域課題研究（1年次必修科目）≫

　「地域課題研究」は、総合的な探究の時間の2単位で全員必修科目である。開始当初はグループ研究であったが、令和3年度は個人研究としている（将来的に、個人研究である2年生の研究と接続させる予定）。

　地元、金沢をフィールドとして、地域の課題を発見・解決策の提案を行う。例えば、金沢の交通機関の改善、商店街の活性化がテーマとなった。

「探究ゼミ」の成果物



≪グローバル課題研究（2年次必修科目）≫

　2年次では「グローバル課題研究」の1単位の授業となる。取り扱う課題をグローバルに広げ、個人研究を行い、発表や論文作成をする。

　ゼミ形式での実施となり、教員1人に対し6～10 人の生徒がつく。基本的には、個人単位の研究だが、シンガポールの高校生と共同研究を行ったケースもある。

≪グローバルキャリアパス（3年次必修科目）≫

　3年次は、「グローバルキャリアパス」という1単位の授業である。2年間の自己の経験をまとめ、将来設計を立てる。2年間の学びを踏まえて自分に何が出来るかをまとめる。

（カリキュラム開発拠点終了後の取組）

　カリキュラム開発拠点終了後は、「探究ゼミ」という、異才の育成を目指したカリキュラムを開発。大学のゼミのような形式で，校長と養護教諭を除く 20 名の教員が、それぞれ，自身の専門性や問題意識に応じて展開する探究ゼミという内容である。各ゼミにおいては，自分のゼミで育成する資質・能力を選定するとともに，それをどう評価し育成していくかを考えて，自身のゼミのカリキュラムを考えていく。

探究ゼミ＋探究基礎（1年次必修科目）	総合的な探究の時間の2単位で全員必修科目。探究基礎で1単位、探究ゼミで1単位で実施する。生徒は，各教員が掲げるテーマやビジョンをもとに、3 年間所属するゼミを選択する。
探究ゼミ（2年次必修科目）	2年次でも1年次と同様に，総合的な探究の時間の1単位で探究ゼミを実施する。
探究ゼミ（3年次必修科目）	3年次の探究ゼミでは，主に「2年間の探究活動の内容をまとめる」「2年間の学びを踏まえて自分に何が出来るかをまとめる」というねらいをもった1単位の授業である。全ゼミ共通で，2年間の自己の経験をまとめる「学びの履歴書」と、将来設計を立てる「学びの設計書」を書き提出するカリキュラムとなっている。

■海外フィールドワーク・留学

　連携校のシンガポール NJC 校とは、リモートで共同研究を実施。実際にシンガポール研修にて同校を訪問し、現地での追加調査や意見交換を予定していたが、コロナ禍により中止となった。そこで、国内・山陰地方や九州地方にフィールドワーク先を変更し実施。

シンガポール NJC 校とのリモートでの共同調査の様子

■外国語や文理の教科を融合した教科・科目

1年生の総合的な探究の時間の2単位のうち1つを「国際教養基礎（カリキュラム開発拠点終了後は、「探究基礎」に変更）とし、探究活動につながる基礎的な内容を指導した。探究活動の基本的なスキルとして、情報の集め方、ポスター作成・プレゼンテーション法や、様々な思考ツールについて学ぶ科目とした。探究活動の内容の質の向上だけでなく、特に年度の最後に開催される課題研究発表会における、発表者の質の向上、オーディエンスの質問の質の向上、ファシリテーターの質の向上という、発表をきっかけに新しい展開を生み出すことができる力を育成する。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

管理機関である金沢大学において、科目等履修生の出願資格を「高等学校等に在学している者」へ拡大し、大学の授業に参加できるようにした。

授業科目を拡大し、金沢大学の授業の中でも、高校放課後の時間でオンライン可能な授業、あるいはオンデマンドの授業可能なものを精選し、多くの授業が選択できるようにした。それを高校生が希望し受講できるようにしている。

この制度を活用し、WWL 事業の一環として、2023年度には、附属高校から5名（1年3名、2年1名、3年1名）が大学の開講科目を履修した。同大学に進学した場合は、共通教育科目として単位取得済みの扱いとなる。

同校のコンソーシアム

■高校生国際会議等

第1回を令和3年3月にリモート開催した。テーマは、「パンデミックの時代に私たちはどう生きるか」。コロナ禍における個人の行動変容に重きを置いて、分科会で分かれてディスカッションを行った。4テーマ12分科会（3分科会が英語）を行い、国内連携校、北信越3校、エジプトやアメリカなどの海外在住者、述べ参加人数66人となった。

第2回を令和3年8月に同じくリモート開催した。2回目は個人研究に重きを置き、国内外の生徒が行っている課題研究についての意見交換会とした。国内連携校、北信越4校、東北1校、シンガポール NJC 校が参加し、述べ参加人数143名となった。

（カリキュラム開発拠点終了後の取組）

令和5年3月に行われた第1回ミライシコウ金沢の中で，国際会議を3つの分科会に分けて行った。学校や教科の枠組みを超えて，特定のテーマについて，より深く考えることを目的としている。

分科会Ⅰでは『This is the world we are living in.』をテーマに、金沢大学の留学生を交えて，彼らの母国の問題について議論し、グローバルな視点で行動を見直す機会を得た。分科会Ⅱでは『戦争体験を聞くこと，継承すること』をテーマとし，ロシアによるウクライナ侵攻から 1 年となるタイミングで，戦争を直視することで自分の行動変容につなげる考え方を学んだ。分科会Ⅲでは『仮説検定と回帰分析-探究で使える手法を学ぶ-』をテーマとして，仮説検定の考え方を日頃の探究活動にどのように活かすかをテーマに議論しながら学びを深めた。WWL 連携校の高校1年生・2 年生を中心に参加し、延べ参加人数 50 人となった。

≪生徒の声≫

～探究型学習等について～

・学校外の人と関わる機会が貴重な体験だったと思うのと同時に、自分たちで学校外に課題を見つけてどんな取材し解決していけるかなど、中学校とはレベルが違う内容であり、どうやったら良いだろうと迷うことが多かった。（３年生女子）

・シンガポールとの共同研究を行った。シンガポールの学生と定期的に Zoom で会議をした。とても大変だったことはテーマ設定。NJC 校もいくつか提案してくれて、それをもとに設定したが、シンガポール側の課題であり日本にはあてはまらなかった。３～４か月経過した頃にそこからテーマを考え直さなくてはいけなくて大変だった。でも今までやっていた研究が無駄ではなく、以前調べたことで活かせる部分もあったため、途中で回り道をしながら、探る中で一つの研究に仕上がっていくのもありなんじゃないかと感じた。（３年生女子）

～高校生国際会議について～

・全部英語で大変だった。日本人だけでなくエジプト人もいた。馴染みのない水問題など、国によって課題が違うことが知れた。同じグループに大学の感染症専門の教授がいて、今後の日本の感染症はもっと増える可能性はあることを聞けるなど良い経験になった。（３年生女子）

静岡県立 三島北高等学校 （管理機関：静岡県教育委員会）

平成30 年度まで県内唯一の SGH 指定校。SGH 指定校期間が終わる際、この活動を継続し、県内他高校により波及させたいと考え、WWL 事業に申請・拠点校となった。

■探究型学習

総合的な探究の時間において、「Crisis に負けない持続可能な社会づくりを目指して～SDGs の視点からの多面的なアプローチ～」をグランドテーマに、探究型学習のカリキュラム開発をしてきた。いずれもグループにおける研究活動で、2年間同じグループで活動を行う。

上記のテーマは、SGH 指定校期の探究学習のグランドテーマ「安全な水の確保」から発展し、「安全な水の確保は SDGs の6番にあたり、水の確保から SDGs の様々な問題に波及している」と SDGs を全体的なターゲットに設定して、カリキュラムを発展させている。

≪2年間同じグループを継続し、探究の達成を目指す≫

SGH 指定校期は、1年ごとにグループを変えていたが、クラス替えを挟んでもそのまま継続し、2年間計画で探究を深めるようにしている。これは、SGH 指定校期において、1年間だと探究のサイクルを回している途中で終わってしまうチームが多く見られたためである。

さらに、2年間同じ研究チームだと冗長になってしまう恐れもあったため、2年生後期にはソーシャルビジネスの視点を加えて、研究結果を踏まえて社会課題を解決するビジネスプラン作成まで行うようにした。社会を変える実感を持つ機会とし、さらに思考を深める力を付けていく狙いがある。

■海外フィールドワーク・留学

≪海外研修（1年生選択科目）≫

選択科目として1年生を対象とした「海外研修」を設置。現地の研修だけでなく事前事後研修も含めて週1単位の授業である。令和3年度は10 名の学生が参加した。

ベトナムで現地研修を行う予定であったがコロナ禍の影響で中止となり、令和2年度に関しては、下記「STEM for SDGs」と合同で長崎・壱岐研修を行った。壱岐では Society5.0 の実現を目指す取組を島全体で行っている様子を学んできた。

令和3・4年度は、東京の JICA 地球広場や東京の企業を訪問し、生徒のプレゼンテーションやワークショップを行った。また、12月にはホーチミン貿易大学の学生との交流や、現地で SDGs を目指しながら企業活動を行う日本企業とのオンライン研修を行う。その他、立命館アジア太平洋大学の学生とオンライン交流や、JICA 協力隊員経験者による出前授業を行った。

「海外研修」による東京研修の様子

■外国語や文理の教科を融合した教科・科目

≪STEM for SDGs（2年生選択科目）≫

2年生の選択科目「STEM for SDGs」を実施。物理、化学、生物のアプローチで研究活動を行う。令和3年度は18名が履修、週に約1回程度の講座を開催している。

物理、生物、化学の3つの班に分かれて研究を行う。例えば、物理班では、「宇宙エレベーターの中でどのような発電活動ができるか。それをどのように地球に送電出来るか」という課題に対し、モデルの作成などを行っている。

なお、一部の生徒が3月にミネソタ研修を予定していたが中止となっている。代替研修として、令和2年度は長崎・壱岐研修、令和3年度は1泊2日で筑波研修をした。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

管理機関である静岡県教育委員会主導で大学教育の先取り履修の仕組みを整備している。静岡大学と連携し、大学1年生の必修科目「数理データサイエンス入門（オンデマンド授業）」を、高校生にも提供出来るようにした。静岡大学に入学する場合は認定済み単位となるよう検討を進めている。令和2年度には、三島北高校2年生280 名が教科「情報」の中で受講している。令和3年度は、県内連携校3校からも希望者を募り、合計66名の生徒から応募があった。

■高校生国際会議等

令和3年9月に、「Crisis に負けない持続可能な社会を目指して」をテーマに高校生国際会議を開催した。対面（県内の高校のみが参集）とリモートのハイブリッドで開催し、5つのエリアに分かれてディスカッションを行った。

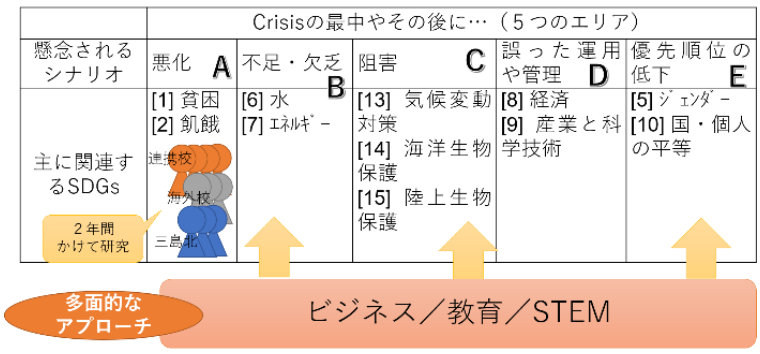
ディスカッションでは、海外校・連携校・三島北高校からなる5人（異なるエリアについて研究したメンバー）の混成分科会を組み、大学生アシスタントがサポートし議論を行った。5つのプログラムに対し、5か国11校15チーム、総勢50 名の生徒が参加した。

3日間の開催のうち、上記メインプログラムは2日目の開催とした。初日は市内のホールに集まり、オープニングセレモニーや基調講演を実施した。

最終日午前中には、海外校と県外校は学校ごとに、三島北高校に集まった県内連携校は混合メンバーで、3 分間のムービーを作った。Cross-border Proposal Movie として、5つの国の生徒が自国以外の国の社会的課題について、自国の行っている活動を元にしながら「こうしたらいいのではないか」と提案する内容となっている。午後には、開会式に先立って全員で鑑賞した。

この他、課題探究ポスターセッション等の並行プログラムを実施する予定だったが、WEB 上のデータでの公開に切り替えている。

「Crisis に負けない持続可能な社会」5 つのエリア



「FALCon 高校生国際会議@Mishima」初日の様子

≪生徒の声≫

～探究型学習等について～

- 探究は本当に自分たちがやりたいことについて、自分たちで全部考えて動くことができた。他の授業はやりたくなくてもやるといった受け身の部分があるが、探究は全部を自分たちが動かなければ何もしないまま終わる授業であり、やりたいことをやれて楽しかった。（２年生女子）

- 自分が活動する前は、「こういうところはこういう解決法がある」と、一つの問題に対して一つの視点だと思っていた。しかし、フィールドワークやアンケートをすることによって、全ての関わる人や国によって問題も違うし、その人によってコミュニケーションの取り方も違う。少しでも色々な視点から物事を見ないと問題に対して多くの人が満足する解決方法にならないということを学んで、一つでも多くの視点で物事を見られるようになったと思う。（２年生男子）

～海外フィールドワーク・留学について～

- 海外研修のプログラムで、どういう研究方向で行こうか各グループで決めたが、そのとき分野別に文化や環境などで分け、「文化だったらこういう問題がある」とさらに枝分けして、こういう問題のときはこういう人が困るといった事例を知るプログラムがあった。最初は難しかったがだんだんと色々な意見が出て、そのプログラムをやったことで色々な視点から見るという考え方が深まったと思う。（２年生男子）

～高校生国際会議について～

- 国際会議の発表のとき、自分たちが考えたアプリの提案をしたところ、海外の方から目の見えない障害の方にはどう対応するのかと意見をいただいた。自分たちの身の回りに障害を持った方がいなかったため、そういう方々を含んでいなかったことに気付き「しまった」と思った。（２年生男子）

立命館宇治高等学校　（管理機関：学校法人　立命館）

SGH 指定校として IB コース（国際バカロレアコース）、IM（留学必須コース）において SGH 事業を実施。その後、2018年度より、探究をカリキュラムの柱とするカリキュラム改革に着手してきた。この改革が、WWL 事業の目標と一致する部分が大きいため、WWL 事業への参画を決定した。

■探究型学習

SGH 指定校時期に IB コース（国際バカロレアコース）、IM コース（英語での授業実施・留学必須コース）で行っていた探究学習を、WWL 事業では IG コース（文系・理系コース）にも展開している。IM コースはグループで、IG は個人（グループも可）で、いずれも3年間を掛けて探究学習に取り組む。各学年で途中段階の発表を行う機会を挟みながら、3年生の1月後半に全生徒参加の公開研究会を行う。

≪IG コース≫

IG コースでは、「コア探究」と呼ばれる、3年間5単位相当の総合的な探究の時間を実施している。同校では、探究活動にキャリア教育の要素を含め、「生徒が高校3年間で何か見つけて、大学に行ってほしい」という考えのもと、生徒が自分自身の本当に取り組みたいテーマを見つけることを重視した探究的な学びを行っている。

2年生をテーマ設定の1年間とし、「論文からテーマを設定する」「自分でプロジェクトを企画してテーマを設定する」「進路探究の中からテーマを設定する」など、色々な切り口でテーマ設定を行い、それらを合わせた上で3年次の最終テーマを決めるようにしている。

最終的なゴールは、高校3年次で生徒自らが「自分のテーマ／自分のプロジェクトとして、これからも深めたい」と思うテーマを決め、論文、プロジェクト実施、起業プラン作成のいずれかとして形にする。特にプロジェクト型の研究では、他校の発表会への参加やプロジェクトアワード、ビジネスプランコンテスト参加など外部への活動も増えている。

≪IM コース≫

IM コースでは、GLS（Global Leadership Studies）という名称で総合的な探究の時間を実施している。IM コースは3年間のうち1年間は留学期間であり、実質2年間で4単位相当の取組を行う。留学前に、色々な方の講演を聞くなど「視野を広げる」活動を行うとともに日本文化探究を行った。留学から帰国後、高校3年次においては「生徒が社会を変える」をテーマにし、国内外の地域の活性化に取り組む。

例えば、海外との交流として「ラオス研修」というプログラムを実施している。ラオスコーヒーの仕入れ農家支援では、地域の方に焙煎していただき、興風祭（文化祭）や地域の祭事で販売し、その収益をラオスの教育に還元するなど実際の活動まで結び付ける。

■海外フィールドワーク・留学

海外研修、国際会議参加や海外からの学生招聘など海外交流を盛んに行っていたが、コロナ禍の影響で実際の交流が出来なくなり、オンラインに切り替えている。

IM コースのラオスに一週間滞在する渡航プロジェクトも、現地のスタッフが Zoom にて日本国内の WWL 連携校（福岡・横浜・埼玉）も繋いだ交流イベントに切り替えた。1名の教員に対し10 名の生徒を連れてラオスに行く予定が、リモートでは1名の教員に対し40～50 名の生徒がラオスの市場や農園を見ることが出来たなど、良かった面もある。1年間の海外留学は、時期と期間を変えて実現している。

IG コースでは、希望制の短期留学や夏休み研修を、コロナ禍以降は希望制のオンラインイベント（海外渡航・海外研修）に切り替えて実施した。

同校によるオンラインラオス研修のレポート（一部抜粋）

■外国語や文理の教科を融合した教科・科目

≪科学と人間生活≫

文部科学省指定科目（理科）の「科学と人間生活」を、文理融合カリキュラムとして1年次に設定している。

「科学と人間生活」は理科科目であるが、人の身近にある様々な科学の現象や人間生活に関係ある科学の実証を生徒たち自身が考え探究する内容が含まれており、当校では文理融合科目として相応しいと考え実施することとした。

≪Science for SDGs、SDGs≫

2科目ともイマージョンで実施された。IM コースでは、Science for SDGs として、科学的な観点から SDGs を考えていく内容。IG コースの SDGs を含め、SDGs に係わる実例の学びからプロジェクトを実行する。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

立命館大学と高大連携プログラムを設定し、当校生徒が参加し大学の先生から直接学びを受ける機会を設けている。大学での講義聴講、大学講師が来校しての講義、ゼミ参加などがある。

この他、APU（立命館アジア太平洋大学）の学生海外研修への参加を企画していたが、コロナ禍のため実現しなかった。しかし、APU 国際学生とのディスカッション企画を新たに実施するなど、グローバルイシューに対するディスカッションの場を設定することが出来た。

■高校生国際会議等

WWL 拠点校事業1年目（2019年度）に6種の国際交流イベントを対面で開催した。2020 年以降はコロナ禍の影響により全てオンラインとなっている。

≪全国高校生 SR サミット FOCUS≫

毎年8月に実施する「全国高校生 SR サミット FOCUS」は、対面実施時は約100 名の生徒参加であったが、2020 年度にオンラインに切り替えて参加者数が350 名に増えた。

「FOCUS」では、全国各地の PBL 型学習を行う学校のプロジェクトが集結する。プロジェクメンバーが他校のプロジェクトに参加し合い、各々のプロジェクトで意見交換や他校の知識・エッセンスを吸収し、最終的に自分のプロジェクトをブラッシュアップする。

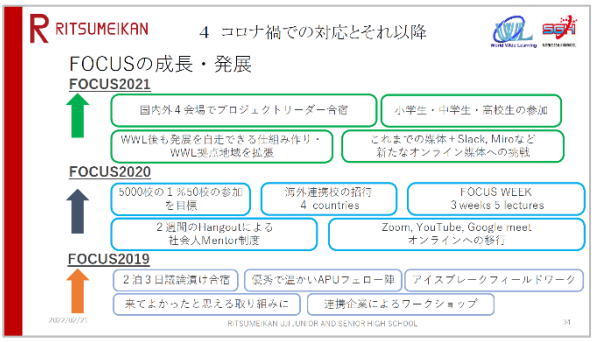
≪World Youth Meeting≫

World Youth Meeting は、海外の他の学校の生徒2校がペアになり、大会のテーマに沿って課題解決の提案プレゼンテーションを行う。そのテーマに沿って違う国の生徒との間でプレゼンを事前に作ることで、コンフリクション（衝突、対立、葛藤）が起こり、それを乗り越えて一つの目標を持ったものが作れたことで生徒同士が仲良くなるという経験をする。

≪Global Youth Fair≫

Global Youth Fair は、WWL の総決算として、生徒たちが自分たちで「こういう会議を持ちたい」と計画・テーマ設定・運営まで生徒が主体となって行うイベントである。2021年度は、参加人数は当校から12名と運営スタッフ50 名、連携校・連携校以外国内校、海外校全体で250 名以上の参加となる。

同校による SR サミット FOCUS・GYF のレポート（一部抜粋）



≪生徒の声≫

～海外フィールドワーク・留学について～

・１年次（新型コロナウイルス流行以前）にラオス渡航が出来た最後の学年だが、ラオスに行った際に自分の世界を見る視点が変わった。それまでは社会問題を解決するのは遠い存在であり、社会問題自体も遠い場所で起きている問題だと思っていたが、ラオス渡航に行ったことで、自分の行動・考え方自体が社会問題に影響を及ぼしている面も多くあるということを知り、社会問題・SDGs に取り組みたいと思った。２年生になって SDGs の授業を選択した際、その授業では自分のプロジェクトを行えると知り、SDGs という授業を通して自分も社会に対してアクションを起こしたいと思い、自分のプロジェクト「SDCs」を立ち上げた。（３年生女子）

～FOCUS について～

・FOCUS でリーダーを務めたが、それらに参加する前は「これが正しい」「これをやって」とメンバーに自分の考えを決めつけていた。FOCUS は海外・国内の高校生や企業の方とプロジェクトをブラッシュアップするが、文化の違い・場所の違いから異なる意見がたくさん出て、最初はそれをネガティブに捉えていたが、「それは一つの個性だ」と思えるようになり、正解は一つではないと感じ、たくさんのアイディアを受け入れることが出来るようになった。最初は一つのことしか考えられなかったが、プロジェクトをたくさん経験してきた中で、多くの違う意見も尊重できるようになり、みんなの意見を聞けるリーダーになったかなと思っている。（３年生女子）

大阪府立 北野高等学校 （管理機関：大阪府教育委員会）

大阪での医・商・工連携による最先端医療開発と、2025年大阪・関西万博のテーマ「多様で心身ともに健康な生き方」を踏まえ、同校を拠点としたコンソーシアムの目標を「いのち輝く未来を創造するイノベーティブなグローバル人材育成」に設定。「健康・医療」と「幸福」をテーマとしたプログラムを展開している。令和4年度以降も英語運用能力の向上、海外研修、課題研究を結合し、グローバル人材育成のためのカリキュラムを継続している。

■探究型学習

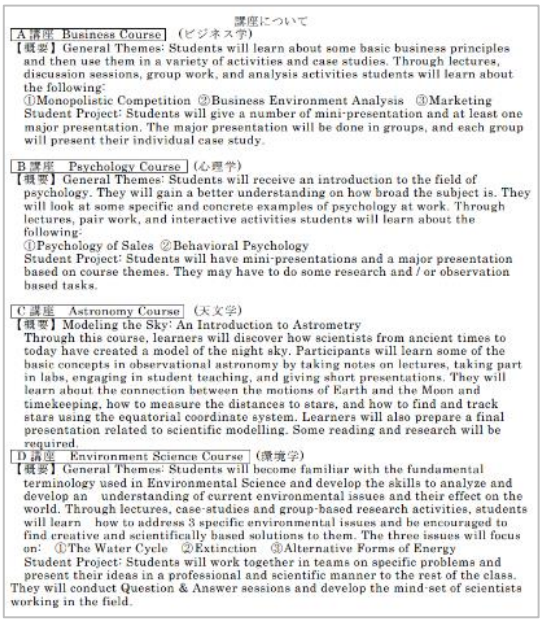
同校では、1年次に課外活動「学内留学」に参加した生徒の中で、2年次の「WWL コース（※）」を選択した生徒が、「課題研究」（探究活動）の中でもより高度な探究を行っている。
（※WWL コースという名称だが、コース別のクラスは設置しておらず、全クラス内にコース生が分かれて所属している。1年生秋の段階で募集し、令和3年度は60 名の生徒がコース生となっている。）

≪学内留学（1年次課外活動（※希望制））≫

ネイティブ講師から英語で大学教養レベルの内容を学ぶ。講義に加えてディスカッション、データリサーチ、プレゼンテーション等の活動を行い、英語の4技能の向上に加えて思考力、情報収集力、分析力、表現力を鍛える。授業、発表は全て英語で行い、英語をツールとしながら、課題解決・課題研究の手法を学ぶことを目的としている。

海外に関心があり、英語力を伸ばしたい生徒が参加している。定員80 名のところ、毎年100名以上の応募がある。

「学内留学」で学ぶ大学教養レベルの講座４種



課座について

A 講座 Business Course （ビジネス学）
【概要】General Themes: Students will learn about some basic business principles and then use them in a variety of activities and case studies. Through lectures, discussion sessions, group work, and analysis activities students will learn about the following:
①Monopolistic Competition ②Business Environment Analysis ③Marketing
Student Project: Students will give a number of mini-presentation and at least one major presentation. The major presentation will be done in groups, and each group will present their individual case study.

B 講座 Psychology Course （心理学）
【概要】General Themes: Students will receive an introduction to the field of psychology. They will gain a better understanding on how broad the subject is. They will look at some specific and concrete examples of psychology at work. Through lectures, pair work, and interactive activities students will learn about the following:
①Psychology of Sales ②Behavioral Psychology
Student Project: Students will have mini-presentations and a major presentation based on course themes. They may have to do some research and / or observation based tasks.

C 講座 Astronomy Course （天文学）
【概要】Modeling the Sky: An Introduction to Astrometry
Through this course, learners will discover how scientists from ancient times to today have created a model of the night sky. Participants will learn some of the basic concepts in observational astronomy by taking notes on lectures, taking part in labs, engaging in student teaching, and giving short presentations. They will learn about the connection between the motions of Earth and the Moon and timekeeping, how to measure the distances to stars, and how to find and track stars using the equatorial coordinate system. Learners will also prepare a final presentation related to scientific modelling. Some reading and research will be required.

D 講座 Environment Science Course （環境学）
【概要】General Themes: Students will become familiar with the fundamental terminology used in Environmental Science and develop the skills to analyze and develop an understanding of current environmental issues and their effect on the world. Through lectures, case-studies and group-based research activities, students will learn how to address 3 specific environmental issues and be encouraged to find creative and scientifically based solutions to them. The three issues will focus on: ①The Water Cycle ②Extinction ③Alternative Forms of Energy
Student Project: Students will work together in teams on specific problems and present their ideas in a professional and scientific manner to the rest of the class. They will conduct Question & Answer sessions and develop the mind-set of scientists working in the field.

「学内留学」の授業中の様子

≪課題研究（WWL コース生は「WWL グローバル探究」）≫

同校では、2年次にグループによる課題研究を行っている。このうち、WWL コースの生徒は「WWL グローバル探究」の科目名で、「健康・医療」、「幸福」をテーマに、他生徒よりも高度な課題研究を行う。

WWL コース60 名は、学校設定科目「WWL グローバル探究」を選択し、英語科、社会科、理科、体育科のいずれかのグループに所属し、健康医療、幸福のテーマに関わる研究を行っている。

上記のうち、英語グループでは、日本人高校生と留学生が英語で探究活動をする。教員も、同校のネイティブの英語教員が担当となり生徒の探究活動を指導する。

令和4年度以降は特定のテーマを掲げていないが、生徒の素朴な疑問や発想を大切にしながら、アカデミックかつグローバルな探究活動の場を追究している。

■外国語や文理の教科を融合した教科・科目

≪国際情報（1年次必修科目）≫

学校設定科目「国際情報」が融合科目となっている。

2年次に行う課題研究の基礎として、データ解析、統計処理を学ぶ（情報、理科、数学科の教員によるチームティーチング）。例えば、物理の実験では、データを取ってプレゼンテーションをした。

また、英語でのディベートやプレゼンテーションを行うなど、英語運用能力・プレゼンテーション力向上も目的とした授業も行う（授業は、情報、英語の教員によるチームティーチングで行われる）。英語の発信力を鍛える即興型ディベートを行い、4人に分かれ15分で準備し2対2のディベートをする。その後、英語による統計に関するプレゼンにも挑戦した。

なお、情報の授業を「国際情報」の科目に組み替えており、情報科の教員を中心に授業を進めた。令和5年度以降は「国際情報」を「情報Ⅰ」に変更したが、課題研究基礎に該当する内容は継続している。

■海外フィールドワーク・留学

WWL コースの生徒は必修として海外研修を実施。1年春にオーストラリアと台湾、2年夏にハワイ、東南アジアを計画していた。だが、コロナ禍により、令和元年度夏の海外研修のみの実施となり、令和2年度以降は英語研修を代替として実施した。

英語研修（海外研修の代替）

令和 2年度	2年生	WWL グローバルリーダー養成英語集中講座	国内にいる大学／大学院に通う留学生と共に WWL テーマに関する知識を深め、自身の課題研究を進める。
	1年生	WWL 淡路島研修	WWL テーマに関するフィールドワークを行い、課題研究への知見を得る。
令和 3年度	2年生	クリティカルシンキングワークショップ	クリティカルシンキングについて英語で学び、自身の探究テーマを批判的に考える。

また、代替研修に加えて令和3年度は海外連携校（オーストラリア、台湾）とオンライン交流を実施した。WWL コースのうち、グローバル探究の英語グループ13名が参加した。海外連携校の生徒に事前に課題研究のプレゼンテーションを視聴してもらい、そのトピックやプレゼンテーションの内容について意見交換を行った。

オンライン交流中の様子

令和5年度以降は海外への訪問、研修活動が復活し、台湾、シアトル、デンマークの連携校との相互訪問が実現した。さらに、同世代の生徒どうしがディスカッションを行うことで、課題研究の深化にもつながりつつある。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

大阪府教育委員会、北野高校、大阪工業大学の3機関が事務局となり、高大連携を実施している。大阪工業大学の教員から、課題研究についての指導を受けている。また、大阪工業大学と「AI やデータの力を最大限活用し展開できる人材」の育成をめざした高校生向けの特別授業を実施し、北野高校や連携校の生徒20 名が参加した。
その他、大阪大学、大阪市立大学、奈良県立医科大学、大阪教育大学など大学の教員を招いての講演などを実施している。

■高校生国際会議等

大阪府教育委員会主導で高校生国際会議を実施した。1回目は、令和2年12月末にオンラインで実施。日本の高校生113名（拠点校＋連携校）と留学生 20 名が参加し、基調講演とグループに分かれての協議を行った。グループでの協議では、SGDs や健康・医療のテーマの中で得た知識をもとにディスカッションをした。

2回目は、令和4年1月にオンラインで実施。拠点校・連携校の2年生生徒71名と海外（インド、インドネシア）の高校生64名が参加した。基調講演と、“Should online classes be continued after the pandemic？”をテーマにグループでの協議を行った。

≪生徒の声≫

～探究型学習等について～

・海外経験がある。世界中の文化、それに触れることで自分を成長させたいと思い、北野高校に入学し WWL コースを活用して、自分で機会を作っていこうと思った。（２年生女子）

・学校に入ってからこういう取組みがあると知った。今年は行けなかったが、英語を学ぶことは大事と思い、それには現地に行くことが効果的と感じ、海外の人と話をしたいと思い、生の英語に触れる機会が欲しいので参加した。（２年生男子）

～海外フィールドワーク・留学について～

・WWL コースの課題研究に参加して良かった点は、海外の学生と交流が出来たこと。普段の日本の授業は決められた時間の中である程度話さなければならず、日本語を用いたり、緊張して言えなかったりしたが、オンラインミーティングではゆっくりと考えて言いたい表現を探せて、英語を話す抵抗感が減ったし、実際に英語を使えてよかった。（２年生女子）

・英語の作文を書く際、自分が書いた文章を海外にいる相手に見せて感想を聞くといろんな返事が返ってきて、自分の伝えたい言葉をどう英語に変換するか考えた。最初は言葉が出なかったが今は改善されてきている。視点に偏りがあることを実感し、日本だけにいることが少なからず影響していると思う。知らないうちに決めつけていたことがあったことに気付けた。（２年生男子）

神戸市立 神戸葺合高等学校 （管理機関：神戸市教育委員会）

5年間 SGH 指定校として国際科にて事業に取り組み、グローバルスタディーズという学校設定科目を創設した。WWL では、普通科に学際的科目を設定し、カリキュラム開発を行う。

■探究型学習、外国語や文理の教科を融合した教科・科目

SGH 指定校において国際科で行った教科横断的な英語での探究型授業（グローバルスタディーズ）の更なる開発と、普通科における文理融合型のカリキュラム開発を行い、下記のような文理融合型学際的科目を設定した。

1年生	家庭基礎（普通科／国際科） 情報の科学（普通科／国際科） グローバルスタディーズⅠA（国際科）
2年生	学際リサーチ（普通科）※理科と地歴公民の融合 学際国語（普通科） グローバルスタディーズⅡB（国際科）※英語による課題研究 グローバルスタディーズⅡC（国際科）※地歴公民と英語の融合
3年生	学際フードデザイン（普通科） グローバルスタディーズⅢC（国際科）

このうち、2年生の学際国語（普通科では英系／文系の全員が選択）、学際リサーチ（普通科の選択科目、理科と地歴公民科の教科間連携）、3年生では学際フードデザイン（普通科の選択科目）で探究型授業を実施している。

例えば、学際国語では、文系・理系の文献を読み、生徒が自分で興味があるものを調査し、調べた結果を新聞記事に取りまとめる。

≪カリキュラム開発時のポイント≫

文理融合型科目開発に向け、数学・地歴公民・理科など複数の科目の教員で議論し、「どの教科なら文理融合が出来るか」「地歴公民と理科で1つの教科にしてみよう」「国語は扱う教材が多岐にわたるから理科的なものも扱えるのではないか」「家庭科は元々学際的な科目ではないか」などの意見を出し合った。

≪WWL フォーラムの開催≫

これらの学際的科目の成果の発表の場として、WWL フォーラムを1月に開催する。普通科2年生の学際国語や学際リサーチ、国際科2年生のグローバルスタディーズの代表生徒による研究発表、1年生は総合的な探究の時間での取組の発表を行っている。拠点校の発表が中心ではあるが、神戸市立高校の共同実施校の3校と連携校1校の代表生徒にも参加を呼び掛けている。

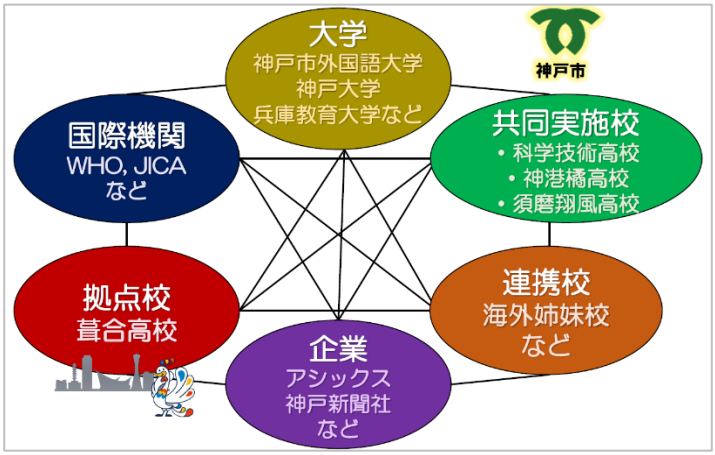
WWL フォーラムにはカリキュラムアドバイザー（兵庫教育大学 教授 西岡伸紀先生）など管理機関側も参加し、生徒の発表は年々内容が深まっていると評価を受けている。しかし、新しい課題として、生徒の質問力が挙げられている。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

神戸市立外国語大学の教員による特別講座や、生徒を派遣しての発表見学等を行っている。

神戸市教育委員会のプログラム「Stanford e-Kobe」（Stanford e-Japan の神戸版）に葺合高校生徒18名が参加している（合計人数は30 名程度）。

協力頂いた大学・民間企業・国際機関・共同実施校等の組織図



■海外フィールドワーク・留学

スウェーデン、オーストラリア、アメリカなどに希望制の海外研修を予定していたが、コロナ禍で中止となった。

代わりに、産官学プロジェクト（Stanford e-Kobe）（神戸市とスタンフォード大学（米国））、オンライン国際交流プログラム（神戸市と With The World（株））などで国際交流を行った。

令和5年度からは、オーストラリアの姉妹校との現地交流を再開している。

■高校生国際会議など、海外交流の取組

毎年7月に高校生国際会議を開催している。SGH 指定校期に始めたものを継続し、国際科の生徒は全員参加している。令和元年度は対面、2、3年度はオンラインで実施とした。令和3年度は、国際科、普通科の全校生徒が参加し、国際科生徒だけでなく、普通科の学際フードデザイン選択生徒もプレゼンテーションを行った。海外連携校等と分野（教育・環境・健康など）に分かれ、共通の課題についてプレゼンテーションを行い、解決策について議論を行う。

高校生国際会議のテーマ

1年目	Local Action for Global Impact
2年目	Risk Management International Cooperation during the Covid-19 Global Crisis
3年目	Resilience in Action During the COVID-19 Global Crisis

■共同実施校との課題研究協働

共同実施校・連携校とは、国内外を問わず、課題研究の協働を行っている。

特に神戸市内には特色のある高校が多く、神戸葺合高校の生徒が他校教員の指導のもと研究を行うなど、それぞれの学校の特色を生かした課題研究が行われた。

市内の共同実施校との課題研究協働

科学技術高校 教員 →拠点校生徒へ指導	アプリ開発 木造建築保存
楠高校教員 →拠点校生徒	障害者雇用
拠点校教員 →科学技術高校生徒	日本語から英語・タイ語への翻訳

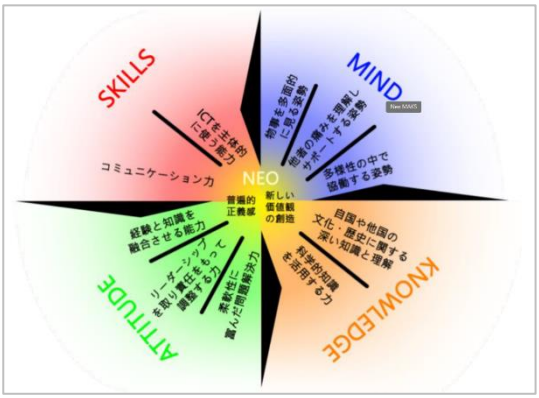
≪課題研究交流発表会≫

毎年12月には、それぞれの課題研究の発表やディスカッションの場として課題研究発表会を行っている。神戸市内の市立・県立の高校も参加し、また、WWL が進むことで参加する学校数・参加数が増えている。

■「Ｎｅｏ　ＭＡＫＳ　１２の力」を設定し、ＷＷＬの効果を検証

WWL 事業の効果を検証するため、「Neo MAKS 12の力」を設定している。1年次6月、2年次6月、3年次12月に質問紙調査を実施し、12の力の獲得状況を把握している。3年間の調査で「物事を多面的に見る力」「多様性の中で協働する力」「コミュニケーション力」が伸びていることがわかった。

学校で独自に設定した「Neo MAKS 12 の力」の項目



≪生徒の声≫

～探究型学習、外国語や文理の教科を融合した教科・科目について～

- 課題研究や授業中のプレゼンテーションが多くあり、人の意見を英語で聞いて理解したり、自分の意見も英語で話したりと、英語でコミュニケーションを取れるのが楽しかった。英語を使うことで論理的思考を求められるため、大変だったが身に付いたものは大きかったと思っている。（３年生女子）

- ２年次に学際国語を選択した。様々な社会で起きている問題を自分たちで課題と解決策を自分レベル／世界レベルで考えるという探究を行った。普段、社会問題に目を向けようと思っても自分の生活に精一杯で目を向けられていない部分を深く考えることができ、社会問題により関心が深まった。３年生からは学際フードデザインを選択している。２年次に学際国語を選択したことで「学際的にどんなことを学べるのか」と興味が沸いた。みんなで協力して課題研究などを行う中で、学びが深まったかなと思っている。（３年生女子）

～高校生国際会議について～

- ディスカッションのファシリテーターとして参加した。場を和ませてみたり、逆に自分が引っ張っていくリーダーシップだったり、意見に中立でありながら、要約し次の人に渡すファシリテーション能力を求められた。そのような活動を高校生の段階から授業で担当することは、貴重な経験だと思った。（３年生男子）

- 普通科は PPT を使って発表したり、自分たちが考えていることを発表したりといった機会があまりなかった。今回その機会があり、自分たちが考えるだけではなく相手にわかってもらえるように伝える、さらに英語で行うということがすごく苦労した部分ではあったが、伝える力が短期間で成長したと思う。（３年生女子）

関西学院高等部　（管理機関：学校法人関西学院）

これまでの SGH 指定校での取組を活用し、新たなカリキュラム開発に取り組んだ。1年生の課外科目「グローバル探究 BASIC」を受講した生徒を中心に、2年次以降も WWL 関連科目を選択していく。カリキュラム開発拠点校の指定終了以降も継続中で、最終的には生徒全員が WWL 関連科目を修得することを目指している。

■探究型学習、外国語や文理の教科を融合した教科・科目

≪グローバル探究 BASIC（1年生課外活動（※選択式））≫

令和元年度より1年生の課外科目として「グローバル探究 BASIC」を新たに設定した。30 名程度の生徒が参加している。

第1フェーズでは、第一線で活躍されている方の話を聞くと共に、SDGs の理解を深めていく。第2フェーズでは、フィールドワークを通じて第1フェーズで関心を持った分野の理解を深める。第3フェーズでは、フィールドワークを通じて得た学びをまとめ、2・3年生でどのような活動をしていきたいのかを発表する。

希望制であるが人気は高く、30 名定員に対し70 名程度の応募があった（令和元年度）。

グローバル探究 BASIC　3 つのフェーズ

≪「グローバル探究」関連科目（2・3年次選択科目）≫

年次進行で令和2年度・3年度に、高校2・3年生を対象として「グローバル探究」関連科目として、「AI 活用」「ハンズオンラーニング」「グローバルスタディ」の3つの科目を開設した。グローバル探究 BASIC を受講した生徒を中心に、それぞれ30 名程度が受講をする。

a）AI 活用

AI を利用している企業への訪問などを通して AI について学び、AI を活用して様々な課題を解決する技術を学ぶ。身の回りのどういったものが AI 活用されれば課題解決に繋がるかなど、AI の機能を使っての商品開発や SDGs の問題解決方法などを提案していく。

b）ピーススタディ

平和と人権をテーマに問いを立てて、教室の外に出て課題解決に挑戦していく授業。テーマについて、身近なところからアプローチし、社会課題の発見と解決方法を探る。

令和3年度のテーマは「戦争と原発」。戦争を自分たちの問題にした時、どんなことが考えられるかを検討していく。西宮や関西学院は、過去、戦争に巻き込まれたことに気付き調査を始め、平和教育資料館への訪問や、関西学院の歴史管轄など文献を探して、キャンパスにも様々な戦跡があることに気付く。

c）グローバルスタディ

オンラインディスカッションを用いて、外国の高校生と共に身近な社会問題の解決に取り組む PBL 型授業。例えば、温暖化をテーマに、グレタ・トゥーンベリ氏のこと、フィリピンの方とのやりとり、温暖化について授業で得た知識の獲得、解決に取り組んでいる企業・NGO について、などを通じて生徒それぞれの課題を発見し、解決方法を探る。

令和3年度にカリキュラム開発拠点校指定が終了した後も、令和4年度にはグローバル探究 D（サイエンス探究）、グローバル探究 E（アート思考）を、令和5年度にはグローバル探究 F（社会福祉）、グローバル探究 G（エネルギー）を開講している。今後も必修科目化を目指し拡大していく予定である。

≪ソーシャル探究（1・2年次必修）≫

ソーシャル探究は、1年生・2年生が学年全体で取り組む活動であり、まず1年生3学期の毎週1時間、地域の様々な社会問題について知識を深め、その問題についてリサーチし、解決策について発表を行う。

2年生では、各自治体より提示された課題をもとに、6月に校外学習としてフィールドワークを行い、更に課題に対する解決策を検討していく。11月の文化祭において、自治体の担当者に来ていただき解決策についてプレゼンを行う。更にはこの学びを2年生の終わりにある修学旅行に繋げていく予定である。

ソーシャル探究　1・2 年次の流れ

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

管理機関である関西学院大学が主導で、AL ネットワーク・プログラムを実施、様々な講座・イベントを開催してきた。例えば、以下のような講座がある。

AI 活用入門講座（オンライン）	AI 活用に関する基礎知識を習得する。さらにそれを活用して、現実の諸問題を解決する能力を文系・理系を問わず涵養する。最終講義では、それまでの知識等を活用し、どのように高等学校での探究・課題研究活動に活用出来るのか等にも言及。
AI 活用 for SDGs ワークショップ	SDGs の実現に向け、AI をどのように活用出来るのか AI についての講義や SDGs についての講義を受け、グループワークを通じて考える。
WWL・SGH×探究甲子園 （令和2年度まで）	日本国内の高校において取り組まれた探究活動の成果を発表し、共有する。SDGs に関するテーマで「探究活動プレゼンテーション」・「グループディスカッション」2つのセクションで構成して実施している。
中・高生　探究の集い （令和3年度より）	WWL・SGH×探究甲子園の終了後、対象を中学生にも拡大し、「ポスターセッション」「コンテスト部門」の2つのセクションで構成し、日頃の探究の成果を発表する場となるよう実施している。

この他、高大連携科目として関西学院大学が開講している科目は、高等生3年生の5・6時間目の選択科目の授業として受講することを可能としており（約20-30 科目から選択）、来年度より、高校と大学の両方で単位修得が認められる形となった（大学では科目履修生）。

■海外フィールドワーク・留学等

グローバルスタディにおいて、1年生の終わりにフィリピンでフィールドワークを予定していたがコロナ禍で中止となっている。

なお、コロナ禍で中止となった海外研修については全てオンラインのツアーに振替、希望者の参加とした。令和2年度フィリピン、令和3年度フィリピン、ザンビアとのオンラインツアーを実施した。その後、令和4年度よりフィリピンでのフィールドワークを実施している。

■高校生国際会議等

高校生国際会議を、IOM(International Online Meeting)と題して、オンラインで令和元年度・2年度の3月、6月、9月の3回開催した。生徒が中心となって企画から行った。各回国内10 校150 名海外は4-5ヵ国100 名程度の参加となった。

3回継続して実施することで、企画力やファシリテート力、英語でのスピーチなどを身に付ける狙いもあった。

1回目…参加する国内外の生徒が打ち解けて交流を促すことを目的に、世界のコロナ禍の状況を共有した。
2回目…300 名20 セッションに分かれ生徒の各研究テーマについて議論を行った。
3回目…SDGs 達成に向けてチームのプレゼンを行い、最後は自分たちで何が出来るかをまとめて宣言した。

令和3年度以降も毎年オンラインでの国際会議を継続している。

≪生徒の声≫

～探究型学習等について～

・受講してよかった。受講しなければ考えることのないことが多くあった。戦争、平和について、１年次にはエネルギー問題や食品ロスについてなど勉強した。そもそも受講するまで SDGs という言葉も知らなかったので。他の高校生がやらないことを先取りして学べたのが良かった。２年生の時、平和について勉強したとき、「火垂るの墓」の舞台が西宮・神戸だった。学校内に戦跡があるなど、戦争が自分に近いものに感じた。（３年生男子）

・中学生の頃から貧困問題や教育問題について興味があり、高校生になったらそれを学びたいと思ってこの学校を選んだ。人前で話すことが苦手なため、プレゼンテーションが多いこの授業を取ることでそれを克服出来ると思い受講した。（３年生女子）

～海外フィールドワーク・留学について～

・苦労した点は、フィリピンの生徒と Zoom でディスカッションやプレゼンをする時に、自分の英語力の無さから、伝えたいことを伝えられなかったり、相手の言いたいことは分かってもすぐ返事ができなかったりしたことで、最初は戸惑った。今は開き直ってではないが、自分の言いたいことは伝えたり、テーマが決まっている時は事前に準備するようになった。（３年生女子）

～高校生国際会議について～

・３回とも実行委員をやらせてもらった。他校の生徒だけではなく海外の生徒も関わっている。普段一緒に活動するメンバーとは違うメンバーで、またオンラインでしか会ったことのない人と一つのことを作り上げていくのが大変だった。英語力が足りず、言いたいことを言えないこともあったので、英語が出来ないのはもったいないと感じた。これから自己主張する上で英語は必要だと感じた。（３年生女子）

広島県立 広島国泰寺高等学校 （管理機関:広島県教育委員会）

世界の平和に重要な使命と役割がある「広島」という場所だからこそ出来る「グローバルな視野と強い使命感を持って持続可能な社会の構築や国際社会の平和と発展に貢献する人材」の育成を目指す。

■探究型学習

同校を拠点としたコンソーシアムでは、右図のように WWL の目標を設定し「広島だからこそ出来るグローバル人材」の育成を目指している。

具体的には、同校が従来取り組んできた平和学習と、探究活動をリンクさせた WWL のカリキュラム開発を実施。1年次は社会課題の考察、2年次は課題研究（個人）、3年次は論文作成を行う。

≪1年次の「総合的な探究の時間」≫

入口として、戦争に対する「狭義の平和」について考察する。その後、社会課題解決を「広義の平和」と捉え、SDGs の学習を行う。「SDGs とは何か」から学び、SDGs に取り組む様々な立場（企業、大学、行政）からの講演や訪問を行い、現状の SDGs への取組について学びを深める。

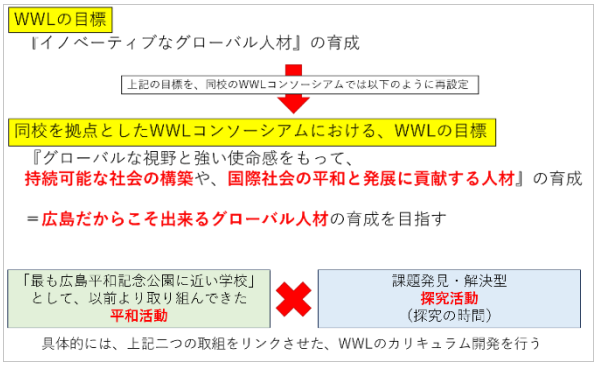
≪2年次の「総合的な探究の時間」≫

「平和について、自分との繋がりから考える」個人の探究活動に入る。「自分が取り組もうとしていることはどのような社会貢献に繋がるか」「SDGs の17のゴールのうちどれを解決することになるか」という観点から1年間研究を行い、社会人 TA に向けての発表などを経験し、最後は3月に課題研究成果発表会を行う。

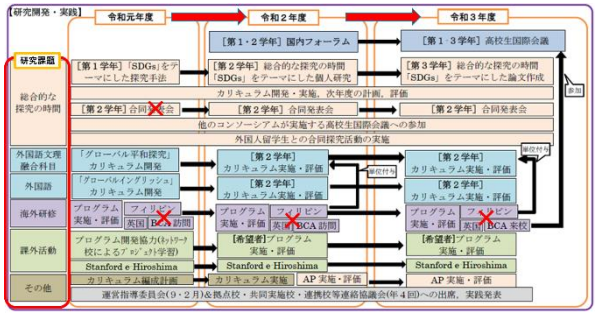
≪3年次の「総合的な探究の時間」≫

1、2年次で取り組んだ研究を論文にまとめる。平和な社会の実現に向けて、高校生として何ができるか、問題の解決にどのように取り組んで行くかを主体的に考える。

平和学習を取り入れた、カリキュラム開発



令和元年度～3 年度までに行われた、教育課程内・外の活動



■海外フィールドワーク・留学等

フィリピンへの海外研修を予定していたが、新型コロナウイルス感染症流行の影響により中止となった。代替プログラムとして、広島県教育委員会が考案したオンラインを用いた探究活動を行った。

生徒各自の SDGs の研究に沿って「自分の研究は平和とどう繋がるか」というテーマで探究活動を実施。各生徒の研究テーマ決定から、研究を深めるまでの間に海外からのゲストにディスカッションに参加していただき、生徒の探究活動についてフィードバックをいただいた。

海外姉妹校である、アメリカ合衆国ニュージャージー州のBCA校（Bergen County Academy）と、SDGs をテーマにしたそれぞれの生徒の探究活動を発表し、意見交換をしている。オンラインのみで実施していたが、コロナ禍が明け、令和5年度からは、相互訪問を再開した。

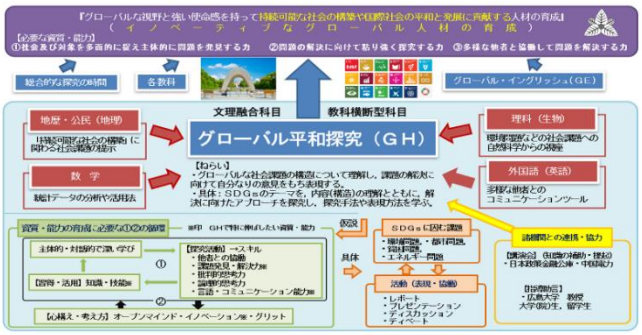
■外国語や文理の教科を融合した教科・科目

≪グローバル平和探究（2年次必修科目）≫

地理・歴史・理科・数学・英語を融合し、SDGs の視点で課題を設定し解決方法を探る授業である。

① 世界の諸課題（エネルギー問題、貧困問題など）を地理・歴史の視点で説明する。
② 理科の視点から補説をし、数学により、データ・資料の扱い方・見方を解説する。
③ 英語により、海外からの視点を提供する。
④ 専門家による講演会を開催し、最新のトピックによる問題提起を実施。
⑤ その社会問題について、各教科の評価規準に基づいてプレゼンテーション、ディベートなどのパフォーマンス活動を行う。

「グローバル平和探究」の図解



≪グローバル・イングリッシュ（GE）（2・3 年次選択科目）≫

社会課題の解決に活かせる高い英語力を身に付けたグローバル人材を育成するために、英語表現Ⅱとの選択科目として開設した科目である。

コミュニケーション活動等のアウトプットの時間を確保するため、授業で文法・語法の基礎知識を扱う時間は総時間数の3分の1程度とし、「自宅でインプット・授業でアウトプット」を実践した。

年間を通して MVP プロジェクト（Messages on the Voyage toward Peace）を計画し、「平和」「核軍縮」等をテーマとしたレシテーション、ディスカッション、プレゼンテーション、エッセイライティングに取り組んだ。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

≪高大連携による先取り履修等≫

広島大学・県立広島大学・叡啓大学（令和4年度から）と連携し、大学の講座を高校生も受講出来るようになっている。各大学の講座受講は、大学の単位化がなされる。各大学に入学した場合は、該当講座の単位認定を申請できる。

高大連携の実績（令和2年度）

広島大学	3講座	受講者数150 名（そのうち単位取得者77名／単位取得率約67%） ※夏季集中講座（オンデマンド）を受講
県立広島大学	5講座	受講者数35名（そのうち単位取得者30 名／単位取得率約86%） ※オンデマンド講座（一部リアルタイム）を受講

≪Stanford e-Hiroshima≫

米スタンフォード大学と連携し、同大学が広島の高校生向けの遠隔講座を実施する、Stanford e-Japan の広島版。

広島県内の WWL 連携校以外の高校生にも参加募集を行っており、例年県内25 名程度の高校生が参加している。

講座のトピックは、広島県から多くの移民がハワイ島に渡ったことに因んだ移民研究や、平和学習、シリコンバレーの起業家精神など、全6レッスンである。一ヵ月1テーマ、最後にプレゼンテーションを行う。

最終的に、最優秀成績者2名がスタンフォード大学現地に招かれて、生徒によるプレゼンテーションと表彰式を行うことになっている。ただし、これまでは新型コロナウイルス感染症流行の影響によりオンラインで実施している。令和2年度は、最優秀成績者2名のうち1名が広島国泰寺高校の生徒であった。

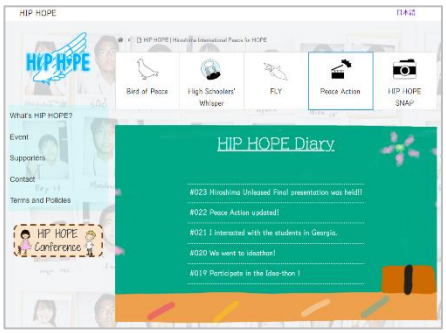
■高校生国際会議等

広島県教育委員会が生徒実行委員会を立ち上げ、高校生国際会議を実施。企画運営については、生徒たちが学校を超えて準備をした。

国際会議に向けて生徒たちで WEB サイト「HIP HOPE（Hiroshima International Peace for HOPE）」を立ち上げ、同サイトで国際会議について告知を行ったり、探究活動で作成したり国際会議で実際に発表したプレゼンテーション、国内・海外から平和へのメッセージを募り掲載した。

国際会議当日は5カ国19校（日本：15校、海外4校）が参加し、「平和」をテーマとした探究活動の成果などを発表するとともに、実行委員会生徒から平和に関するメッセージを発信した。

英語版「HIP HOPE」の画像



≪生徒の声≫

～「平和」に基づいた探究型学習について～

・学校に入学する前は世界で起こる出来事をニュースで目にしていても、興味・関心はあっても他人事というか自分が行動を起こして変わることではないと思っていた。しかし、授業を受けてみて、起こっている現状だけでなく、自分たちには何が出来るのか、SDGs も絡めて自分事として捉えられるようになった。（３年生女子）

～高校生国際会議について～

・私は国際平和実現に向けて、WEB サイトを立ち上げたり国際会議を実施したりと、色々活動した。しかし「国際平和実現なんて簡単じゃない」と言われたり、「WEB サイトを見て下さい」と声を掛けても興味のない人が多く、どうすれば興味を持ってもらえるか、価値観の違う人とどのように対話をすればいいのか、何を一緒に行動すれば同じような思いを感じてもらえるのかと、国際平和実現という大きなゴールを目指している分、同じ思いを持っている人達で活動してしまって、あまり興味のない人を巻き込み一緒に何かを作り上げるということが出来ず悔しかった。（３年生女子）

富士見丘高等学校　（管理機関：学校法人 富士見丘学園）

探究学習でデザイン思考を体得し、実際に校内外でアクション（行動）を起こすことを目指す。また、グループでの探究学習で協働を学び、新学習指導要領における3つの柱を育てる。

■探究型学習、フィールドワークの実施、海外交流の取組

富士見丘高等学校の WWL 事業では、まず1年生のグローバルスタディ基礎で、慶應義塾大学大川先生との連携で探究の基礎としてデザイン思考を学ぶ。その上で、2年のグローバルスタディ演習では、グアム、マレーシア、台湾の3つに分かれ課題探究を行う。

≪1年生「グローバルスタディスタディ基礎」≫

1年生の探究学習「グローバルスタディ基礎」では、慶応義塾大学大学院メディアデザイン科教授 大川恵子氏の指導の下、デザイン思考型の探究学習を行っている。生徒はデザイン思考を体得するために、まず「2030 年、自分たちの身の回りはどう変化しているか」のテーマで未来を予想し、その上で未来を良くするためのアイディアを考える授業を実施している。このようなプロセスで、世界のグローバル・イシューについて学び、どのように課題解決へ向けたアプローチをするべきかを考える訓練を行う。また、生徒自らデザイン思考で課題解決を考えることで、「SDGs について考えることは楽しい」という意識を持つこともねらっている。

グローバルスタディ基礎の指導には、大川教授以外にも、1年生の教員全員が関わっている。また、グローバルスタディ基礎以外の授業でも、その年の探究学習に合わせた社会課題を取り扱い、授業科目全体で探究学習に取り組む体制となっている。

≪1年次の海外交流・国内交流≫

1年生の探究学習「グローバルスタディ基礎」の授業は、大川教授の研究室の大学生約10 名がファシリテートやプレゼンテーションのサポートに入る。大学生のうち半数は海外からの留学生であり、デザイン思考を学ぶだけでなく、英語で留学生とやり取りを行うなど海外交流の実践の場となる。

また、10 月には WWL 連携校である池田学園池田高等学校（鹿児島県）を訪問し、互いの課題研究の報告・意見交換会を行っている。富士見丘高等学校の社会科学的なアプローチに対し、SSH 校である池田高等学校から科学的な視点の意見を受ける機会となっている。

グローバルスタディ基礎の授業の様子

≪2年生「グローバルスタディ演習」≫

1年生時にデザイン思考型の探究を身に付けた上で、2年生の探究学習「グローバルスタディ演習」に取り組む。グローバルスタディ演習では、「環境・災害・海洋」を大きなテーマに、アメリカ（グアム）・台湾・マレーシアの3か国のチームに分かれ、各国の情勢を踏まえた探究テーマを設定し、グループで探究活動を行う。

グローバルスタディ演習の指導には、同校の WWL 担当教員のほかに、各国の観光（ホスピタリティ・人種主義問題）や環境問題・地震等の災害問題に造詣の深い大学教授から、「環境・災害・グアム」の大きなテーマについて、知見の教示や探究するテーマの設定についてアドバイスを受けている。

3か国別の探究学習のテーマならび指導体制

アメリカ（グアム）班	テーマ	海洋リゾート開発・海洋汚染・ホスピタリティ・観光における人種主義問題
	指導	明海大学 ホスピタリティ・ツーリズム学部教授 神末 武彦氏 （サマースクールの開催）
台湾班	テーマ	災害（地震）・防災・地域社会
	指導	東吾大学 教授 羅済立氏
マレーシア班	テーマ	環境問題・社会の発展と自然の共生
	指導	慶應義塾大学理工学部 教授 伊香賀 俊治氏 地球環境戦略研究機関 上席研究員 藤野 純一氏

グローバルスタディ演習では、探究だけでなく、仲間と協力し合う「協働」を学ぶことも目的とし、グループで探究学習を行っている。グループ内で作業を補完し合ったり、探究学習後に実際に課題解決のためのアクションを起こしたりと、グループに貢献することによって、新学習指導要領における3つの柱（学びに向かう力、人間性など/知識及び技能/思考力、判断力、表現力など）が育つと考えている。

探究学習を通じ実際にアクションを起こした事例もある。環境問題をテーマにしたマレーシア班のグループは、ペットボトル削減の観点から、自分たちの一番身近である学校にて、自販機を撤去しマイボトル用の浄水器の設置を学校に求め、実現している。

上記をふまえて、2年生時に「グローバルスタディ演習」の各対象国を訪問し、フィールドワークを行っている。また、現地の高校生に向けて、各グループの探究学習についてのプレゼンテーションを英語で行っている。

≪コロナ禍における代替の内容≫
令和2年度は、各フィールドワークにて訪問予定だった高等学校とのオンライン交流に変更した。
令和3年度は、チームごとの国内フィールドワークに代替した。国内フィールドワークでも、当初設定した探究テーマに基づき調査し、地元企業など訪問した。
令和4年度からは、「グローバルスタディ演習」の各対象国への訪問を再開している。

マレーシア班のフィールドワーク（※SGH 期の写真）

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

2年生の探究学習「グローバルスタディ演習」のハワイチームの探究学習では、ハワイ大学　都市・地域開発学部　教授ラッセル・ウエノ氏による月1回のオンライン授業を実施している。
また、ウエノ教授が明海大学で客員教授を勤めていることから、夏にはウエノ教授と明海大学　ホスピタリティ・ツーリズム学部教授　神末　武彦氏の指導の下、サマースクールを開講し、全編英語で、観光と経済、ディスティネーション・マネジメント（観光のマネジメント）を学んでいる。この学習を通じ、明海大学の単位が取得できる。

ハワイ大学　ウエノ教授によるオンライン授業

■高校生国際会議等

令和3年度までは、以前より交流のある、WWL 連携校の池田学園池田高等学校とオンライン会議を実施している。令和4年度は、フィールドワーク先の訪問予定校がオンラインにて参加し、富士見丘高等学校・池田高校の探究学習の発表と、各校を交えたディスカッションを実施。

≪生徒の声≫

～フィールドワークについて～

- 私が富士見丘高等学校に入学した一番の理由は SGH（※２０１５年～２０１９年　SGH 校）だった。受験期にパンフレットや HP を見て、フィールドワークに行って、実際に海外に行き本物を見て感じてという取組が魅力的だった。高校に入学するまで、大勢の人の前でプレゼンをする機会がいままでなかったが、グローバルスタディや代替フィールドワークを通して、意外に自分でもできるんだなと、自分もここまでできるんだという気付きができた。（２年生）

- グアム班の探究学習で、グアム･ハワイと日本を比較した際、同じ目標を目指していても、全然やり方が違うことが多いことに気付いた。世界中が SDGs などの同じ目標を目指していても様々なやり方がある。世界各国のやり方についてもっと詳しく知れたらと思っている。（２年生）

長野県上田高等学校　（管理機関：長野県教育委員会）

SDGs を探究の大きなテーマに掲げる。1年次に JICA のワークショップや外部の SDGs の取組など、様々な情報に触れ、1年かけて探究学習のテーマ設定を行うカリキュラムを開発している。

■探究型学習

長野県立上田高等学校の探究型学習は、「グローバルスタディ（GS）Ⅰ・Ⅱ」の1・2年生の必修科目と、3年生の「グローバルスタディ（GS）Ⅲ」の選択科目からなる。

1・2年生の GS は継続して行い、1年生の最後に探究学習の各自のテーマを設定、2年生で探究学習を行うカリキュラムとなっている。なお、探究学習は個人で行う。

探究学習の進め方はクラスの枠を払い、生徒約10 名（1・2年生各5～6名）に対し教員一人が付く。校長・教頭を含めた全教員が GS にかかわり、担当生徒の研究テーマの設定や進行状況について助言する等、学校全体で探究学習を進めている。なお、1年次は各クラスの学級担任も GS の授業を担当し、自分のクラスの生徒の学習状況を把握している。

2年生までの活動で探究学習へ関心の強まった生徒は、3年次に GSⅢを選択し、さらに探究を深める。

上田高校の探究学習カリキュラム

1年生 「グローバルスタディ（GS）Ⅰ」	必修科目。SDGs を学ぶことから始め、最後に2年生時（GSⅡ）で何を探究するかテーマ設定を行う。
2年生 「グローバルスタディ（GS）Ⅱ」	必修科目。1年生（GSⅠ）で設定したテーマを元に探究学習を行う。 日本語で探究学習を行う「GSⅡJ」と、探究学習のほかに海外研修の事前学習や英語のディスカッションを学ぶ「GSⅡE」に分かれる。
3年生 「グローバルスタディ（GS）Ⅲ」	選択科目。2年までの探究活動をさらに深め、論文執筆などを行う。

≪グローバルスタディ（GS）Ⅰ≫

同校では、探究学習のテーマ設定について、「SDGs」「グローバル課題またはローカル課題」と大きなテーマを定めており、1年次には生徒はそれに関連する研究テーマを各自設定する。

SDGs に関する探究学習を行うにあたり、グローバルスタディ（GS）Ⅰでは、まず初めに SDGs を学ぶことから始める。JICA（国際協力機構）と共同した「国際理解ワークショップ」の実施や、地元企業や大学等を訪問または来校いただき、その企業・団体の SDGs に関する取組について学ぶ等、学校の中で学ぶだけでなく外部の情報にもいろいろと触れる機会となっている。

≪グローバルスタディ（GS）Ⅱ≫

GSⅠにて設定した各自の研究テーマについて、実際に探究学習を行う。探究学習を進めるにあたり、生徒は必要に応じて担当教員に複数回質問・相談をする。4月には設定した研究テーマについて担当教員に報告し、5月には情報収集の状況を確認する等、綿密に状況を共有することで、生徒自身にテーマ設定をさせながらも、設定のブレや進行の遅れがないよう、教員が助言している。

9月には中間報告会、2月には報告会を実施している。報告会は教室で行う。研究テーマのカテゴリごとに教室を分け、発表する時間帯を区切る。生徒は自分の発表時間に自分の研究について発表し、発表時間以外には、他の生徒の発表を聞く。生徒同士が互いの研究について触れることができる。特に、中間発表では、生徒が互いに質問したり意見し合うことで、その後の探究学習に向けた方針が固まる機会となっている。

２月の報告会の様子

■海外フィールドワーク・留学

上田高校の海外フィールドワークは、2年生全員参加の台湾研修旅行のほか、ヒューマン アクト イン マニラ・カンボジア井戸プロジェクト・ボストン スタディ プログラムの3種の希望制の研修プログラムを実施している。

≪台湾研修旅行≫

台湾研修旅行では、現地の高校生との交流、大学や学術機関を訪れてのフィールドワーク、B&S（Brothers & Sisters）プログラム研修の3種の取組を実施する。B&S プログラムで、現地の大学生と市内見学をしたり、高校訪問で、現地の高校生とディスカッションを行うなどして、英語でのコミュニケーション能力を育成する機会にもなっている。

≪ヒューマン アクト イン マニラ／カンボジア井戸プロジェクト≫

ヒューマン アクト イン マニラは、観光地化されていないフィリピンの街において、フィールドワークを行う。貧困問題・健康問題等の社会問題について実際に触れる機会となっている。

カンボジア井戸プロジェクトは、学ぶだけでなく行動を起こしたいと希望した生徒の有志により開始されたプロジェクトである。バザーや地元団体へのプレゼンテーション活動を通じて資金を集め、実際にカンボジアに井戸を掘りに行くプロジェクトである。

ヒューマン アクト イン マニラやカンボジア井戸プロジェクトに参加する生徒は、探究学習でも関連するテーマを設定していることが多い。また、関連テーマではない生徒も、研修の参加を通じ本プロジェクトに関連するテーマに探究の課題を変えるなど、生徒に与える影響は大きいプログラムとなっている。

ヒューマン アクト イン マニラでのフィールドワークの様子
（※SGH 期の写真）

≪ボストン スタディ プログラム≫

ボストン スタディ プログラムは、語学研修と学際的な学びを兼ねて、ボストンの現地大学や学術機関等を訪問するプログラムである。現地大学では見学や講義の受講だけでなく、現地大学の教授に対してプレゼンテーションを行う機会も設けられており、教授からプレゼンテーションに対するアドバイスや指導を受けることができる。

≪コロナ禍での海外交流≫

コロナ禍において海外交流は、すべてオンラインに変更した。台湾研修旅行は、本来訪問予定の高校の生徒とのオンラインでの交流を行った。マニラ研修では現地の NPO スタッフによる貧困家庭へのインタビュー中継を実施した。ボストン研修では、現地大学の教授とライブセッションを行い、プレゼンテーションの指導を受けた。コロナ5類移行を受けて、徐々に戻しつつある。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

大学教育の先取履修として、長野県立大学の夏期特別集中講義「コミュニティデザイン（まちづくり）」の各論Ⅰに、上田高校の一部生徒が聴講生として受講している。

また、信州大学は、令和4年度後期の授業より、WWL の AL ネットワーク校に関わらず県内すべての高校生に対して、科目等履修生としてオンデマンド受講できる取組を行っており、上田高校の希望者生徒も受講している。

■高校生国際会議等

高校生国際会議を、オンラインと対面との併用で、令和4年度6月11日に実施した。県内からは16校、県外6校、海外19校の生徒（総勢約190 名）が参加した。

当日はエシカル消費・教育・人権・貧困・環境・水・衛生の分科会に分かれて、問題提起とそれに対する討論を行った。最終的に、分科会ごとの提言をまとめ、最後の全体会でアクションプランを提言し、実行委員長がそれらを総括する共同宣言文を発表している。

生徒実行委員会（拠点校を中心とした、複数校の生徒からなる実行委員会）を立ち上げ、生徒自身がどのようなことをやりたいかを企画し、準備・運営を行った。

≪生徒の声≫

～探究型学習について～

・自分が１年生のときだったら、全校にアンケートを取るなんて大それたことできなかった。研究を通し、判断力・行動力みたいなものが自然に上がったと思う。（２年生男子）

・中間報告会では、研究していくと自分は「こうなって当たり前」という感じでやってしまっている部分が、詳しくない人から「どうしてそうなるの？」といった意見をもらうと、「そうか、そこも考えなきゃいけないんだ」と発見できる。それぞれが自分の興味のあることを深堀りして研究しているから、そこの立場から意見をもらえるというのは良いなと思った。（２年生女子）

京都府立鳥羽高等学校　（管理機関：京都府教育委員会）

グローバル科と普通科のある鳥羽高等学校では、グローバル科でカリキュラムの柱を作り、それを普通科へと広げている。

■探究型学習

鳥羽高校では、生徒に身につけさせたい力として「伝統・文化」、「イノベーション」、「ソリューション」の3つの領域において2つずつに細分化した6つの資質・能力を掲げている。6つの資質・能力を育成すべく授業設計・教育活動を行っている。

6つの資質・能力

伝統・文化	①歴史をとおして世界を俯瞰する力
	②多様な文化的背景を持つ人々と協働する力
イノベーション	③科学的に思考・吟味する力
	④新たな価値を創造する力
ソリューション	⑤課題解決の枠組みをデザインする力
	⑥困難な状況を突破する力

≪イノベーション探究≫

同校のグローバル科では「総合的な探究の時間」を「イノベーション探究」と名付けて実施している。

3～5名程度のグループで探究に取り組んでおり、1年生は地域発見プログラムとして「京の智の再発見」をテーマに探究活動を行う。また、事業協働機関を中心とした外部講師による講義及びワークショップや、フィールドワークをとおして、探究学習を効果的に進める基本的な研究手法＝「作法」を獲得し、協働的に学ぶ姿勢を獲得することをねらいとしている。

2年生では、課題意識を世界に広げ、伝統・文化、サイエンス、エリアスタディの3領域に分かれ、グローバル・イシューに取り組んでいく。

3年生では、2年生で行った探究の結果を英語で発信することを柱に、探究の成果について留学生とディスカッションなどの活動を行う。

探究の成果については、2年次と3年次に、個人で論文にまとめる（2年生は日本語、3年生は英語で執筆）。

イノベーション探究Ⅲ　英語プレゼンテーション

■外国語や文理の教科を融合した教科・科目

「グローバル・コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」や「英語理解」では、ある考え方に対して自分はどう感じているかを英語でアウトプットする活動を取り入れたり、「イノベーション探究」での活動に生かせるようなディベートを取り入れたりしている。

そのほか1年生では「ソーシャル・インテリジェンス」という学校設定科目において、探究活動で活用するデータ分析や統計的手法の扱い方を、「情報」と「総合的な探究の時間」をつなげて横断的に学習している。

■海外フィールドワーク・留学

≪海外インターンシップ≫

鳥羽高校では、SGH事業の取組として、京都府の株式会社片岡製作所と連携し、上海、韓国、台湾の3か所の現地の海外事業所・工場に生徒が訪問する海外インターンシップを実施していた。

WWL 事業では、これを共同実施校等にも広げる予定だったが、新型コロナウイルスの影響で中止となった。そのため、国内の工場見学を行った後、「海外オンラインインターンシップ」として、オンラインで現地従業員から事業や生活を学ぶとともに、探究活動に関する質問等を行っている。

海外オンラインインターンシップ

≪シンガポール研修≫
　2年次に4泊5日のシンガポール研修を行っていたが、新型コロナ感染症拡大のため令和元年度は中止、令和2年度は九州、令和3年度は山梨県に行き先を変更して研修旅行を実施した。九州での研修では、立命館アジア太平洋大学の留学生との交流機会を設けるなど、コロナ禍の中でも可能な範囲で国際交流を行った。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

≪大学授業の先取り履修≫
　令和4年4月から、京都府立大学と福知山公立大学の授業科目を、鳥羽高校と共同実施校である福知山高校の希望者が履修できる取組を行っている。令和4年度は試行期間（2年間）のため大学の単位としては認められないが、修了した生徒には大学から修了証が発行され、在籍校の学校の単位として認めることとしている。

≪スマート AP≫
　京都府では、大学教員によるリレー講義（スマート AP）を毎月1回土曜日に実施している。これはオンラインを中心に、在籍校の垣根を超えて探究に関わるリサーチスキルを学べるという取組であり、拠点校の鳥羽高校を中心として京都府全域の全6校の生徒が受講している。オーストラリアのクイーンズランド工科大学の講義のほか、鳥羽高校の「イノベーション探究」に関わった大学教員が講義を担当している（全7回）。
　鳥羽高校からは、2年生の普通科、グローバル科の希望者が参加している。令和3年度は11名、令和4年度は9名が参加した。参加した生徒は1年間各プログラムをやり切ったことで、自己肯定感を非常に高めている。スマート AP 参加者は、「総合的な探究の時間」においても積極的にグループの中心として活動している。

■高校生国際会議等

≪高校生国際会議（京都府 WWL 高校生サミット）≫
　京都府 WWL 高校生サミットでは、拠点校・共同実施校・府内外の連携校の生徒がオンラインでつながり、グループでの協働学習をとおして社会課題の解決に向けた提言を行う。令和4年度で3回目を迎える。令和3年度からは英語のディスカッションを本格的に導入し、全体では67名が参加し、英語のディスカッションは27名が参加した。令和4年度は京都府教育委員会が協定を結んでいるオーストラリアのクイーンズランド州教育省が管轄する高校から、6名の高校生が遠隔でディスカッションに参加することとなり、本格的に海外ともつながって英語でディスカッションする機会を設けた。
　英語のディスカッションには、京都府や大阪府に留学している大学生・大学院生にファシリテーターとして1グループ1名が参加する。これにより、円滑なディスカッションが行われる。ファシリテーターの学生の出身国は、令和4年度はブータン、カナダ、香港、中国であった。

≪京都府 WWL フォーラム≫
　鳥羽高校の研究開発の成果を他校の教職員や大学教員等に普及する目的で、京都府 WWL フォーラムを令和2～4年度に開催した。

≪生徒の声≫

～探究型学習について～

・「イノベーション探究」で、食品加工会社・工場に足を運び、工場見学とインタビューを行い、「商品にならないから」という理由で一日何十キロも食品廃棄が出ている場面を目の当たりにした。自分たちが住んでいる地域、自分たちが手にしているものは、表面上はきれいなものだが、裏では実は色々なものが捨てられていると知り、衝撃を受けた。普段私たちはそういったことを気にせず、少しでも賞味期限が切れたりカビが生えたらすぐ捨ててしまっているので、賞味期限が切れる前に食べきる、もっと保存環境を考える等、せめて自分たちが手元に得られるものは１ミリも捨てないという覚悟で接しようと意識が変わった。（３年生女子）

～スマートＡＰについて～

・高校で体験できないような大学の講義を先取って受講できることに魅力を感じ受講した。実際の講義では、世界ではどのように服が作られているかの問題について一本の映画を見た。そこで自分たちが着ている服は非常に貴重であると知ることができ、非常に印象的で衝撃的であった。（３年生女子）

・スマート AP を通じて、どうしたらうまく発表できるか、プレゼンテーションの仕方、研究の仕方等を学んだことで、発表する際には「学んだことを発揮するぞ」という前向きな気持ちで挑むことができるようになり、大きく成長できた。（３年生女子）

同志社国際高等学校　（管理機関：学校法人 同志社）

「まちづくり」を大きなテーマに、探究学習のカリキュラムを開発。「SDGs」「政策立案」「シビックプライド」などまちづくりに関する基本的な知識についての学習、プレゼンテーションなどのアカデミックスキルズの習得などからはじめ、学校所在地である京田辺市市長による講演や大学教授や海外研究者による講義、国内外の政策のグッドプラクティスについて学び、最終的には、生徒自身が政策の提言を行うことを目指す。

■探究型学習、外国語や文理の教科を融合した教科・科目、海外フィールドワーク

同志社国際高等学校では、「まちづくり」をテーマとし、探究学習のカリキュラムを開発している。「まちづくり」をテーマに採用した理由として、SGH での経験があげられる。SGH 期における探究学習では、「環境問題」をテーマとし、ドイツや北欧の環境政策について学んだ。その中で、ドイツと日本では環境政策だけではなく、それを実施するまちのあり方、作り方やまちで暮らす市民の意識の違いが大きく、ドイツの環境政策をそのまま日本に持ってくるだけでは不十分であり、探究学習のテーマとして「環境問題」だけではなく、より幅広いトピックスを扱いたいと考えた。そこで、WWL 事業では、より間口を広げ、また多くの教員が関わりやすい「まちづくり」をテーマとすることで、探究学習の可能性を広げていくこととした。

同志社国際高校のカリキュラムデザイン

1年生	SSS（Sustainable Society Study） 必修科目
2年生	SSR（Sustainable Society Research） 選択科目
3年生	SSD（Sustainable Society Design） 選択科目

探究学習のカリキュラムは1年生時の必修科目と、2年生・3年生の選択科目からなる。1年生の探究学習の学びを通じて、まちづくりの探究学習を続けたい生徒が2年生・3年生時に科目を選択する。3年間の授業での学習を通じて、リサーチを進めるとともに京田辺市への政策提言を行うことを目標としている。

≪1年生　SSS（Sustainable Society Study）≫

SSS では、同校の WWL カリキュラムの目標である京田辺市への政策提言にむけて、「SDGs とは」「政策とは」「シビックプライドとは」といった基本的な知識に関する学習を行う。京田辺市長を招き、市長自身による政策についての講演も実施している。1年間の最後には、生徒自身で政策立案を行い、学年全体での政策コンペティションも行なっている。

京田辺市長による講演の様子

また、同校には海外からの帰国生徒が多数在籍し、生徒の日本語・英語のスキルや学んできた知識にばらつきがあることから、すべての生徒がレポートの書き方、スライドの作り方等、アカデミック・スキルを習得するための授業も行っている。

2022年度の SSS は、6教科（情報・家庭科・美術・理科・社会・聖書）の教員が担当している。様々な教科の教員が担当することで、生徒は、一つの問題に対して様々なアプローチがあることが学ぶことができる。スライドの作り方など基本的な事項でも、教科が異なると共通点もあれば異なる手法、アプローチを取ることもあり、教員の専門分野による視点の違いを生徒が感じる機会となっている。

SSS では、教員が共通教材「SSS ワークシート」を作成し、毎年授業で使いながら、リニューアルをしていく。

≪2年生　SSR（Sustainable Society Research）、3年生　SSD（Sustainable Society Design）≫

2年生の SSR は、京田辺市への政策提言に向けて、海外の都市の政策やフィールドワーク先について実際にリサーチをしながら、リサーチの方法論を学んでいく。また、リサーチを通じて得られた成果を取りまとめたリサーチブックを作成し、現地の領事館や大学教授、ジャーナリスト等に見ていただく機会を作っている。

2 年生　SSR　授業の様子

3 年生　SSD　授業の様子

3年生の SSD は、SDGs・まちづくり・政策についての学習を、さらに進める。例えば、SSR で得た知識やフィールドワークで見たものから着想を得て、政策案をクリエイティブに構築し、実現していくことを目指す。また、3年生は並行して、各自のリサーチテーマを設定し、そのテーマについての卒業論文を作成する。

≪フィールドワークについて≫

同志社国際高校のフィールドワークは、1年生の SSS の授業と関連付けて国内フィールドワークを実施、2年生の SSR では海外フィールドワークを行う(コロナ禍の影響もあり実施できていない年もある)。

訪問先は、授業の最初の段階では決めずに、探究学習を行いながら決めていく。例えば、SSR でまちづくりの先進的な海外の都市についてリサーチし、事例として取り上げた都市をフィールドワークの候補とする。教員が現地の下見を行った上でフィールドワーク先を決定し、春休みに生徒が実際にフィールドワークを行う。

国内フィールドワークの様子

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

同じ学校法人である同志社大学とは、大学学部の講義の聴講・研究室の見学・大学入学準備講座・簿記講座等の開催等を行っている。

同校は内部進学を選択する生徒も多いため、今後は夏休み期間中の講義への参加等も検討している。

≪生徒の声≫

～探究学習について～

・SSS を学ぶまでは、自分の身の回りにある家やスーパーマーケットは普通にあるものだと思っていた。まちづくりの過程では、住民の需要を満たすため、まちにある施設も一つ一つ考えられて作られていることに驚いた。適当にこの町は構成されているわけではないと思った。２年生になってももっと学びたいと思い、SSR を取った。（２年生男子生徒（帰国生））

・市長の話を聞いて京田辺市はすごいと思った。京田辺市の変遷を語っていただいて、京田辺を知って、もっと知りたいという意欲が湧いて、好きになった。京田辺で行われているお祭りの由来や開催時期の意味を知り、どんどん知っていく上で、京田辺はあたたかくて住みやすい街だと知れてより好きになった。（２年生男子生徒（一般生））

・SSS の授業を通して、まちづくりについて最初に聞いたとき、私たちは普段すでに作られているまちの住民としてしか、住んでいる側としてしか、まちを見てなかったが、この授業を通して、まちをつくっていく側として、基礎的な、地道な作業から出来ていると知った。ただ住んでいるだけの場所がこんなに考えられて作られていると知り、勉強になった。自分は帰国生徒であるが、帰国子女は地元と呼べる場所がない。ディスカッションのときは、地元がある人や一般生の意見だと、土地に住んでいる人の意見や、街の政策・良いところ・ポテンシャルをすごく理解している。帰国生は入っていく側なので、どうしても批判的なものの見方をしている。ディスカッションを通して、そういうところが強いのかなと、違いは感じている。（２年生女子生徒（帰国生））

・自分は SDGs もまちづくりも何も知らない状態で SSS を受けた。SSS を通して、シビックプライド（まちへの「誇り」「愛着」「共感」をもち、「まちのために自ら関わっていこうとする気持ち）を自分も持っていると気付き、シビックプライドを大切にしていきたい、仕事などに繋げたい、活用方法がわかると思って SSR を取った。（２年生女子生徒（一般生））

大阪教育大学附属高等学校平野校舎

（管理機関：国立大学法人　大阪教育大学）

「学びの共同体」というキーワードをテーマとして掲げて活動を行う。探究活動の教育手法を「平野メソッド」として冊子に取りまとめ、ノウハウを共有している。

■探究型学習

「総合的な探究の時間」のかわりに設定された「グローバル探究」（必修科目）では、文系・理系の枠にとらわれず、生徒が興味・関心あるグローバル課題について探究する。さらに、希望者は「海外の高校生との共同研究」や「大学の教員から指導を受ける研究」など、より高度な探究学習にも参加ができる。

グローバル探究は1、2年生がグループ活動、3年生が1、2年次の活動の成果を個人でまとめる。

同校の探究活動のカリキュラム

1年生	グローバル探究Ⅰ （グループ学習）	主に探究活動の手法・思考ツール（*平野メソッド）を学ぶ。学校設定科目「データサイエンス基礎」の学習内容を探究活動にいかしながら取り組んでいる。最終的にはポスターとパワーポイントで発表する。
2年生	グローバル探究Ⅱ （グループ学習）	グローバルな課題に関して探究的な学習をする。学校で設定しているテーマや範囲はない。分かりやすい指標として SDGs を活用。生徒それぞれが「SDGs の何番なのか」を考えながら、取り組みたいトピックを考え、同じトピックの生徒同士でグループをつくる。
3年生	グローバル探究Ⅲ （個人学習）	グループで活動した探究的な学習を、個人の視点で論文に仕上げる。論理的に説明出来るようになり小論文を書く力がつく。

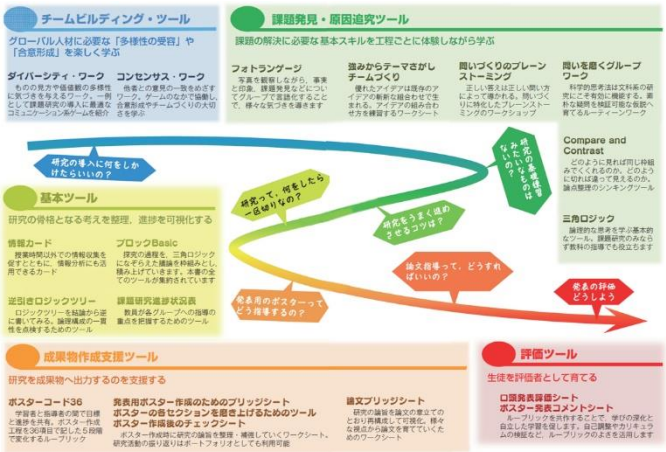
≪平野メソッド≫

総合的な探究の時間に、平野校舎で実践した内容をカリキュラムとして冊子にまとめたもの。現在 HP に無料公開しており、ダウンロードが可能。

「つくりこまない」というコンセプトで、次の学年が使いやすいよう汎用性の高い内容で作成。過去の学年のツールは全てデジタルで残っているが、そのまま使用せずに自分の学年が使いやすいようにアレンジして活用する。

グローバル探究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲは「平野メソッド」を使用しており、WWL の中心となるカリキュラムである。

平野メソッド 【全体の構成図】



■海外フィールドワーク・留学

同校ではタイ（全員参加）、カンボジア、ニュージーランド（希望者）の海外研修を実施しているが、コロナ禍の影響により、オンラインを活用した代替プログラム（台湾の連携校等とのオンライン意見交換、大学の留学生との交流等）で代替している。

令和4年度からは、カンボジア、ニュージーランド（希望者）の海外研修を再開している。

	1学期	3学期（1月）	3学期（3月）
計画	タイ　バンコク	カンボジア	ニュージーランド
	6日間	6日間	8日間
	全員参加（2年生）	希望者（1、2年生）	希望者（1年生）
コロナ禍における代替プログラム	オンラインスタディツアー	講演会（対面及びオンライン）	オンライン講義と外国人講師等とのワークショップ
	カンボジア、ニュージーランド、フィリピン、インド、オーストラリア	カンボジア	ニュージーランド
	全員参加	全員参加	全員参加
	10 月、2月、3月	9月、1月	3月

■外国語や文理の教科を融合した教科・科目

≪生命の倫理（1年生）≫

5つの論題を立てて、調査研究とディベートを行う。（論題例：受精卵の遺伝子診断・代理母・脳死は人の死か・臓器移植法の是非・安楽死の是非）

1学期は基本的な知識と理解を進め、2学期にはグループを組んで肯定・否定に分かれディベートする。根拠と論拠を持って主張する力が求められ、探究学習や課題研究に繋がっている。3学期は2学期と同じテーマ、同じチームのまま、肯定・否定を入れ替える。クリティカルシンキングや論理的な思考が深まる。

≪データサイエンス基礎（1年生）≫

データに基づく論理的・科学的な考え方を、日常生活と関連づけながら学ぶ（コンピュータソフトやエクセルの使い方、統計の基礎、プログラミング、AI の学習等）。平野校舎と共同実施校の池田校舎、両校で実施している。この科目の中でデータの見方・考え方、それらを基に客観的に探究を進めていくべきであるという考え方を学ぶ。

≪イノベーティブシンキング（2年生）≫

テーマに沿って、新しい取組をしている企業の方や大学の先生を講師に招き、チームティーチングの形で授業づくりを行う。また、実際の経緯や発想などを生徒と一緒に考え、社会で行われている取組の事例として学びながら、ワークショップを行う。（テーマ例：前半「画像認識とアプリの開発」／後半「言語分析と AI の活用」）

≪グローバル探究英語（2年生）≫

SGH 時から、即興型英語ディベートを年間12～13回実施。外国人の外部講師とチームティーチングで指導している。パラグラフライティングやリーディング、プレゼンテーションなど、外国人講師の指導の下、全員が学んでいる。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

大阪教育大学（高校生向け授業）、大阪大学（大学の授業聴講）を希望者が受講。受講者には同校平野校舎及び池田校舎が開講する学校設定科目「大学アドバンスセミナー」の授業単位として認定している（高校：1単位）。

学校設定科目：「大学アドバンスセミナー」

	大阪大学	大阪教育大学
内容	「グローバルヘルス」 大学生対象の国際医療に関わる授業の録画を聴講。	「教師にまっすぐ」 高校生対象に実施される授業。教職に関わる講義・実習・課題研究など。
受講者	希望者（2年生中心） 例年10 名程	希望者 例年10 名程
単位	1単位（高校）	1単位（高校）

■高校生国際会議等

生徒が実行委員会を組織し、連携校の生徒と一緒に2日間活動する。令和2～3年度はオンラインで開催した。高校生国際会議終了後、グループで振り返りを行った上で、さらに個人の視点で各自の研究をまとめていく。

≪生徒の声≫

～探究型学習について～

・外国人の方と交流する機会が多かったので、英語を話す機会が格段に増えた。それまでは決まった英語を覚えて話すとか、簡単な会話をする等だった。しかし、日本語でも難しいと思うようなディベートのテーマに対して、英語で自分の意見を伝えて、相手の意見を聞き取る能力は非常に伸びたと思う。（３年生女子）

・正直、最初は環境問題にあまり興味は無かったが、化粧品廃棄の問題と組み合わせて考えていくことで環境に関わる諸課題に興味を持つようになり、大学の学部選択に影響した。自分たちが研究したことを海外の高校生や大学の先生方に発表する機会があり、そこで色々な意見をもらい、多様な価値観を知るきっかけにもなった。（３年生女子）

・日本全国の高校生と交流する機会があり、自分では思いつかなかった見方を得られた。海外の政策や取組と比較し、なぜあまり日本に導入できないのか、その背景を調べていく中で、国によって考え方や価値観が違うということを学べた。現地に行って実際に自分で体験して、違いを理解することの大切さを学んだ。（３年生女子）

岡山県立岡山操山中学校・高等学校　（管理機関：岡山県教育委員会）

岡山操山中学校・高等学校は、SGH の時から、3年間で生徒に身に付けさせたい6つの資質・能力を定めており、それを育成する土台として様々な取組を行っている。

■探究型学習

医療・福祉・教育や ESD・SDGs 先進県である岡山県の特色を生かし、SDGs の「目標3　すべての人に健康と福祉を」と関連付けた学びを充実させながら、「すべての人が身体的、精神的、社会的に幸福”Well-being”な社会の実現」を目指し、自ら考え、主体的に行動し、責任をもって社会変革を実現していく力を備えたグローバル・リーダーを育成することを目指している。

本構想ではイノベーティブなグローバル人材に求められる資質・能力や心構え等を多面的に捉え、OKAYAMA Agency として6つの資質・能力を設定している。

OKAYAMA Agency

認知的スキル	幅広く深い教養	グローバルな課題を理解できる国際的な素養がある
	課題発見・開発能力	グローバルな視点で課題を発見し、論理的に解決策を考え、発信することができる
	新たな価値を創造する力	既存の価値を融合し、自由な発想で新しい価値軸を創ることができる
非認知的（社会情緒的）スキル	主体的に行動する力	目標に向かって自主的に考え、自立的に判断し、決断したことに積極的かつ誠実に実行し続けることができる
	他者と協働する力	自己を理解し、自立した人間として、他者とともに心を通じあわせてよりよい社会の実現を目指すことができる
	自他を尊重する力	社会における事故を認識し、自他の存在意義を認めることができる

6つの資質・能力の育成のため、以下のような取組を行っている。

≪未来航路≫

未来航路は総合的な探究の時間の校内名称であり、1年生で課題研究の基礎となる取組を行い、課題研究を2年生の一年間で、グループ（各グループ4～6名）で行う。テーマは SDGs の17のゴールを”Life” ”Welfare” ”Environment”の3つの分野に分け、SDGs「目標3　すべての人に健康と福祉を」と関連づけて設定する。年間3回程度、大学の先生に来ていただき、課題研究について指摘・指導を受けている。最終的には、研究の発表会に向けてまとめを行う。

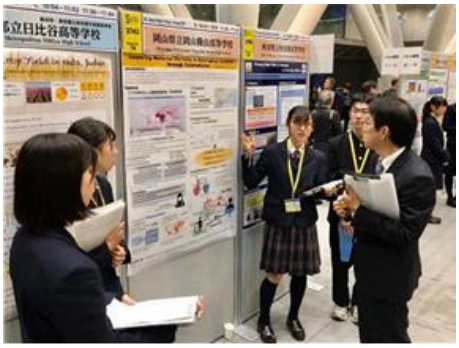
1年生では、RESAS（経済産業省・内閣官房）のオンライン講演会（3回）や、大学の教員の講義（課題研究とはどういうものかを学ぶ）などにより探究学習の基礎を学んだあと、簡単な課題研究を行う。1年生の最後には、SDG s の17の分野別に興味のあるものを選びグループを決める。そのテーマに沿って、2年生から具体的な課題研究を行う。

なお、3年生も選択科目で探究を継続することが可能である。

≪SOZAN 国際塾≫

意欲の高い生徒は、SOZAN 国際塾（課題研究等を極めたい生徒の集まりで放課後等に活動）に参加でき、探究活動において海外交流などの機会がより多くなる。世界的な視野でものを見ることを意識しており、英語で発表をすることもある。各種のコンペティションや外部の発表会にも参加している。また、オンラインでの留学生との交流機会などもある。

SOZAN 国際塾



国際塾に参加することで、課題研究をより深められることと、オンラインで留学生との交流を頻繁に行うことができる。さらにネイティブスピーカーの先生から、スピーチの仕方や原稿作成について教わる「グローバルスキルトレーニング」も定期的に開催される。

■外国語や文理の教科を融合した教科・科目

≪SOZAN STEAM≫

1年生に設定されている学校設定科目、「SOZAN STEAM」は、教科横断型の授業である。複数の教科の教員が担当し、課題解決に取り組む。全部で7講座あり、生徒からも好評である。

1年生において、未来航路と SOZAN STEAM で探究活動の基礎を身につけ、2年生で実践的な課題研究を行うことを想定している。

■海外フィールドワーク・留学

オーストラリアに姉妹校があり、現地の学校で研修（授業・研究発表）、および10日間ほどホームステイを実施している。

≪コロナ禍における代替の内容≫

令和4年度は直島（香川県）を訪問し、各グループに英語のネイティブスピーカーを配置してフィールドワークを行った。

令和5年度からは、姉妹校での研修（授業・研究発表）及びホームステイを再開している。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

未来航路において岡山大学の教員が指導を行うなど、大学と連携して探究学習が行われている。

また、まだ単位化には至っていないが、岡山大学の公開講座を受講できる。

■高校生国際会議等

高校生国際会議は、令和5年度に完全実施を計画している。

高校生国際会議のプレイベントとして、本事業のテーマである”Well-being”について理解を深め、「”Well-being”な社会の実現」のための方策について探究する「Well-being フォーラム」を実施している。

令和3年度のフォーラムはコロナ禍のためオンライン開催に変更した。拠点校、連携校（海外連携校も含む）の代表生徒が参加し、岡山操山高校は国際塾の生徒を中心にしながら希望した生徒が参加した。フォーラム本番の事前セミナーとして、AMDA 理事であり、医師として国内外の様々な地域で医療活動、人道支援を携わってきた佐藤拓史氏の講演、座談会をオンラインにて実施した。

フォーラムの午前の部は、拠点校連携校の10校が課題研究の成果発表を行った。午後の部は、国際人道支援を行っている連携機関の AMDA 代表菅波茂氏による基調講演と、午前の発表や基調講演を踏まえたグループ協議を行い、「Well-being とは何か」「Well-being な社会を実現するためには何が必要なのか」について協議した。その成果は「おかやま高校生”Well-being”宣言」としてまとめた。

令和4年度は、参集での開催となり、令和3年度のフォーラムでまとめた「おかやま高校生”Well-being”宣言」をもとにして、「Well-being」な社会の実現のために何ができるか、という具体的なアクションについて考えることをテーマとした。内容は、ユネスコチェアホルダーである岡山大学上席副学長の横井篤文氏のスタートアップスピーチ、参加校生徒によるポスターセッションに加え、世界 196 か国から各国を代表する次世代の若手リーダーたちが一堂に会する世界最大級のサミット「One Young World」（OYW）の過去の参加者であり、様々な分野で新たな挑戦や活躍を続けている若手リーダーの OYW アンバサダー5人によるトークセッションとラウンドテーブルを実施した。

令和5年度に開催する国際会議では、3年間かけて作った”Well-being”宣言を、海外の機関等につなげ、発信していく構想を考えている。基調講演は、国連が SDGsを採択した際の中心メンバーの1人である、ブルキナファソのアブゼ・ジグマ王女殿下に依頼し、基調講演をもとに、高校生がなりたい自分と「Well-being」な社会の実現とを結びつけながら、学校や国の枠を越えて議論し、その成果をもとに「おかやま高校生”Well-being”宣言」を完成させる予定である。会議の企画、運営は、拠点校、連携校の生徒からなる生徒準備委員会が年度当初から準備を行っており、当日の進行やラウンドテーブルのファシリテーター役を担う予定である。

≪生徒の声≫

～ＳＯＺＡＮ国際塾について～

・国際塾に入ってよかったと思っている。現在、高校生フォーラムに向けて英語のスライドでプレゼンすることを最終目標にグループで取り組んでいる。また研究課程で、論文・英論文を読んだり、インタビューをしたりするコツを得られたのは、国際塾に入ったからこそだと思う。学校にとどまらず、自分からいろんな所にチャンスを掴みに行き、発表会等で成長を感じられることが、やりがいだなと思った。（２年生女子）

～ＳＯＺＡＮ ＳＴＥＡＭについて～

・教科をまたいだ学習は普段はしない特別なことという意識があったが、この授業を通して自分の中の知識の使い方の練習になった。国語の授業の時は自分の中にある国語の知識を出してというように別個に勉強してきたものが、自分の中に知識という大きなひとまとまりがあって、そこから色々な知識を出してきて、つなげて勉強するのだという発見があった。教科をまたいで勉強するということが、勉強の基本なのかと感じた。（２年生女子）

広島大学附属福山中学校・高等学校　（管理機関：国立大学法人　広島大学）

中高一貫校であることを活かし、合計6年間の探究学習カリキュラムを設計。社会問題の複合要因の理解を高められるよう、関連科目も新たに開発している。

■探究型学習

広島大学附属福山中学校・高等学校は、中高一貫校であることを活かし、中学1年生より探究学習の授業を実施。中学生のうちに探究学習の方法を学び、実際にグループでの探究学習を行うことで、高校1年生までに研究の下地を作り、高校2年生からの個人での探究学習につなげるカリキュラムの構造となっている。

≪中学校3年間～4年生（高校1年生）までの探究学習≫

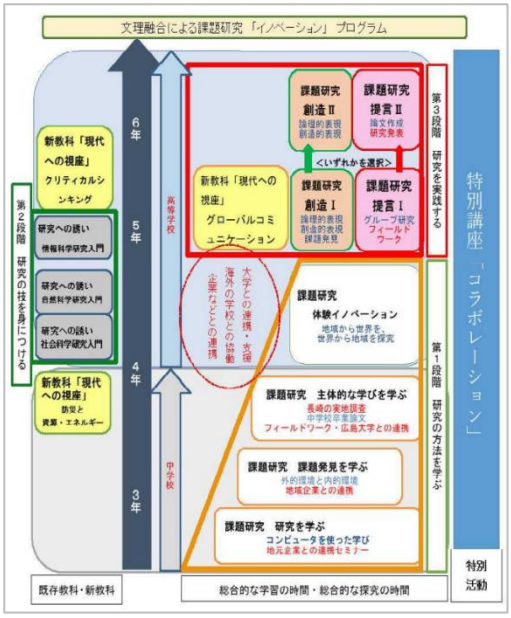
中学校3年間および4年生（高校1年生）までは、5年生（高校2年生）からの個人での探究学習に向けた基礎作りを行う。ICT 機器に慣れ、自分の考えをまとめた制作物を作る内容としている。中学2年生からグループで探究学習を行い、授業科目（学問分野）ごとで視点が違うことを体得する。中学3年生では国内（九州）フィールドワークを実施する。

≪5年生・6年生（高校2・3年生）の探究学習「提言」「創造」≫

5年生（高校2年生）以降は、これまでの学習を踏まえ、個人で探究学習を実施する。

探究学習は、社会問題の解決に向け研究を行い、最後に社会へ向けた提言を行う「提言」と、人に伝える・訴えるといったアウトプット手法の習得に重点を置いた「創造」の2種類に分かれる。

中高一貫での探究学習カリキュラムデザイン



「創造」は探究学習の様々な在り方を試す実験的な科目である。探究するテーマが見つけられない生徒へのアプローチとして、アウトプットを作る過程から学ぶカリキュラムとなっている。「クリエイティビティとは何か」「表現するとは何か」といった理論から始まり、美術（キュビズム等）・書道（フォント）・音楽（サウンドロゴ）・文章表現（小論文）の4通りの表現方法を学び、伝えたいテーマの成果物を作成する。

■外国語や文理を融合した教科・科目

≪「研究への誘い」「現代への視座」≫

5年生・6年生（高校2・3年生）での探究学習において、社会科学・自然科学の視点で分析し、社会問題の複合要因を理解し、それを人に伝えるための科目として、「研究への誘い」「現代への視座」の2種類（内容ごとにさらに各3種類に分かれ、計6種類）の授業科目を開発している。

「研究への誘い」	4年生「研究への誘い　社会科学研究入門」「研究への誘い　自然科学入門」 5年生「研究への誘い　情報科学研入門」 …科学的な知識の習得し、実際に分析を行う。
「現代への視座」	3年生「現代への視座　防災と資源・エネルギー」 …3年生の理科で探究した学習内容を、人に伝えるために整理する。 5年生「クリティカルシンキング」…国語での伝え方・対話の方法を学ぶ。 5年生「グローバルコミュニケーション」…英語での伝え方・議論の方法を学ぶ。

■フィールドワークの実施

コロナ禍におけるフィールドワークは、生徒が探究のテーマを設定しフィールドワークを行うことを重視し、日本国内でのフィールドワークを実施した。

同校に近い岡山県真庭市を訪問し、真庭市で盛んなバイオマス発電、ならび林業について学ぶ「真庭研修」を実施。生徒は普段触れることのない林業や循環型社会を実際に体験する。

真庭研修には4年生約20～30 人の生徒が参加している。参加した生徒は5年生で「提言」を選択し、真庭研修で学んだ内容を元に探究学習を行った。

「真庭研修」の様子

■高校生国際会議等

広島大学附属福山高等学校では、高校生国際会議においても探究学習を取り入れている。同校ならび連携校の生徒より参加者を集め、学校側で「新型コロナウイルス対策について考える」という大きなテーマを設定し、生徒自身が調査したいコロナに関するテーマを募集した。

最終的には「経済」「医療従事者」「コロナ禍における教育」の3つのテーマに絞り、WEB 会議ツールや Google Jamboard 等を活用し、オンライン上で探究学習を実施している。

≪探究学習を取り入れたねらい≫

高校生国際会議に探究学習を取り入れたのは、他校生と人間関係を作ることで、社会問題に一緒にアプローチする仲間づくりの経験ができると考えた。また、仲間の中で自分は一体何ができるのか、生徒自身が考えるためのプログラムとして、高校生国際会議を設定している。

≪留学生との交流≫

コロナ禍においても海外との交流を行うため、広島大学の留学生に協力を依頼し、高校生国際会議のディスカッションにコメンテーターとして参加してもらった。

留学生の参加は、海外からの視野を取り入れること、また、国費留学生などの「自分の国を良くしたい」といった思いに触れることで、生徒が圧倒され当事者意識が育まれることもねらった。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

管理機関である広島大学の AP(科目等履修生)として、一部の生徒が授業に参加している。AP では単位取得ができ、広島大学に入学した際は単位が認定される。

そのほか、広島大学のオンデマンド授業「名講義100 選」を利用し、生徒の探究学習のテーマに近い動画を視聴している。また、その動画で講義をする大学教員に、オンラインにて探究学習のアドバイスを受けている。

≪生徒の声≫

～探究学習について～

・自分は５年生で「提言」を選択した。「提言」では論文の形式で発表したこともあり、実際の学校生活ではあまりやらないことであるため、とても新鮮で、いろいろ初めてのことで手間取りはしたが、どうやればいいのか、こういう文章を書けばいいのかとある程度理解できるようになったかと思う。（６年生男子）

・４年生の「体験イノベーション」で、商店街の活性化について調べたが、シャッター街を見るとこうすればいいのにと興味が沸くようになった。（６年生男子）

・成長したことは２つある。１つは発表する側の成長。どのくらいのスピードを話せばいいか、スライドの説明をどう作れば相手がわかりやすいのか、成長したなと感じている。聞く側目線で成長したのは、質問をよくするようになった。どういう質問をしたらいいか、考えながら聞く体制が取れるようになった。（５年生女子）

～フィールドワーク（真庭研修）について～

・真庭は魅力的な都市だと思い、全国の皆さんに知ってもらいたいと、アニメを使って地域振興できないかと考えて、真庭のいいところを集めたアニメ制作をしようと計画中である。（５年生女子）

～高校生国際会議について～

・高校生国際会議では、コロナ禍における教育について探究した。二年前の一斉休校に教育を受けられなかった人がいる現状を踏まえ、今後はオンラインを活用し、その格差を埋められないか、今後そういったことが起きたときに対処していけないか、提案した。格差を埋めるには国の主導で、Wi-Fi 設備など基本的なインフラをもっと取り入れていくこと、基礎インフラを整えることを提言した。
ただ、オンラインでの他校生との探究学習は、対面で会う時よりも意見が出し辛かったり、相手の顔やしぐさが伝わりにくかったりということがあると思うが、それの影響で活発に議論をする環境にはなりにくい状況だった。一回対面で会った時は意見が出たり、これをやりたいという提案があったりしたが、オンラインだと進みが遅い印象があった。（６年生男子）

愛媛大学附属高等学校　（管理機関：国立大学法人　愛媛大学）

SDGs（持続可能な開発目標）が掲げるテーマを中心課題に位置づけ、新しい価値を創造し、自律した自覚を持って世界の架け橋となることができるグローバル人材の育成を目指した高大接続モデルを開発。

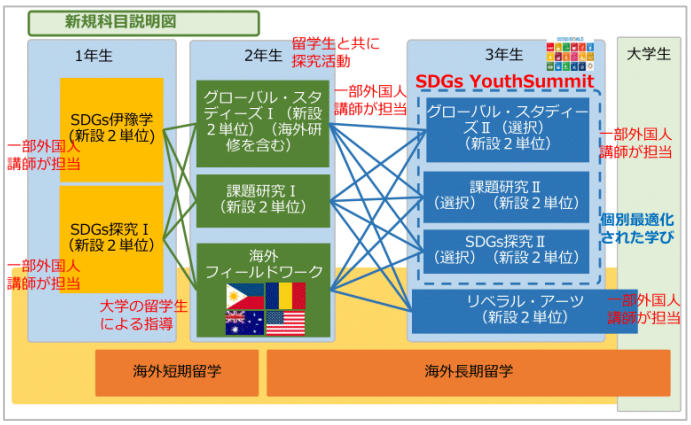
■探究型学習

2年生で課題研究Ⅰを、3年生で課題研究Ⅱ（選択制）を行う。課題研究Ⅰ（2年次必修）をすべての生徒の探究活動の中心に置いており、グループで探究活動を行い、愛媛大学の教員から指導を受けながら進めている。

SGH 期の5年間において、課題研究を高校3年生の1年間で実施していた。海外に目を向けるのはもっと早い方がよいという意見を踏まえ、WWL 事業ではカリキュラムを変更、課題研究をⅠとⅡに分けて、課題研究Ⅰを2年生に移行した。

課題研究の開始が以前より1年早まったことで、高校3年次で課題研究をより進めたい生徒もいると想定し、選択科目として課題研究Ⅱを新設した。3年生では、課題研究Ⅱか同じく新設されたグローバル・スタディーズⅡのどちらかを選択する。

新規科目説明図



≪成果発表会≫

成果発表の場として、大学の教員が審査員となり、かつ保護者や地域の方々にも公開する成果発表会を実施している。生徒は、成果発表会に向けポスター制作と動画撮影を行う。発表は、ライブ配信とオンデマンド配信という2種類で行っている。加えて、「課題研究成果発表集」（日本語に加え英訳の要旨を含む）も作成、配布している。

■外国語や文理の教科を融合した教科・科目

探究活動の準部段階として、1年生では、SDGs 探究、SDGs 伊豫学をおこなっている。

≪SDGs 探究（履修：1年生（必修））≫

1学年約120 名を4つの分野（草花、果樹、野菜、作物・畜産）に分けてフィールドワークを中心に活動している。愛媛大学の留学生にも協力を得て一緒に活動している。

≪SDGs 伊豫学（履修：1年生（必修））≫

SDGs をテーマに、主に国内のことについて愛媛大学の教員から指導を受ける授業であり、2年生から課題研究を始めるうえでの下準備として機能している。

株式会社マイナビと提携していて、SDGs とは何か、課題設定するとはどういうことか、というテーマで SDGs 伊豫学の中で半年に1回程度、指導いただく機会がある。

≪グローバル・スタディーズ（履修：2～3年生）≫

グローバル・スタディーズⅠ（2年生必修）は、グローバルな観点で愛媛大学の教員から指導を受ける。また異文化理解の観点で、生徒の希望を取り、5か国（今年度はフィリピン、ルーマニア、アメリカ、オーストラリア、モザンビーク）に分かれて探究活動、調べ学習等をしている。オンライン指導や留学生による講演等も行う。

グローバル・スタディーズⅡ（3年生選択科目）は、令和4年度から始まった科目である。愛媛大学協力の下、連携大学にも入ってもらい、主に海外の先生方に指導いただいている（国内外約10 名）。

■海外フィールドワーク・留学

≪海外との交流≫

コロナ禍においては、海外研修の代わりにオンラインで海外の生徒との交流を行っている。

また、ルーマニアの生徒2名・教員1名を短期（1週間）招致した。学校内で直接交流を行った。

≪E カフェ（イングリッシュカフェ）の取組≫

生徒の語学力・コミュニケーション能力を向上させ、日本にいながら海外の文化に触れ、国際感覚を養うことを目標に、教育課程以外で英語や海外の文化に触れる機会として E カフェ（イングリッシュカフェ）を開設した。様々な背景を持った出身国の留学生を雇用し、ネィティブではない様々な国の英語の発音を聞くことができる機会となっている。校内に色々な国々の方がいて、授業という決められた枠の中ではない日常の時間の中で留学生との交流を増やしている。生徒は積極的に留学生に質問することができ、活発な意見交換が行われている。

E カフェの取組概要

日時	毎週、火、木曜日の昼食時
目的	「生徒の語学力・コミュニケーション能力の向上」 「国際感覚の育成」
形式	・対面式 ・オンライン（zoom を活用）←他校が参加
言語	英語
内容	留学生がテーマに沿って英語で発表し、それについて生徒が質問したり自身の経験を話すなどして交流を図る。

第 19 回 E カフェの様子

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

≪愛媛大学の6講座をオンライン受講≫

平成28年度から愛媛大学と連携して、高大接続科目として指定された講座を愛媛大学附属高校3年生が大学生とともに受講している（コロナ禍のため、基本的に非同期型の遠隔授業で実施）。

「法学入門：憲法を考える」「経済学入門：市場の原理と市場の失敗」「数学入門：データリテラシー入門」「物理学入門：宇宙の構造とその進化」「化学入門：高分子化学入門」「化学入門：現代社会を支える有機化学」の6講座を受講している。高校の単位になるとともに、愛媛大学進学後は大学の単位にもなる。

■高校生国際会議

令和4年10 月に、開催3年目で初めてオンライン・オフラインの共同開催となる高校生国際会議を行った。参加は3か国12校計108名の生徒、留学生5か国5名、大学生8名であった。フィリピンの生徒はオンラインで参加し、前述のルーマニアの生徒も現地参加し司会を担当した。

≪生徒の声≫

～探究等学習について～

・まず今の自分の住んでいる町や日本、そして国際情勢といった現状を知ることで、今この町や日本に求められている力、どのようにしたらもっといい暮らしになるのか、どういった課題があるのかといったことを考えるきっかけになり、そこから色々と調べて新しい知識を得ることができた。日本にはこういった魅力があって、こういう力が優れているというような客観的な意見も色々と聞くことができたので、自分の住んでいる地域や日本という国に誇りを持つことができた。（３年生男子）

・今までニュース等を見ていても、他国や日本の他の地域で起こっている問題等について他人事として捉えてしまうところがあった。探究学習を通じて色々な学校の高校生等がそういった問題に立ち向かっている姿を見ることで、今ではそれらを自分事として考えるようになった。普通だと思っていた愛媛の日常にも、「これはちょっとおかしいんじゃないか」と疑問に思ったり、新しく自分で課題を見つける力、課題を解決していこうと前向きになれる力も付いてきた。（２年生女子）

～Ｅカフェについて～

・E カフェでは昼休みに愛媛大学の留学生や青年海外協力隊の方が、講義室で色々なテーマについて英語で話をしてくれる。参加していたら英語と触れ合う機会が増えて、技術だけではないニュアンスや、コミュニケーションの気持ちの部分を学ぶことができた。私は英語があまり得意でないので難しいと感じる部分はあったが、英語に触れる機会は他の高校よりは確実に多いと思う。（３年生男子）

中村学園女子高等学校　（管理機関：学校法人中村学園）

同校は栄養科学や、食の流通といった「食」についての分野を専門としている中村学園大学の併設校であり、その強みを生かして大学との連携を強めている。「食」を切り口とした探究活動を通じて内容を深めることを目指し、様々な取組を実践している。

■探究型学習

探究学習として「GI 探求」を開設している。食をテーマに1年はゼミ形式、2年はグループ、3年は個人で論文作成を行う。

令和3年度までは「グローバルイノベータークラス（GI クラス）」のみが対象であったが、令和4年度より全校生徒が対象となった。

探究活動のカリキュラム

	令和3年度まで	令和4年度1年生から
対象	GI クラスのみ（必修科目）	全クラス（必修科目）
内容	1年生：GI 探究　ゼミ形式 2年生：GI 探究　グループ学習 3年生：GI 探究　個人学習	1年生：G 探究　個人学習

≪GI 探究≫

1年生では、食分野を中心として生徒の興味・関心を深めていく探究をゼミ形式で行う。「文化」・「栄養」・「経済」・「環境」の4つの切り口で「食」の研究をする。生徒それぞれが、タームごとにテーマ設定をし、調べ物をして発表する。

2年生では、前半は修学旅行の班でグループ学習を行う。「食」に関わる知識を深め、課題研究を通じて“食物を作ることによって環境破壊が起きていること”、“経済活動することで環境に負荷がかかっていること”等を学ぶ。この学習を踏まえ、修学旅行として海外へフィールドワークに行く。1年時に行った「食」にちなんだ課題探究を、実際に海外で体験する。

2年生後半から徐々に個人学習へ移行する。個々人でテーマを決めて課題に取り組む。後述する高校生国際会議“「食」のサミット”で、海外の生徒とも協議をして、解決策やアイディアについて話し合う。

3年生では、これまでの活動の集大成として夏頃までに論文を作成する。

≪G 探究（現1年生から）≫

GI クラスだけではなく、全クラス（10 クラス）を対象に「食」の切り口から自分が興味のあるものを学んでいく、という探究活動に取り組んでいる。

■海外フィールドワーク・留学

全員参加の研修は、コロナ禍であった令和3年度までは近隣県へのフィールドワークで代替した。令和4年度の2年生（GI クラス）は、9月に4泊6日のマレーシア・シンガポール研修を再開した。プランテーションの農園や食品廃棄物で作った農園を見学した。また、マレーシアの大学に訪問し、大学生にプレゼンテーションを行い、大学生から意見をもらった。

海外研修の様子

■外国語や文理の教科を融合した教科・科目

≪英語探究≫

英語探究では、SDGs をテーマに、自分が関心のある SDGs のトピックについて英語で話して伝えたり、英語でディスカッションをしたりする。ALT からプレゼンテーションやディスカッションの技術も学ぶ。令和4年度は、英語でのポスター作成と、そのポスターを他の生徒に紹介するプレゼンテーションを行った。

≪アントレプレナーシップ講座≫

アントレプレナーシップ講座では、福岡など九州近郊の新しいベンチャー企業の方々の講演や、グループワークを行う。自分のコンプレックスを切り口に新しい事業をされた方や、レンタル自転車のサービスをしている会社の方など、他の人が思いつかなかった便利なものをビジネスに変えた方々にご協力いただいた。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

希望者（例年20～40 名程度）に対し、中村学園大学・短期大学部の「現代社会と教育」、「日本文学」、「ボランティア論」、「数学の考え方」等、食品関係に加え教育学や経済学等含め7講座を放課後に課外授業として実施した。同大学・短期大学部に進学した場合は、大学の単位となる。

■高校生国際会議等

高校生国際会議として、同校では SGH 時から「食」のサミットを開催している。令和3年度は3月に同校が拠点となり、オンラインで開催。拠点校以外の国内の学校から10 名、海外3ヶ国から15名の高校生が参加。令和4年度は国内の提携校は対面参加、海外の提携校はオンライン参加とした。

GI クラス以外のクラスに対しては、希望する生徒を集めて「サテライト会議」という場を設け話し合いをしたり、ポスターセッション等を通して国際会議の意見に反映させたりしている。

「食」のサミット 2021 の様子

≪生徒の声≫

～探究型学習について～

・中学時までは、まだ SDGs が広く知られておらず、世界のことについて何も知らなかった。探究を通じて、世界のことについて知るためにニュースを見るようになったり、インターネットで海外の記事にも関心を持つようになった。どうしたら人に「伝える」ではなく「伝わる」のか、試行錯誤しながらその方法が身に付いた。私は SDGs の解決に少しでも貢献できるようになりたいと考えている。そのために、リーダーシップを身に付け、自分だけで行動するのではなく多くの人と共に解決に向けて取り組んでいきたい。「２１世紀リーダーシップ」というものが、自分が目指すリーダーシップと重なっている部分がある。そういった力を身に付けて、SDGs の貢献に近付きたい。（３年生女子）

～ＧＩクラスについて～

・一般クラスと比べると、海外交流の機会が多い。日本人・外国人問わず、相手とコミュニケーションを取る力、明るく話す力が身に付いた。（１年生女子）

・勉強との両立が大変なこともあるが、満足度は充分にある。WWL の活動を通して、社会問題のトピックについて話し合う、現地に実際に行く、といった機会を通して、自分がこれから調べたいことやもっと知りたいことなどを、視野を広げて考えることができるようになった。学校に留学生が来た際、コミュニケーションを通して母国のことを知ることができたり、SNS などで気軽に話し合えたりするので、身近に社会問題に触れる機会が多いと思う。（２年生女子）

長崎県立長崎東中学校・高等学校　（管理機関：長崎県教育委員会）

併設型中高一貫校で、九州本土部の公立高校として初めて国際関係に関する学科が設立され、平成 27 年度から SGH に指定されている。WWL 事業においては海外連携協力機関、企業、NPO、国内大学、連携校と連携して探究活動をはじめとした様々な教育活動を行っている（令和2年度から現在まで、300 以上の外部機関と協働）。

■探究学習、フィールドワークの実施

長崎東中学校・高等学校では、中高6年間を通じて、体系的な探究学習を行っている。長崎の中学生にとって身近な「平和」という学びのアプローチから、高校生になるにしたがって徐々に「SDGs」へと学びの枠を広げ、自分の関心のあるテーマを自由に設定し、探究学習を行っていく。特に探究においては「協働性」を重視しており、高校1年生ではクラス内でチームをつくり探究を実施。2年生になるとクラスや文系・理系、学科の枠を超え、探究テーマ別に生徒たちで自由にチームをつくり集合知を生み出し、質の高い「問い」に対する課題解決へ向け探究する。

WWL の構想目的と方法

≪総合的な探究の時間≫

1年次には週1単位の総合的な探究の時間に加え、学校設定科目であるIGR（Integrated Global Research）を週1単位設定し、探究の基盤となる教養や探究スキルを磨く。

2・3年生になると、週1単位の総合的な探究の時間に加え、「自主的な活動の時間（E-time）」を水曜と金曜の7時間目に設定し、生徒たちはこの時間を探究に活用できる。2・3年生は LHR の時間も活用する場合もあり、LHR を入れて週4単位（LHR がなくても週3単位）探究活動ができる時間割構成にしている。

≪フィールドワークについて≫

フィールドワークを、年に2回、夏と秋に設定している。フィールドワークに行く前に校内でテーマ発表会を実施、自分の取り組む内容を宣言させ、フィールドワーク終了後にはリフレクションを行っている。

行先は、生徒が自分たちのテーマに沿って行きたい場所（大学や企業、官公庁やNPO等）を自主的に決めている。遠方等で宿泊を伴う場合は引率がつくが、基本的には生徒がアポイントを取って進めていく。これまで開拓した協働機関は300 以上に上る。

■海外フィールドワーク・留学

コロナ禍においては、海外でのフィールドワークが難しい状況であったため、中国やハワイ、ニューヨークやケニア等、オンラインによる国際交流に力を入れた。

学校設定科目で中国語を開講していることもあり、オンラインで上海外国語大学付属高校と対話交流を行ったり、「日中国交正常化 50 周年記念事業」と題し、長崎駐中国総領事との交流会や、オンラインで福建省培元中学校と文化交流を行ったりなどした。

ハワイとの交流においては、オンラインでハワイ大学の先生から「平和」についての講義を受けるとともに、ハワイの高校生や大学生と、「平和」についてディスカッションを行うなどして、教養を深めた。

令和4、5年度には海外フィールドワークが本格化し、ニューヨーク国連軍縮部に訪問し、中満泉国連事務次長をはじめ国連職員と本校生徒が作成した「高校生平和共同宣言」について意見交換を行った。ハワイでは University Laboratory School とアリゾナ記念館を訪問するなど、合同平和フィールドワークを実施した。ベトナムでは長崎大学熱帯医学研究所ベトナムプロジェクト拠点や JICA ベトナムと合同フィールドワークを行い、感染症について学びを深めた。

令和５年３月に高２がニューヨーク国連軍縮部を訪問。中満泉国連事務次長と高校生作成の『高校生平和共同宣言』について質疑応答を実施

■外国語や文理の教科を融合した教科・科目

≪IGR（Integrated Global Research）≫

探究活動に必要な教養やスキルを身に付けるため、1年生の学校設定科目として IGR を週1単位設定（必修）。各種大学の教員や企業で活躍されている方々、卒業生等の講演会を通して、幅広い知識や教養を身に付けることを目的としている。

≪探究ベーシック≫
高校1年次に、「探究ベーシック」と題し、授業の中で探究との関連性を持たせた授業を実施している。各教科・科目の特色や学習内容に応じて、SDGs や探究的な学びにつながる学習を計画し、学年全体で各教科と連携、年間シラバスを作成する。今ある授業を、どう探究的な学びへつなげていくかを中心に考え、系統的、計画的に実施している。

探究ベーシック（探究と教科の関連）

教科	内容	SDGs
国語	『羅生門』（芥川龍之介）+『貧困は自己責任なのか』（湯浅誠）を読み、登場人物の状況を分析、救済策を考察	1・2・3・4・10・16
数学	数学Ⅰ（論理と集合、2次関数）の中で、協働して目標を達成するプロセスを経験	17
化学基礎	化学反応の量的関係と環境問題の考察（日本の天然ガス消費による二酸化炭素の排出量、海の生物に与える影響）	13・14
歴史総合	近代化・大衆化・グローバル化をテーマに、国家の形成や帝国主義に対する民衆の行動について俯瞰して捉える	1・10・16
家庭	エコクッキングを取り入れた弁当献立を考える	2・3・13
保健	感染症について学ぶ（種類、予防、性感染症、エイズ）	3
英語	CROWN Communication English Ⅰ Lesson5 Food Bank	2

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

長崎大学と WWL 事業の前から高大連携事業を実施しており、夏休み期間に同大学で受けた授業を単位認定している。令和4年度は4日間の集中講義で「数学の世界を楽しもう」の授業を受講した。授業に参加すると後日評価が届き、単位については、高校の単位か大学の単位（入学後）かを生徒が選択できる。

■高校生国際会議等

「広義の平和」をテーマに、共生・環境・社会・経済の4分野で日本語・英語の2部門で会議を開催した。ハワイ、ニューヨーク、上海市、福建省、タイ、オランダ、ウクライナ、日本と多様な参加国が集まり会議を行った。会議参加生徒は、そのほとんどが生徒主体で組織した本校の実行委員会（高2・3、計 120 名）による広報活動により募り、会議運営もすべて生徒主体で行った。
また、広島市立舟入高等学校や国際連合等、実に多くの協働機関と連携し作成した「高校生平和共同宣言」を 10 言語（英語、オランダ語、フランス語、スペイン語、中国語、韓国語、アラビア語、ロシア語、ウクライナ語、日本語）に翻訳し発表した。

≪生徒の声≫

～探究型学習等について～

・探究活動において海外の高校生との交流を通して幅広い、現地ならではの視点を得ることができた。私は国際活動を軸に行ってきたので、主に英語を使って日本人だけでなく様々な人々と交流することも好きになった。中学までは英語を使って発表したり、英語で誰かと話したりすることは多少緊張することもあった。しかし、探究活動の発表を英語で行い、外の人と交流する機会を通して、英語で話すこと、コミュニケーションをとること、自分の言いたいことを言うことも前より簡単になり、その交流の中で多くの学びを得られた。（３年生男子）

・長崎県は離島が多く、フィールドワークで離島に行く生徒が多いので、フィールドワークに行く機会を数人だけでなく学年全体にもらえているので非常に良かった。（３年生女子）

～外国語や文理の教科を融合した教科・科目について～

・探究ベーシックの中でも、国語の羅生門の授業が印象に残っている。貧しい老婆が死体置き場で髪を取る作品中のシーンの行為の是非について皆で考えたが、自分たちは日本で恵まれた環境で育っているから「いけないことだ」と考えるが、もし自分たちも極度の貧困状態にあったら同じような行動に出るかもしれない、と授業を通じて気づいた。日本の恵まれた環境から見てしまうと問題の解決は難しく、現地に行って現地の目線・視点から問題をとらえることも必要だと感じた。（３年生男子）

・IGR で外部の団体、大学や企業の話を聞く機会があった。私たち学生は「こうしたらいいのではないか」と考えることしかできないが、大人の方々から、例えば海水を水にする装置を作ったという実践的な話を聞くことで、今まで SDGs は自分たちとは遠いものだと思っていたが、「もっとこういう方と連携したい、話を聞きたい」と外部の存在に興味を持つ、外部の存在を頼るのも自分にとって大きなメリットになる、と考えるきっかけとなった。（３年生女子）

熊本県立熊本高等学校　（管理機関：熊本県教育委員会）

3年間を掛けた探究学習カリキュラム「探究の交響楽」を実施。1年生時にプレ的な探究学習を行うことで、2～3年生時に課題解決に向け実際に行動できる生徒を育てている。また、武蔵野美術大学との連携による授業など、多彩なプログラムを実施。

■探究型学習

熊本県立熊本高等学校では、3年間の探究学習カリキュラム「探究の交響楽」を実施。1年生は個人・グループで探究学習のプレ体験を行ったあと、2年生より本格的な探究学習を行う流れとなっている。

熊本高等学校の探究学習カリキュラム「探究の交響楽」の構成

第1楽章	1年生の10 月まで実施。 SDGs に紐づけたテーマ設定の下、個人で探究学習を行う（調べ学習に近い）。
第2楽章	1年生の11～翌年2月まで実施。 グループでの探究学習。活動範囲は第1楽章より広がり、調査だけでなく実際に行動するグループもある。
第3楽章	2年生進級後～3年生前半まで実施。 グループまたは個人のどちらでも可。 ①地域に関する SDGs、②科学的な研究のどちらかに分かれ、探究学習を行う。

≪第1楽章・第2楽章について≫

第1楽章は、個人で調べ学習の探究学習を行い、その成果をポスターにまとめ発表を行う。調査テーマは SDGs に紐付けながら、生徒が自由に設定している。

第2楽章は、グループで探究学習を行いながら、調べるだけでなく実際に課題解決に向けた行動を起こすことを目指す。

≪第3楽章について≫

第3楽章は、2年生～3年生前半までに渡り、グループまたは個人で、①地域に関する SDGs、②科学的な研究、のどちらかに分かれ、探究学習を行う。グループでの探究学習を選択する生徒、SDGs を選択する生徒が多い。

第3楽章でも引き続き、探究を通し実際に行動を起こすことを目指す。実例では、地元企業と地域の名産品の商品開発を行い、売上を県内の豪雨災害の復興に寄付したグループがある。

同校生徒が出展するクラウドファンディングサイト

≪WWL 成果発表会の実施≫

第3楽章では、7月と3月に成果発表会を実施している。特に7月の成果発表会は全校生徒が参加し、1年生にとっては、上級生の探究学習の内容や実際に行動した事例を知る機会であり、第1楽章・第2楽章に取り組む上での刺激になっている。

■海外フィールドワーク・留学

熊本高校では、本来は台湾研修（全員参加）、イギリス・イートン校研修、ボストン研修を予定していたが、コロナ禍の影響により中止。令和6年3月より再開予定。また「留学デザイン Program」は継続。台湾研修は令和5年10月に再開し、姉妹校提携延長調印、中部工業団地のTSMC見学をおこなった。また、令和5年11月には姉妹校から訪日修学旅行団が来校した。姉妹校提携による国立中科実験高級中学とのオンライン交流も引き続き実施している。

「留学デザイン Program」でのオンラインディスカッションの様子

≪留学デザイン Program について≫

「留学デザイン Program」は、海外日本人研究者ネットワーク、一般社団法人慶應反分野的サイエンス会、熊本高校卒業生で海外大学へ進学した学生などに協力を仰ぎ、世界各地の日本人留学生・現地学生等とオンラインディスカッションを行う取組である。

日本からは同校のほか、駒場東邦高等学校、灘高等学校、福岡工業高等学校等から、各校約20 名の生徒が参加している。海外からはアルゼンチン・イタリア・マレーシアと、幅広い地域へ留学中の日本人学生や海外出身の学生、社会人が参加する。

≪台湾国立中科実験高級中学とのオンライン交流について≫

国立中科実験高級中学とのオンライン交流は、熊本高校・国立中科実験高級中学から希望者を募り、Google classroom にて全員で交流した後、ブレイクアウトルームにて1対1のコミュニケーションを行っている。これは、時差が1時間しかない台湾に姉妹校を持つ利点である。

事前にオンライン交流を行うことは、実際に訪問してお互いが会う際のコミュニケーションの密度が高まるという効果もあり、実際の訪問後にも、オンラインであればフォローアップの交流を再度行うこともできるため、同校は、令和5年10月に両校生徒による訪問交流の再開後も、オンラインと実際の訪問を組み合わせた交流方法を続けていく予定である。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

熊本高校の卒業生である武蔵野美術大学教授 若杉浩一氏との縁もあり、武蔵野美術大学と連携協定を結んでいる。

熊本高校の生徒は、教育課程外での位置付けで、武蔵野美術大学大学院 クリエイティブ学科の授業のオンライン受講が可能である。授業の内容ごとに生徒へ参加募集を掛けており、一回あたり5名～10 名の生徒が参加している。

また、武蔵野美術大学が熊本県天草市と連携協力に関する協定を結んでいることもあり、同大の天草市での活動に熊本高校の生徒が参加している。R5年度に、観光客が思い出を本に記入し、次の観光客がさらにページを加えて残し、訪問者目線の観光ガイドブックが、厚みをましながら、次々に観光客をガイドしていくという同校生徒のアイデアが天草市の事業として採用されている。

「おもいこみデザイン展」の様子

≪展示イベントの開催≫

武蔵野美術大学の授業参加を通じ、熊本高校では展示イベントを開催している。武蔵野美術大学より教示を受けた「フォト・オブザベーション（デザインを行う上で、日常で何気なく見逃している景色から、美しさ・違和感・人の行動を観察するリサーチ作業）」を、同校の1年生250 名が実施し、写真と自身の考察を展示する「おもいこみデザイン展」を開催した。

同展では、展示だけでなく来場者との交流も図るため、有志の生徒によって、来場者が感想を投稿するなどのVRアプリの開発も行っている。

また、現在は総合的探究の時間に1年生400名全員が写真を持ち寄り、フォトオブザベーション講座を受講しており、「アート・観察・感性」の要素を含むこのような講座は熊本高校のSTEAM教育の一つとなっている。

≪生徒の声≫

～探究型学習について～

・学校全体で取組むような活動に参加する前から、自分なりに趣味の範囲として、いろいろな探究活動のようなものに参加したことはあった。学校全体でやることで、個人の範囲でしかできなかったことが、学校の助けも借りて、どんどん広げていけることにたいへん満足感を得ている。（3年生男子A）

・WWL の活動を始める前にも、自分の趣味の範囲内でプログラムを作っていたが、それはどれも実用的ではなく、自分の趣味で作っているだけだった。こういった探究活動を通すことで、自分だけの世界に有ったものが、他の人のために役立てられる、そんな風に思いもよらない方法で自分の力が活用できるとわかって嬉しい。（3年生男子B）

～大学との連携について～

・よく協力してくださる武蔵野美術大学の若杉先生が、熊本高校で講演してくださった際に、「デザインというのは美術作品を作るのではなく、人の心に寄り添ってプロダクトを作ることだ」とお聞きした。自分もこんな風に、デザインするものの見方で、製品とかサービスを開発していければいいなと思った。（3年生男子B）

宮崎県立宮崎大宮高等学校　（管理機関：宮崎県教育委員会）

SGH の後継事業として、グローバル人材、グローバルイノベーターを育成することを目指してカリキュラム改革等に着手してきた。

■探究型学習

宮崎県立宮崎大宮高等学校では、文科情報科の必修教科として「グローバル協創」を開設している。従来の教科「情報」と「総合的な探究の時間」を融合した授業で、3学年かけて実施する（2クラス合計80 名、3学年で約240 名を対象）。

≪グローバル協創≫

1年次（グローバル協創Ⅰ）はプロジェクト学習を中心に行う。1学期にチームを組んで2回程度のプロジェクトを行う。プロジェクトの課題は、毎年、その年にあった出来事などを踏まえて設定している。夏には、連携協働機関の JSIC（日本社会イノベーションセンター）と共同で TISP（イノベーション・サマープログラム）を行っている（参加は希望制）。

2年生（グローバル協創Ⅱ）からは、宮崎大学、宮崎産業経営大学と連携したグループ課題研究や調査を行う。探究のテーマは、地元宮崎と世界を結び付けて設定する。WWL 事業全体では「「食」を通じてゆたかな世界を協創するイノベーターの育成」と掲げているが、「食」から派生して環境問題やエネルギー問題をテーマにする生徒も多い。

グローバル協創カリキュラム（1 年次）

グローバル協創カリキュラム（2～3 年次）

グローバル協創Ⅱでは、大学のアドバイザー教員による指導を受けている。宮崎大学の場合は、アドバイザー協力者一覧リストを作成していただいている（全学部教員、約110 名掲載）。生徒はその一覧リストから自分たちの研究計画、プロジェクトに対して必要な助言をいただける大学教員を選び依頼をかける。基本は以下の時期（年3回）に、大学の教員とディスカッションする場を作っている。

1回目：生徒たちが考えたプロジェクトについて説明し、助言を受ける（7月頃）
2回目：研究計画、実際に実験や調査の計画を具体的に立てた後ディスカッションする（9月頃）
3回目：すべての調査実験等が終わり結果をもとに考察する段階で、大学教員から助言をいただく（11月頃）

探究活動の成果を3年夏開催の高校生国際会議において英語で発表し、さらに論文にまとめる。

■海外フィールドワーク・留学

コロナ禍のため、グローバル協創Ⅱでオンラインを駆使しながら台湾、ベトナム、シンガポールの生徒たちとチームを組んで課題研究（共同研究）を1年間実施し、海外との研究の共有化、ディスカッションに取り組んだ。令和3年度では、宮崎大宮高校の生徒たちの12グループに、それぞれ海外連携校の生徒が合計40 名参加し、オンラインを活用することで協働で課題研究を進めてきた。

また、令和4年度の2年生（希望者）を対象として、令和5年3月に米国短期留学および海外研修（シンガポール、ベトナム）を実施する。一週間程度現地にて、探究テーマに関する調査、ディスカッション、プレゼンテーションを現地の大学生や高校生と一緒に行う。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

宮崎大学農学部の講義「植物の栽培と管理」、や基礎教育部の講義「データサイエンス入門Ⅰ・Ⅱ（令和4年度より開始）」を、それぞれオンデマンドにて夏・冬休みに集中的に受講できる。宮崎大宮高校だけでなく同校の AL ネットワークに所属する連携校にも広く参加を呼びかけている。修了後は、宮崎大宮高校では高校の単位となり、連携校では高校の単位にはならないが、宮崎県教育委員会から履修を終えた生徒たちに履修証明書を発行している。大学での単位認定を目指して宮崎大学と協議をしている。

令和4年度は、講義の受講修了後にオンラインで大学教員と座談会を開いた。これまで学んできた中で疑問に思ったことや、将来的に自分のやりたいことと学んできたことを関連付けて将来の農業について大学教員と建設的な議論をすることができた。

■高校生国際会議

高校生国際会議では、オンラインによる英語でのプレゼンテーションを文科情報科の3年生全員が行っている。今年は海外連携校と共同チームで発表した。

令和4年度から高校生国際会議にてグローバルディスカッションを開始した。ここでは「食」に関するテーマを設け、宮崎大宮高校、県内連携校（3校）、海外連携校（3校）の希望者がそれぞれのチームでディスカッションに参加した。

グローバル高校生フォーラム in HINATA

≪生徒の声≫

～探究型学習について～

・今までは自分の周りの狭い範囲、自分の生活圏内のことしか気にならなかったが、WWL で計画を立てて研究することによって、自分の周り、宮崎県内だけでなく日本や世界のこと等、幅広いニュースや出来事に関心が深まった。（３年生男子）

・海外の連携校との英語でのコミュニケーションが、私にとって一番大きな変化だった。英語を通してこまめにコミュニケーションをとることで、それまでは「海外の人だからよくわからない」と気持ち的に疎遠になっていた部分があったが、もっと世界に目を向けてみることも大切だなという考え方に変化した。この高校で探究の授業がないと絶対に経験できなかったことだと思うので、参加できて本当によかったと感じている。（３年生女子）

・例えば日本は魚がたくさん取れる国だと聞いて育ってきたが、実際は枯渇状態にあるなど、聞いていたことと実際は違うという気づきがあり、自分の目で確かめてみることはとても面白く発見があり、問題についてより考えるようになった。（２年生男子）

・１年生の時はあまり研究自体が進まず、大きな原因がメンバーの中にリーダー的存在が誰もいないことであると気づいた。そこで私とメンバーの一人が積極的に動き始めてから少しずつ状況が変わってきた。私は今まで人前に立つことがあまりなかったが、このグローバル協創という教科を通して、人前で率先して何かするということについて、今も継続して学びを得てきている。（２年生女子）

北海学園札幌高等学校　（管理機関：学校法人 学校法人北海学園）

同校は教育目標の一つに「国際理解教育」を掲げ、ステークホルダー（大学・企業など）にも指導を仰ぎ、SDGs 学習と国際交流を充実させている。SGH アソシエイト校の経験を経て、WWL 事業で更に活動の場を広げている。

■探究型学習、大学との連携、フィールドワークの実施

北海学園札幌高等学校には、国際的に通用する「実践的な英語」を重点的に学ぶ、普通科グローバルコースが設置されている。グローバルコースにおける学校設定科目「Academic English」「多文化理解」「プレゼンテーション」では、定められたテーマについての調べ学習やグループワーク、プレゼンテーションなどの探究型学習が行われている。

グローバルコースの3つの学校設定科目

Academic English	4コマ/週	難しいトピックを選び、生徒たちが英語で学ぶ。グループを作り、それぞれ1つ国を選び、その国の活動や考え方について調べ、発表する。 ＜例＞ ・「マラリアと気候変動 - Malaria and Climate Change」 病気と気候変動の関係について調べ、森林伐採などの話につなげる。 ・「障害とインクルーシブ教育 Disability and Inclusive Education」 『もし障害を持っている生徒が同じクラスにいたら』ということなどを考え、学ぶ。
多文化理解	3コマ/週	1クラスを4グループに分け、テーマを決めてアクションプランを考え、実行する。 ＜例＞ ・酪農学園大学の飛谷淳一先生の指導のもと農作業をし、収穫した野菜を販売し、カンボジアに寄付をする。 ・北海道インターナショナルスクールを訪問し、英語でプレゼンテーションを行う。 ＊中学生には SDGs に関する導入レベルプレゼンテーション ＊幼稚園児にゴミの分別がなぜ大事かのプレゼンテーション ・手作りのアクセサリーを学校祭で売り、カンボジアに寄付する。
プレゼンテーション	2～3コマ/週	4人グループで SDGs について調べたいテーマを探し、アンケートを作成する。データを集計し、分析や簡単な統計学を利用し統計をする。アクションプランを考え、12月の「GLOBAL DAY」で、プレゼンテーションをする。

≪GLOBAL VILLAGE≫

5月下旬に、総合的な学習の時間に実施する2日間の研修。1 年生全員参加の国際理解のためのプログラムである。

1日目：北海学園札幌高等学校の WWL 運営指導委員長である、北海道大学大学院の山中康裕教授の講義を聞く。環境問題や、アジアの若者の SDGs に関するアクションなどについて学ぶ。講義後は、山中教授が作成したワークシートを用いてワークショップに取り組む。

2日目：北海道大学・大学院の外国人留学生を招待し、バスの中で共に SDGs をテーマに交流する。その後、栗山町の農園や企業の研究施設を訪問。廃材の再利用に関する講義を聞いたり、農園における SDGs の取り組みやリサイクル、循環農法などの話を聞いたり、畑仕事の体験などをする。農業・林業・里山保全を通じて SDGs への興味を喚起する。

GLOBAL VILLAGE の様子

≪様々な課外活動≫

この他、WWL 事業として全校生徒から希望者を募って実施する、様々な課外活動が開催されている。生徒が興味のある取り組みに関われるよう、講義・フィールドワーク・ワークショップなど10数個の講座を設定、実施している。近隣の大学や企業、公私立高等学校等と連携し、農業やアイヌ文化の体験、英語での交流、北国の住まい作り・建設の工夫など、多くの学びの機会がある。

主な課外活動	連携先	内容
農業フィールドワーク	・酪農学園大学	敷地内の空き地を活用して、畑作りをする。飛谷先生から土のベースを提供いただき、肥料を混ぜて苗木を植え、管理・収穫する。作物は学校祭で安価に販売し、カンボジアに寄付をする。5月から、畑を閉じる10月まで取り組む。
歴史と SDGs をつなぐ 地域の観光資源を歩いて	・白老東高等学校	白老東高等学校が主幹校となり、7月、2年生の希望者80名弱で実施。ウポポイの見学や、アイヌ料理を体験する。また、仙台藩元陣屋資料館を見学し、歴史についても学ぶ。白老東高校生による資料館ガイドもある。
GLOBAL SUMMER CAMP	・北海学園大学 ・北海道大学 ・北星学園大学 ・岩田地崎建設株式会社 ・N.Z 協会	2日間のセミナー形式のイベント。外国人との交流の機会もあり、SDGs の多くのテーマに触れる。北海道大学大学院の山中康裕教授や北星学園大学のマシューコッター先生、ステークホルダーである岩田地崎建設株式会社の方の講義を聞く。それぞれの講義を終えた後、北海道大学大学院の留学生30名程をコーディネーターに意見交流を行う。ニュージーランド協会によるジェンダーを考えたスポーツ交流もある。
探究！アイヌの生活・文化	・平取高等学校 ・平取町教育委員会	平取高等学校が主幹校となり、アイヌ文化の学習活動をする。10～30名程が参加。二風谷アイヌ文化博物館を見学し、教育委員会の方からアイヌ文化に関する講義を聞く。両校の生徒が共同でイメージマップなどを作成し、ワークショップを行う。
ENGINEERING LABO	・北海学園大学	北海学園大学の工学部を訪問し、生徒約30名が「社会環境工学科」「建築学科」「電子情報工学科」「生命工学科」の4学科に分かれて参加する。各学科の講義を受け、実験実証を行い、12月の「GLOBAL DAY」で発表する。

■海外フィールドワーク・留学

≪台湾語学・文化研修≫

全コースの1・2年生を対象に希望者（定員25名）を募り、3月下旬に6泊7日で実施。姉妹校である台湾嘉義市コンコーディア高等学校（台湾基督教協同中學）と交流しながら、1週間滞在する。コンコーディア高等学校の生徒と嘉義市内の施設を見学し、同校内で中国語の授業等を受ける。また、同校の日本語クラスに参加し、日本語や中国語で交流する。その後、2泊3日でホームステイを体験し、最後に北海道・札幌・北海学園札幌高等学校・WWL 活動をテーマにプレゼンテーションを行う。

コンコーディア高等学校との交流の様子

≪アメリカ合衆国 ポートランド研修≫

グローバルコースの生徒は2年次にアメリカ合衆国ポートランドにおいて研修を実施し、コースの生徒全員が参加する。全員が3週間ホームステイしながら、ポートランド州立大学で語学研修を受け、現地でフィールドワークや高校間交流も行っている。

■高校生国際会議等

拠点校と連携校が一同に会する機会として、「GLOBAL DAY」を設けている。4年間継続予定で、令和5年度が3度目の開催となる。連携校や協働機関とオンラインで繋ぎ、探究活動の発表を行い、コメントやアドバイスをもらう。令和6年度に、高校生国際会議を開催予定。

GLOBAL DAY の様子

≪生徒の声≫

～フィールドワークについて～

・１年次に GLOBAL VILLAGE に参加した。その際に、初めて SDGs について詳しく知った。農園で、食料の廃棄についてなどの講義を聞いた。中学時に SDGs についての授業はあったが、詳しくは学ばなかった。今回参加して、2025 年までに何を達成できていれば世界が良くなるかが分かった。（２年生）

～海外研修について～

・２年生のときに台湾語学文化研修に参加した。協定校のコンコーディアハイスクールに行き、バディと学んだりした。ほぼ初の海外だったので、とても刺激を受けた。ホームステイをしたので、毎日英語で話すことに苦労した。たった１週間だったが、普段の旅行では現地の学校に行くことは出来ないので、勉強になり新しい世界が見えた。「多文化理解」や「プレゼンテーション」の授業のモチベーションが上がった。もっと英語を話したいという向上心につながった。（３年生）

・台湾研修の際、コンコーディア高等学校には英語と中国語、両言語を話せる生徒が多く、日本語を教えてほしいという意欲の高い生徒も多かった。お互いに教え合う交流が出来たのが印象的だった。毎日英語を話すということは挑戦だったが、自分の強みになっていると感じるので、参加して良かった。（３年生）

新潟県立三条高等学校　（管理機関：新潟県教育委員会）

「産業の街」として知られる三条市にあることから、地元企業と連携した取組を数多く実施。国際交流活動と探究型学習を通じて、生徒が世界と地元に関心を向けるカリキュラムを開発している。

■探究型学習、フィールドワークについて、大学との連携

新潟県立三条高等学校は、1年時は SDGs に関するグローバルな社会問題、2年時は地域に関連したテーマで探究型学習を行う学校設定科目「グローカル探究」の授業を実施している。

当初の構想では、1年時に地域をテーマにし、2年時にグローバルな社会課題にテーマを広げる予定だった。しかし、高校生は地域課題よりもグローバルな社会問題に関心を持っており、地域課題になじみが薄いことがわかった。そこで、グローバルな課題に取り組んでから、地域の課題を探究していくカリキュラム構成へと変更した。

「グローカル探究」の3年間の概要は以下のとおりである。

「グローカル探究」の概要

1年生	・SDGs をテーマに、グローバルな社会問題について探究学習を実施。 ・グループ単位で活動する。
2年生	・1年生時の探究型学習で学んだ内容をふまえて、地域の課題に落とし込んだテーマを設定し、探究型学習を実施。 ・グループ単位で活動する。（グループは2年生進級時に新しく編成する） （※生徒の希望により、グループ及びテーマの継続は認める。）
3年生	・2年間の探究学習を踏まえて個人で探究テーマを定め、その実現、貢献に向けた自身の進路研究を行う。

≪グループ編成時における事前調査の実施≫

グループを編成する際は、関心が近しい生徒でグループを組めるよう、事前に生徒の興味関心を調査し、その調査結果を踏まえてグループを編成している。

「グローカル探究」のフィールドワークによる、地元企業訪問の様子

≪フィールドワークの実施≫

グローカル探究では、フィールドワークも実施している。1年、2年の両学年でフィールドワークを実施する。1年時には、地域探究の入口として学年を6グループにわけ、企業訪問を行い、2年時は地元企業や自治体へ訪問、インタビュー、アンケート実施等のフィールドワークを各グループで積極的に行うこととしている。企業・自治体等の外部とのやり取りは、生徒自身が連絡を取っている。

2年生による、地域をテーマにした探究型学習の例は以下が挙げられる。

2年生の地域をテーマにした探究型学習（一部）

- ・米の新しい使い方　～三条米のイメージアップ～
- ・燕三条の工場の知名度と利益向上のために
- ・三条市のふるさと納税を用いて地場産業を振興するには　～新たなふるさと納税制度の提案～
- ・燕三条地域で安心して仕事と子育てができる環境を作るためには？
- ・三条をデジタル教育先進地域にしよう

≪地元企業や連携大学による WWL 特別講演の実施≫

同校のある新潟県三条市を含む県央地区は、地元企業によって「産業の街」として発展した街であることにちなみ、地元企業や連携大学である三条市立大学、長岡技術科学大学・新潟大学、自治体による特別講義（WWL 特講）や探究活動に対する助言の機会を設けている。加えて、分野別に各分野で活躍する OB・OGを講師とする社会人講義を開催し、社会課題や地域課題への関心喚起と、探究活動への助言の機会としている。例えば、以下のような講義を開催している。

WWL 特講や社会人講義の例（令和5年度・一部）

講義内容	講師
WWL特講：自治体の地域課題への取組	三条市、燕市、新潟市
WWL特講：統計にみる新潟県	新潟県統計課
社会人講義	医師、会社経営者、コピーライター、DXディレクター、金融機関、大学教授、財務省等

≪地元企業や大学による発表会の講評≫

「グローカル探究」の授業では、中間発表会、年度末の学年発表会、1・2年生合同によるポスターセッションなど、探究型学習の発表の機会を設けている。特に中間発表会と学年発表会には、連携大学・地元企業も参加し、生徒に講評を行っている。

地元企業や連携大学が参加する、年度末の学年発表会の様子

■外国語や文理の教科を融合した教科・科目

学校設定科目として「グローカル探究」に加えて「WWL 情報」「WWL 論理・表現」の授業を設定している。

「WWL 情報」では1・2 年次各1単位、教科「情報」の内容のほか、探究型学習の成果発表を想定し、プレゼンテーションの際に使用するソフトの使い方や、スライド資料の作り方等についても学習する。

「WWL 論理・表現」は1・2年時で各3単位、3年時で2単位設置しており、英語の表現力強化に取り組んでいる。連携大学である長岡技術科学大学の協力を得て、同大学の留学生に対して英語によるプレゼンテーションを行う実践的な機会を設けている。また、グローバル・スタディズ・プログラムとして１学年、２学年全員を対象に英語のみで、国内大学の留学生を相手にディスカッション、プレゼンテーションに取り組む経験をさせている。

■海外交流の取り組み

令和4年度から、希望者を対象にベトナム研修を行っている。ベトナム訪問は生徒に海外を実体験させる、アジアの持つ発展する社会の空気を体感させることを目的としており、現地での高等学校や新潟県人会との交流のほか、現地大学・企業等の訪問交歓を行っている。

現地訪問のほかにも、台湾の高等専門学校・ラオスの日本人学校・モンゴルの姉妹高校とのオンライン交流を実施している。

また、公益財団法人 AFS 日本協会による交換留学生を毎年受け入れており、日常的に校内で日本人生徒と留学生の交流が行われている。令和5年度は、長期でドイツ人留学生、短期でインド人留学生が在学している。

■高校生国際会議

令和5年10月19日、20日の2日間、高校生国際会議を「三条・大地の学校」と題して開催した。会議には、同校ならびに県内連携校のほか、県外連携校4校、県内の AFS 留学生、モンゴルの連携校、台湾の高等専門学校の生徒151人が参加、加えて長岡技術科学大学と新潟大学の留学生12人や、新潟県国際交流員5人がサポートとして参加した。

1日目は、地元企業による基調講演のほか、各生徒が関心のあるテーマで分科会に分かれ、地元企業であるスノーピークのキャンプフィールドを会場に対話・意見交換を行い、2日目は三条高校を会場に分科会の報告、会議宣言を行った。

≪生徒の声≫

～探究型学習等について～

・私のグループではシングルマザーの支援策について探究活動を行った。探究型学習は、まずテーマを決めることが大変。１年生のときは SDGs に関連して考えたが、２年生で自分たちの興味があることを地域に関連付けてテーマにすると、「貧困」といっても漠然として広く、どのような支援策が効果的か私たちにはわからないことだった。また、実際に市役所の方のインタビューした結果を受けて、どのような支援が効果的か考えることも大変だった。（２年生女子 A）

・探究型学習は、解決するためにみんなで頭を寄せ合って考えることが面白かった。ただ、中間発表会のときに先生や大学の先生にアドバイスをもらい、自分の研究の進め方などを振り返るよい機会となった。普段からアドバイスをくれる人がそばにいたほうがいい時間になると思う。（２年生男子）

～外国語教科について～

・英語は得意ではなく、抵抗があるほう。英語のプレゼンテーションの実践を行って、うまくいった経験が英語力への自信になった。（２年生女子 B）

愛知県立千種高等学校　（管理機関：愛知県教育委員会）

同校はスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールに指定された経験を活かし、国際教養科にて「グローバル探究」等のカリキュラムを開発。さらに、普通科においても探究の学びを拡げている。

■探究型学習、国内フィールドワークの実施、外国語や文理の教科を融合した教科・科目

愛知県立千種高等学校には国際教養科と普通科があり、WWL 指定初年度は国際教養科からカリキュラム開発を始めた。国際教養科では、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール指定期間に開発したカリキュラム「国際英語」に、探究的な学びを合わせ、「グローバル探究」を開発した。

「グローバル探究」は、3学年共通で週2時間行う。1時間は探究活動を行い、もう1時間は CLIL（Content and Language Integrated Learning）の教科書を用いて様々な知識を学ぶ。

1、2年生の「グローバル探究Ⅰ・Ⅱ」では、年4回ほど外部の講師の授業を受け、専門的な知識を学びながら、グループでの探究活動を行う。

3年生の「グローバル探究Ⅲ」では、2年間の経験を踏まえて論文作成をする。論文は、ルーブリックを用いて、批判的・建設的・創造的視点が入っているかなどを教科担任が評価する。

国際教養科の探究型学習カリキュラム

1年生	グローバル探究Ⅰ （グループ学習）	探究：3～4人で1グループを作り、探究学習を行い、発表する。 教科書：CLIL で SDGs のトピックを学ぶ。外部の講師からの講義を受ける。 内容：SDGs をテーマに広く学ぶ。テーマの大まかな分野はあらかじめ決まっており、その中からグループごとに小規模なテーマを決め、現状分析する。自分たちの解決策をパワーポイントにまとめ、英語で10 分程度のプレゼンテーションを行う。
2年生	グローバル探究Ⅱ （グループ学習）	探究：文献に当たるなど先行研究を調べるだけでなく、現場の実態を知るためのフィールドワークや調査も行う。ICT を駆使して効果的な発表をする。 教科書：CLIL の発展したテキストを学ぶ。外部講師からの講義を受ける。 内容：分野設定もなく、1つのテーマを掘り下げていく。自分が社会で解決したい課題についてプレゼンし、近い課題のグループを作り探究学習に取り組む。アンケート調査を実施し、裏付けをもとに効果的な解決策を提案する。現実的な提案ができるよう、情報を調べることに重きを置く。中間発表を2回ほど設け、他のグループの発表を聞くことで視野を広げる。
3年生	グローバル探究Ⅲ （個人学習）	探究：卒業論文の作成。テーマは各自が設定（SDGs 関連や、社会的・文化的・科学的に意義のあるもの）し、クラスでグループ代表選出後に発表する。 教科書：CLIL のテキストを使い、実践的なトピックについて学ぶ。 内容：文章化を目標に、卒業論文を英語で作成する。テーマ決め・参考文献探しから調査・研究・実験まで個人で行う。

※「グローバル探究Ⅲ」は現在もカリキュラム開発中であり、令和5年度に完成予定。

また、国際教養科は、英語・第2外国語や国際情勢などを重点的に学ぶ教育課程となっているが、個々の生徒の興味・関心や進路希望などに即し、理科や数学も含めた幅広い学びも可能な教育課程を編成している。

≪普通科の取り組みと、連携校との交流≫

令和4年度から、WWL の活動範囲を普通科にも拡げ、フィールドワークを中心とした探究学習に取り組んでいる。

令和5年度には、希望者を募り課外授業として探究学習を行っている。WWL実行委員会の教員6人の指導のもと、6班に分かれテーマを設定し学習を行う。夏休みにはフィールドワークを実施し、連携校も交えてテーマに合った行先を訪問した。午前中にフィールドワークを行い、午後は同校や訪問先の会議室でテーマに沿ったディスカッションをし、学びを深めている。

「フードバンク愛知」での様子

＜訪問先の例＞
・テーマ「多様性を認める社会」…ジェンダー問題に取り組んでいる企業
・テーマ「家庭でのフードロス削減」…NPO 特定非営利法人フードバンク愛知
・テーマ「プラスティック削減」…メタウォーター下水道科学館なごや、藤前干潟

「メタウォーター下水道科学館なごや」での様子

■海外交流

韓国のトルマ高校の生徒との交流の様子

同校では台湾への海外研修を予定していたが、コロナ禍の影響により中止となり、オンラインを活用した海外交流（大園國際高級中等學校（台湾）と、社会問題など共通のテーマについて意見交換、発表等を行う）で代替した。

また、令和5年度には、ユネスコスクールの海外交流プログラムを利用し、韓国の2校と交流している。国際教養科の1・2年生を対象に希望者を募り、計30名程がメールやSNS、Zoom などで個人レベル（生徒と生徒、1対1）での文化的交流をしている。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

令和4年度から、名古屋市立大学にて金曜日16時から開講されている講義「心理学入門」の受講が可能となった。単位を修得した場合は名古屋市立大学の単位として認定される。

また、愛知県教育委員会では複数の大学の協力により「知の探究講座」を毎年実施しており、同校からは例年1～2名程度参加している。受講した生徒には、同校の単位が認定される。

この他、普通科・国際教養科の希望者生徒には名古屋大学から、さらに国際教養科の生徒には、神戸大学・京都大学・豊橋技術科学大学からそれぞれ講師を招き、SDGs を中心としたテーマで講義を開催している。

名古屋市立大学	大学の単位
「知の探究講座」 愛知教育大学 名古屋工業大学 豊橋技術科学大学 豊田工業大学 愛知県立大学	高校の単位
名古屋大学	受講のみ
神戸大学	受講のみ
京都大学	受講のみ
豊橋技術科学大学	受講のみ

■高校生国際会議等

令和5年12月に「～わたしたちの未来のための SDGs～」と題して開催。同校では2年生の希望者が参加する。他に、これまで年間4回の交流会で交流していた連携大学の留学生や、海外連携校の生徒が参加。

同校のグローバル探究は3つに分かれており、「IntermediateA クラス」、「MUN クラス」、「IntermediateB クラス」がある。それぞれのクラスの生徒が探究を深められるよう、「環境」、「貧困・教育」、「社会的不平等」の3つのテーマについて、クラスごとに3つの分科会に分かれてプレゼンテーションする。各分科会に同校の生徒が4名ずつ、連携大学の留学生や、海外連携校の生徒が4名ずつで編成。社会課題の分析と解決策の提案、ディスカッションをし、行動ビジョンを分科会ごとにまとめて発表。

≪生徒の声≫

～探究型学習について～

・海洋プラスティックの問題をテーマに取り組んだ。先生から「問を立てる時に、結果が見通せるものではいけない」と言われた。実際にフィールドワークに行った際に、立てた仮説が違っていたことが分かった。仮説が合っていたという結果だけではなく、仮説が間違っていたという結果が、先が見えない問を立てる面白さであると感じた。その分、次にどうしたらいいかを考え、新たな問を立て仮説を立てる中で、考えも深まった。中学生の時に学んだ調べ学習と変わらないと思っていたが、中学時よりも突き詰めて学べた。（２年生女子）

～フィールドワークについて～

・川の生態系を、川の生物でなく人間がきれいにする場合、どれくらいの期間がかかるかということを調べた。フィールドワーク先を決め、訪問して話を聞き、問題点を見つける力や実行する力がついた。川の生態系を保つための課題として、海洋プラスティックがメジャーであり、山のゴミは些細だと思っていたが、実は影響を与えていると知った。実験に使える器具や、フィールドワークに行ける範囲の制限があり、探究を進めるうえで苦労した。（２年生男子）

・夏休みにフィールドワークをするために、相手先へ電話をしたり、場所を決めたりするなど、すべて自分たちで準備した。その後、パワーポイントを使い英語でプレゼン資料をまとめた。１からすべて自分たちで進める経験は初めてで、成長できたと感じる。（２年生女子）

名古屋大学教育学部附属中・高等学校

（管理機関：国立大学法人　東海国立大学機構名古屋大学）

「協同的探究学習」を教育課程の根幹に、課題研究だけでなく教科教育にも取り入れている。SSH、SGH 指定校を経て、WWL 事業では、コンソーシアム内の連携校と大学との仲介機能を果たすなど、ネットワークを拡げている。

■探究型学習、外国語や文理の教科を融合した教科・科目

名古屋大学教育学部附属中・高等学校では、「総合的な学習の時間」が指導要領に入る以前から、全校体制で総合学習を実施してきた。その後、SSH、SGH を経て、現在は、探究型学習「STEAM」を行っている。

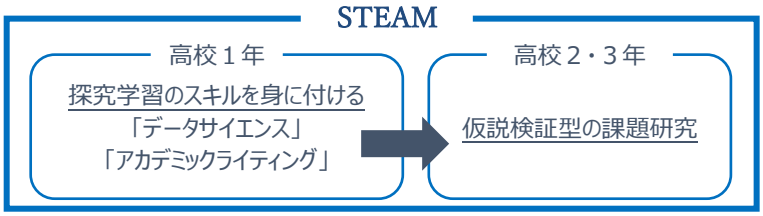
1年生では、本格的な課題研究の実施に向けて、「データサイエンス」と「アカデミックライティング」の授業で基礎を学ぶ。2年生からは「STEAM」の授業に移り、3年生の夏休みまで個人またはグループで研究に取り組む。

「データサイエンス」では、データの分析手法等を学ぶだけでなく、学外の様々な統計のコンペティションに出展するなど、学びの成果を形にしている。

「アカデミックライティング」では、自分たちの考えをシャッフルし、ブレインストーミングし、考える時間を持つことで研究の基盤となる力を身に付ける。また、同校が作成したロジカルライティングというテキストを使いながら、文章の書き方も学ぶ。

本格的な課題研究のための準備期間を長く設けており、1年次の1～2月頃から、探究テーマ決めをスタートする。その際、文献研究、仮説の設定、研究計画も合わせて行う。探究テーマを決める段階から名古屋大学の大学院生に来てもらい、オープンクエスチョンの質問をしてもらう。2年生の5月頃にテーマが決定する。

2・3年生「STEAM」は、全教員38人中16人が関わっている。生徒が決めたテーマに即して、16講座に分かれて研究を進める。すべての教科の教員が関わっており、生徒が希望するどんな研究テーマに対応できるようにしている。研究は、問題解決のためのフレームワークである PPDAC（Problem Plan Data Analysis Conclusion）サイクルに沿って、担当教員や専門家との話しあいを挟みながら行っている。



同校の探究活動のカリキュラム（各1単位全員必修）

1年生	データサイエンス （学校設定教科）	＜前期＞ 定量的な評価の理論・データの分析手法・考察の方法 ＜後期＞ 研究計画の立て方・進め方・データの取得方法
	アカデミックライティング （総合的な探究の時間）	＜前期＞ 仮説検証の考え方 資料の探し方・小論文の書き方 倫理的な考え方・情報の収集方法 ＜後期＞ 課題の設定とその解決方法 課題の分割とクリティカルリーディング 個人テーマの設定・カウンセリング
2年生	STEAM	個人またはグループで、各教科教員の16の講座に分かれ、研究を進める。
3年生	STEAM	夏休みまでに研究を終える。

※「STEAM」は現在もカリキュラム開発中であり、令和5年度に完成予定。

他に、同校では数多くの取組（課外活動含む）を用意している。高大連携の授業も含まれており、生徒は自分に必要なものを選んで受講する。夏休みに愛知県内外の高校・高等専門学校生と学ぶ名古屋大学の「学びの杜」や、連携校の生徒とともに学ぶ「高大接続探究ゼミ」、英語での議論・発表をする「ＡＬＥ（Active Learning in English）」などがある。

■海外フィールドワーク・留学

令和5年春に、UNIS（米国 NY 州 United Nations International School）を訪問した（希望者のみ参加）。日頃行っている UNIS 生徒とのオンライン交流をもとに、米国社会や米国の教育事情などを体験し、課題研究「STEAM」に繋げた。また、同世代の UNIS の高校生に、日本の文化紹介を英語でプレゼンテーションした。このような経験が、生徒の国際性を高めるとともに、英語運用能力を向上させている。

海外研修に参加できる生徒は一部であるため、生徒全員が海外交流できるよう、学内においても海外交流の機会を用意している。例えば、2年生は全てのクラスに留学生がおり、学内でも外国の方との交流が経験できる。他に、連携大学の留学生と共に学ぶ講座なども用意している。

UNIS にて

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

名古屋大学の授業を大学生と一緒に受けて大学の単位をもらう、AP（Advanced Placement）制度を実施している。令和5年度には、連携校の生徒も参加できる体制を整えた。

「基礎セミナー」では、大学1年生が参加しているゼミ形式の15～16人の授業ごとに、高校生がそれぞれ3～4人参加している。ゼミ形式の授業に高校生が参加することで大学生の刺激にもなり、大学側のメリットにもなっている。また、夏季集中講義も開催し、遠隔地の連携校の生徒も参加できるようにした。

学校設定科目：「AP（Advanced Placement）制度」

授業名	開催時期	参加校数
教養科目（基礎セミナー）	4～8月	4校
教養科目（基礎セミナー夏季集中）	夏休み	5校
Studium Generale B	4～8月	2校
Studium Generale A	10～3月	1校

令和5年度現在は、高校の授業後に大学に行き、大学の5時間目の授業を受けている。令和6年度以降、現行の AP から一歩進んで、高校の授業時間内でも、大学の授業に参加できるような仕組みを設定する予定である。

令和5年度現在では、例えば、以下のような授業に参加している。

≪基礎セミナー≫

名古屋大学初年次教育。名古屋大学1年生を対象とした授業であり、多彩な学問分野と人材を背景に、コモン・ベーシックとしての読み（文献調査、考察、検討）、書き（まとめ、報告書作成）、話す（討論、発表）を中心とした多面的な知的トレーニングを通して、「知の探究のプロセス」と「学問の面白さ」を学ばせ、自立的学習能力を育成することを目標としたもの。

夏季集中「基礎セミナー」も名古屋大学の正課授業のため、名古屋大学の学生だけでなく岐阜大学の学生も参加する。

≪Studium Generale Credit Course≫

英語で行われる AP 制度の名古屋大学 G30 International Program 講義。G30 InternationalProgram とは英語で学位のとれる国際プログラムであり、学部プログラムと大学院プログラムがある。講義はオンディマンドとオンラインで受講できるため、距離に関係なく参加できる。

≪Studium Generale Open Course≫

「StudiumGenerale」への参加者を増やすために、「Studium Generale Open Course」を開講した。令和4年度は同校生徒や連携校だけでなく、地域の高校にも提供した。成績と単位が付与される「StudiumGenerale B」「Studium Generale A」とは異なり、「Studium Generale Open Course」では、規定数以上参加した生徒に修了証が名古屋大学から付与される。

Studium Generale Open Course
ポスター

■高校生国際会議等

令和4年度は、名古屋大学にて「SGDs –What we can do as high school students–」を開催した。（公財）AFS 日本協会や、（公財）YFU 日本国際交流財団と連携し、名古屋・岐阜エリアなどの東海地区内の留学生30～40人（20ヶ国）を招いて実施している。司会は同校の生徒が務める。2日間かけて行うが、1日目の午後と2日目の午前に議論し、その後に発表する。グループセッション時は、名古屋大学の留学生20人ほどがファシリテーターをしている。

≪生徒の声≫

～探究型学習について～

・以前から環境問題に興味があり、統計の分野には興味がなかった。データサイエンスの授業を通して、統計に興味を持つことができた。環境問題に対して、自分で統計を使い、答えや考えを導くことができることに魅力を感じた。この学校に入らなければ絶対に関わることのなかった分野だったので、自分にとって大きな転機になった。（２年生男子）

・自分の研究テーマがマニアックで、具体的に見えているようで見えていない部分がある。大まかな軸は決まっているが、どういうアプローチで結果を出すか悩んでいる。データサイエンスに興味があるので、正確性・信憑性のある結果にするためにも、分析というものを自分の研究に持ち込みたい。この先どう進めていくか、データ集めるという意味でも苦戦している。（２年生男子）

～学校の様々な講座について～

・中学までは英語に苦手意識があった。話すこともできず、筆記やリスニングもあまり良くなかった。高校入学後、国際問題に興味があったので、英語のみで進める講座や、名古屋大学主催の講座に参加した。その後、海外渡航の講座で、英語力が足りず最終選考で落ちた。その悔しい思いもあり、今まで以上に英語に触れるようになった。２週間泊まり込みの国際交流の講座に参加し、英語が少し得意になった。（２年生男子）

京都先端科学大学附属高等学校　（管理機関：学校法人　永守学園）

同校は SGH 指定校時に、「国際コース」と「特進 ADVANCED コース」のカリキュラム開発を実施。WWL で更に発展させるとともに、「特進 BASIC コース」・「進学コース」にも展開している。

■探究型学習、海外フィールドワーク・留学、外国語や文理の教科を融合した教科・科目

SGH 指定校時に、国際コースにおいて、探究学習である「KOA Global Studies（以下、KOA 学）」を開発。同時に、特進 ADVANCED コースが「Science Global Studies（以下、SGS）」の開発を開始した。SGS は当初、1年生のみ対象であったが、令和5年度からは2年生にも対象を拡げた。さらに、特進 BASIC コース・進学コースにおいても、新たな探究型学習カリキュラムである「進路探究学習」を開発した。

国際コース	1年	KOA 学Ⅰ	スキルと知識の獲得：MECE、Problem Tree、7steps モデル、データ収集、長期課題研究・発表 等
	2年	KOA 学Ⅱ	世界を舞台に体験・検証：ビジネスモデル開発、ベトナム／フィリピン／フィンランド・フィールドトリップ、イギリス／カナダ長期留学
	3年	KOA 学Ⅲ	Global Issues 解決への取り組み：高校生国際会議「Global Simulation Gaming」、個人課題研究卒業論文（※英文）
特進 ADVANCED コース	1年	SGS	問題発見能力・データ分析・統計学・プロトタイピング・プレゼン力の育成
	2年		語学力・批判的思考力・プレゼン力の育成、イギリス研修旅行
	3年		プレゼン力の育成・進路実現（成果物のまとめ、総合型選抜入試）
特進 BASIC コース・進学コース	1年	進路探究学習	問題発見能力の育成
	2年		問題解決能力の育成とプレゼン力の育成、アメリカ研修旅行

≪KOA 学（国際コース）≫

1年生

1年生では、下地・素地になる力をつける。英語力に加え、色々な形の社会貢献などを外部ゲストを招きつつ学ぶ。海外を拠点にしたビジネスや社会問題解決に取り組む。基本的にグループで活動を行い、プレゼンの技術や協働の仕方を学ぶ。簡単なポスタープレゼンから始まり、夏休み明けから1月まで長期研究に取り組む。1月に課題選択発表会があり、連携校も参加し成果を発表。その成果を2年次のビジネス開発につなげていく。

2年生

1年次に取り組んだ、海外を拠点にしたビジネスや社会問題解決について、長期課題研究（ビジネス開発）によって検証していく。

5月と7月には、希望者を対象にベトナム・フィリピンへの海外研修を実施。また、長期留学がカリキュラムに組み込まれており、全員が9月から7～10ヵ月間、イギリスまたはカナダに留学する。イギリス留学者を対象とした留学中のフィンランド・フィールドトリップも実施している。さらに、留学期間中に探究型学習の成果を卒業論文にまとめる。

ベトナムフィールドトリップの様子

3年生

留学から帰国した後は、1月開催の高校生国際会議の準備を行う（高校生国際会議の内容は後述）。

≪SGS（特進 ADVANCED コース）≫

1年生

テクノロジー、サイエンス、アートサイエンス、ビジネスのいずれかの分野を選択し、探究活動を行う。活動の単位は個人・グループのどちらでもよい。年度末に、発表会を行い、活動の内容を生徒全員で共有する。学校で具体的なテーマは決めず、生徒個人が何に興味を持つかを重視している。生徒それぞれが、世の中の問題解決にどう貢献できるかを考える。

2年生

2年生からは個人での取り組みとなる。1年次の研究の成果を、大学の勉強や将来にいかに発展的につなげていくか、個人で研究する。

≪進路探究学習（特進 BASIC コース・進学コース）≫
1年生
　問題発見能力の育成に向け、地域企業の社会課題の研究などを行う。

2年生
　10月のアメリカへの研修旅行（ホームステイ）に向けて、教員が作成した冊子型の事前学習教材で学ぶ。研修旅行を通じて、地域の課題を世界の課題や観光産業とつなげるためのグループ活動としている。
　帰国後はアメリカでの体験と、1年次からの学びとを比較しながら、個人単位の研究活動につなげる。

京都先端科学大学附属高等学校が掲げる
「生徒が備えるべき９つのスキル」

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

　管理機関である京都先端科学大学と「中高大連携協議会」を月1回実施している。高校の教頭、中高法人の幹事、大学から副理事長や学長室長・顧問、法人本部長、7名で構成している。中高大連携で実施する授業の審議をし、決定されたものに対してそれぞれ準備を行う。
　その他、右記講座を受講する機会を設け、先取り履修ができるようにしている。

京都先端科学大学	京都大学
・Science Global Studies ・KUAS 京都学 ・人文学部特別講座 ・心理学特別講座（夏休み講義） ・看護体験	・iCeMS キャラバン ・哲学対話

■高校生国際会議等

≪高校生国際会議「Global Simulation Gaming」≫
　高校生国際会議として、立命館大学と東京大学が共同開発した「Global Simulation Gaming（以下、GSG）」を本校向けにアレンジした形で、SGH 時から実施している。
　参加するのは国際コースの3年生全員と AL ネットワーク連携校からの参加希望者。9月末のキックオフミーティングに始まり、複数の課題の提出とオンラインセッションを経て、1月の GSG 総会を迎える。総会までのアクター間の交渉、折衝はオンライン会議またはメールのやりとりで進められる。GSG 当日には、アクター間で条約、協定の締結、共同声明の発出、総会による決議文の可決に向けた議論を展開する。

「Global Simulation Gaming」

≪生徒の声≫

～探究型学習等について～

・KOA 学でビジネスプランを考える際、チームのリーダーになることが多かったが、リーダーとしての役割が難しかった。それぞれ熱意や意見が食い違った際、コミュニケーションがとれず、全体の方向性が決まってもうまく伝わらなかった。そこで、チームリーダーに加えて、やりたいこと別にリーダーを作った。やりたいこと別のリーダーがまとめたアイディアの報告を受けて調整を行い、それぞれのリーダーに戻すことで上手くいった。すぐにその工夫ができればよかったが、なかなかそこに行きつかなかった点が困難だった。（３年生男子）

・１年次の SGS で取り組んだ、ロボットのアイディアを競うコンテストで、全国２位を獲れた。結果として、制作意欲が掻き立てられ、表現力に自信が付いた。グループは他に２名おり、役割分担をすることで、お互いの状況を把握しつつ開発をスムーズに進めることの大事さに気づいた。協調性の大切さを学んだ。（３年生男子）

・新聞の見出しを通して、言葉がもつ影響力について探究した。自分が養われたと感じるのはコミュニケーション能力。４人で取り組んだが、それぞれ違う考察が出た。その際、相手の意見を否定するのではなく、一度受け止めてから新たな意見を作る力が養われた。（３年生女子）

～海外フィールドワーク・留学について～

・フィリピンの児童労働や深刻な貧困問題の現実を学んだ。ボランティアに参加し、現地の低所得者向けにお昼の提供を行った。貧困の原因は色々あるとは思っていたが、本当に幅広かった。家庭、人間関係、深い問題であった。（３年生男子）

奈良県立国際高等学校　（管理機関：奈良県教育委員会）

令和2年度に開校した奈良県立国際高等学校は、開校時から、国際社会で活躍できるグローバル人材の育成に重きを置いており、世界にある課題を自分ごととして取り組む「グローバル探究」などのカリキュラム開発を進めている。併設する中学校では、国際バカロレア認定に向けた取り組みも進めている。

奈良県立国際高等学校は国際科単科高校である。同校では、「多様な人々との積極的なコミュニケーションを通し、グローバルな視点でものごとを捉え、国際社会の平和と発展に貢献する資質・能力を育成する」というミッションのもと、WWL 事業の指標とも親和性が高い右記の「6つの力」の育成を目指している。この「6つの力」を育むために、「英語」・「ICT」・「世界の言語」・「グローバル探究」の「4つのまなび」を設定している。

学校設定教科「国際教養」を新たに設定し、教科の中で、複数の科目を融合した内容について英語で探究活動を行う学校設定科目「グローバル探究」や、英語以外の外国語やその文化について幅広く学ぶ「世界の言語」を行っている。

また、「英語」では、高校生国際会議で発表・議論ができ、英語で論文が作成できるようになることを最終目標にしている。全コース共通で総合英語、ディベート・ディスカッション、エッセイライティングを学んでいる。また、海外進学コースでは、英語で他教科を教える「イマージョン理数」（後述）や、「EAP（English for Academic Purposes）」など英語に特化した授業を行っている。

「6つの力」

1. 探究力
知識を活用し課題を解決する力

2. 創造力
新たなアイデアを生み出す力

3. 協働力
協力・協働して互いに高め合う力

4. 寛容さ
文化や考えの違いを大切にする力

5. 挑戦力
試練を克服し前進する力

6. キャリアデザイン力
進路に向けて行動を起こす力

■探究型学習、高校生国際会議等

≪「グローバル探究」 全学年3単位（必修）≫

1年生「グローバル探究Ⅰ」

クラス活動。探究のプロセスを行いながら、世界の問題は自分の問題であると実感し、その問題を解決するのは自分であると意識するよう行動変容を促す授業を行う。

例えば、年度前半には、ワークショップやフィールドワークを通して ESD（持続可能な開発のための教育）の感覚を身につける。年度後半では、地域の魅力及び課題について情報収集を行い、発表しあう。

令和5年度からは、クラス数の減少にともない ESD の基本的な考えのもと、3つのゼミに分ける。

2年生「グローバル探究Ⅱ」

6つのゼミで探究活動を開始。各ゼミには、それぞれ大きなテーマがあり、その中で生徒固有のテーマを決めていく。1つのゼミを教員2名が担当する。担当教員と面談をしながらテーマを決定し、情報収集や3年生との探究交流会などを行う。ゼミ内報告会などを経て、発表及びディスカッションを行う。

2年生「グローバル探究Ⅱ」スタディツアー

3年生「グローバル探究Ⅲ」

6つのゼミで探究活動を継続。探究を深め、7月に実施の高校生国際会議において発表・協議する。高校生国際会議は同校生徒、連携校生徒で構成される生徒実行委委員会が運営しており、奈良県教育委員会が主導して進めている。3年生全員が参加し、発表はゼミの代表が行う。基調講演があり、6つのゼミをベースにした分科会で協議しまとめ、提言する。全て英語で行う。

探究活動のまとめとして、グループもしくは個人で論文を作成する。日本語で論文を作成し、エッセイライティングの授業で英語版を作成する。学内で卒業論文検索サイトを立ち上げたため、卒業生の論文を見ることができる。

≪個人探究週間≫

令和4年度から定期考査を全て撤廃し、個人探究週間を設定した。午前中は講演会やワークショップを行い、「たてにつながる探究交流会」など、全学年がそれぞれ一堂に会し、3年生がファシリテーターとなり探究の内容を共有する活動などを行っている。午後は市役所や公立大へ訪問するなど、様々な個人活動の時間としている。

たてにつながる探究交流会

■外国語や文理を融合した教科・科目

≪世界の言語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ≫

1年生（2単位必修）では、全員が中国語・韓国語・スペイン語・フランス語・ドイツ語の5言語を8時間ずつ学ぶカリキュラムを、全国で初めて開発した。

2年生（2単位必修）では、5言語から1言語を選択し学ぶ。3年生（2単位）は選択科目で履修可能である。また、2・3年生では、全ての授業で日本人教員とネイティブ教員のティームティーチングを実施している。言語だけでなく、その背景文化の多様性を学ぶため、言語間の比較から言語そのものへの意識が高まる。

なお、同校では、世界の言語を学ぶ意義として、下記2点を掲げている。

1. 言語やその背景文化の多様性を学ぶ	2. 言語の比較や規則の推論から言語そのものへの意識が高まる

≪イマージョン理数≫

海外進学コースの3年生の選択科目「イマージョン理数」では、英語で他教科（理数科目）を学ぶ。英語による「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」及び「書くこと」の言語活動を通して、自然の事物・現象に関わり、科学と数学の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行う。また、自然の事物・現象を科学的に探究し、根拠を示しながら考えや判断について的確な説明をして他に理解を得るために必要な資質・能力を育成する。

■海外フィールドワーク・留学

WWL 指定初年度に計画していたシンガポールや中国清華大学への研修は、新型コロナの影響により国内フィールドワーク（令和3年度：九州方面、令和4・5年度：北陸方面）に代替した。令和6年度は韓国への研修や、「世界の言語」の授業でオンライン交流している連携校との現地での交流を予定している。

一部の生徒については、右記の国へ留学を行った。令和4年度から「世界の言語」を設定したこともあり、英語圏以外にも積極的に留学している。

留学先一覧

令和3年度	7名	アメリカ、カナダ、 アイスランド、フランス
令和4年度	6名	アメリカ、フランス、 カナダ、イタリア
令和5年度	9名	カナダ、フランス、 ドイツ、イタリア、アイルランド

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

令和3年度、大阪公立大学・奈良県教育委員会・奈良県立国際高等学校で教育連携に関する協定締結を行った。大阪公立大学の吉田教授を講師に招き、「グローバル探究Ⅰ」の情報分野にて、プログラミング講座やデータサイエンス講座を実施した。プログラミングの授業においては、大阪公立大学の院生がティーチングアシスタントをしている。また、大阪公立大学のゼミに国際高校の生徒が訪問し、課題研究について大学生の前で発表するなど、大学生の刺激にもなっている。

ほかに、「世界の言語」のカリキュラム開発には、奈良教育大学吉村教授の全面的な支援を受けている。立命館アジア太平洋大学や同志社女子大学での研修や授業も行っている。

大阪公立大学の大学生約８０名に探究活動の取組を発表する様子

≪生徒の声≫

～探究型学習について～

・これまでは外国の方と関わる機会が無かったが、探究型学習を通して視点が増えた。自分の生まれ育った環境からの視点だけでなく、他の学校とも関わって、他の視点からのアプローチを考えられるようになった。また、社会問題に関心が持てるようになった。日本の高校生は世界や経済の話はあまりしないが、留学先のフランスでは話していた。意欲関心の面で、自分の力が伸びたと感じる。（３年生男子）

・「物事には答えが無い」ということを強く感じた。中学時の授業では、どんな問題にもすべて答えがあった。しかし、他の視点で見れば、良い面もあれば悪い面もあるということを知った。物事において、メリットの裏側にはデメリットがある。だから答えが無い。探究型学習において、そこに苦労した。（３年生女子）

・奈良県立国際高等学校に入学して、初めてプレゼンテーションを経験した。非常に緊張してプレッシャーを感じたが、他校の生徒との探究活動やプレゼンテーションを通して、自分の思いを主張することが出来るようになった。また、入学してから自分の知識の無さを強く感じた。インターネットの情報をうのみにすることもあった。今も苦戦している。（３年生女子）